岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第136集

南日詰遺跡発掘調査報告書

国道4号拡幅工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

南日詰遺跡発掘調査報告書

国道４号拡幅工事関連遺跡発掘調査

序

広大な面積を有する本県は、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布し、7,300箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化財を保護し、保存していくことはわれわれ県民に課せられた責務であります。

一方、現在の生活を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発、とくにその基幹となる道路網の整備もまた県民の切実な願いであり、本県を縦断する一般国道4号の拡幅は、産業経済発展の大動脈として多方面から期待を担うものであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和のとれた施策が今日的な課題となってきております。当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設の趣旨にもとづき、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

一般国道4号の紫波地区拡幅工事に関連する遺跡は6遺跡があり、すでに4遺跡は調査を終了しておりますが、本報告書は昭和62年・63年度に発掘調査を行った南日詰遺跡の調査結果をまとめたものであります。南日詰遺跡からは縄文時代中期前葉の住居跡や陥し穴状遺構等が発見され、北上川中流域北部における縄文中期前葉の集落解明の貴重な資料になるものと考えられます。

この報告書が一般に広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました建設省東北地方建設局岩手工事事務所、紫波町教育委員会をはじめとする関係各位に心から感謝申し上げます。

平成元年5月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 中　村　　直

例　言

1．本報告書は、岩手県紫波郡紫波町南日詰字滝名川14－27ほかに所在する南日詰遺跡の発掘調査成果のほか、同時に調査を実施した伝善知鳥館跡の調査結果を収録したものである。

2．調査は、一般国道4号の紫波地区拡幅・改築事業に伴う緊急発掘調査である。建設省東北地方建設局岩手工事事務所と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は、次のとおりである。

　南日詰遺跡……遺跡番号ＬＥ77－1086　　遺跡略号ＭＨ87・ＭＨ88

　伝善知鳥館跡……遺跡番号ＬＥ77－2016　　遺跡略号ＤＵ87

4．野外調査は、昭和62年5月1日～6月30日、昭和63年4月9日～5月31日の2ヵ年にわたって実施された。昭和62年度は佐々木嘉直・田村壮一、昭和63年度は佐々木嘉直・高橋義介が担当した。

5．調査面積は、昭和62年度に南日詰遺跡1,900㎡、伝善知鳥館跡500㎡、昭和63年度に南日詰遺跡3,860㎡である。

6．室内整理は、昭和62年12月1日～3月5日、昭和63年12月1日～平成元年1月31日に実施した。昭和62年度は田村壮一、昭和63年度は高橋義介が担当した。

7．検出した遺構は、次のとおりである。

　縄文時代の住居跡…4棟　　陥し穴状遺構…18基　　土坑…10基　　溝跡…24条

8．本報告書の執筆は、昭和62年度分を田村壮一、昭和63年度分を高橋義介が担当した。

9．石質鑑定は、佐藤地質工学研究所の佐藤二郎氏に依頼した。

10．本報告書では、国土地理院発行の50,000分の1地形図、建設省東北地方建設局岩手工事事務所作成の1,000分の1、地形図500分の1用地図を使用した。

11．土層の色調観察には、農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」を用いた。

12．発掘調査及び室内整理に際しては、次の機関の御協力と御教示を賜った。

　建設省東北地方建設局岩手工事事務所、紫波町教育委員会

13．野外調査にあたっては、滝浦正蔵氏をはじめとする南日詰地区16名の方々の御協力をいただいた。

14．本遺跡から出土した遺物及び資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

15．本報告書の編集と校正は、高橋義介が担当した。

本文目次

序
例　言
Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……2
　1．遺跡の位置……2
　2．地形……2
　3．周辺の遺跡……5
　4．基本土層……6
Ⅲ　調査の経過と調査方法……7
　1．調査の経過……7
　2．野外調査の方法……8
　3．室内整理の方法……8
Ⅳ　伝善知鳥館跡……11
Ⅴ　南日詰遺跡……12
　1．検出された遺構……12
　　(1)　縄文時代の住居跡……12
　　(2)　陥し穴状遺構……19
　　(3)　土坑……28
　　(4)　溝跡……33
　2．出土遺物……45
　　(1)　縄文土器……45
　　(2)　平安時代の土器……60
　　(3)　陶磁器……62
　　(4)　石器……62
　　(5)　古銭……67
　3．まとめ……67
　　(1)　遺構について……67
　　(2)　遺物について……71

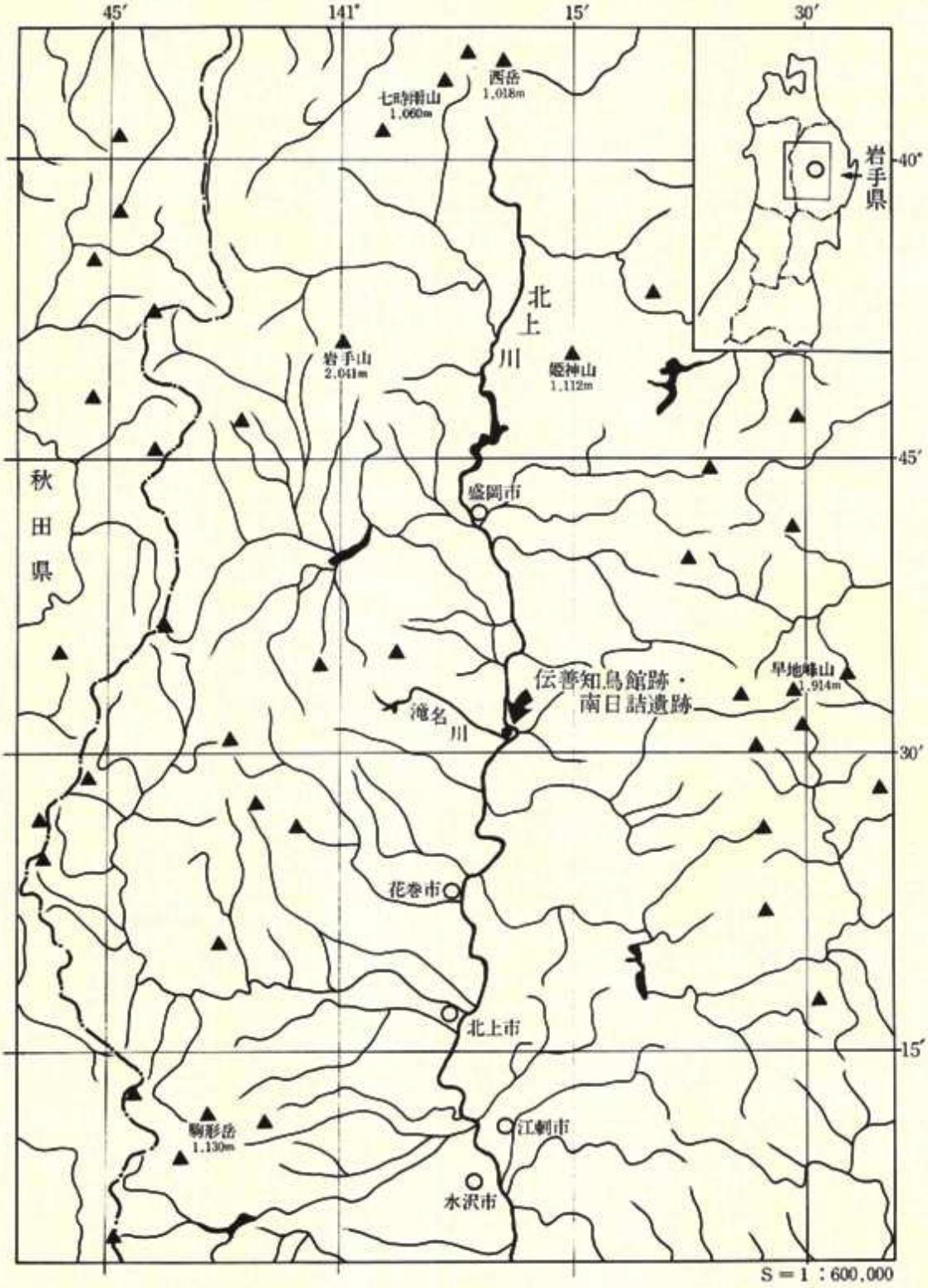
図版目次

第1図　遺跡の位置と北上川水系
第2図　周辺の地形図……3
第3図　地形分類図……4
第4図　基本土層図……6
第5図　遺構配置図……9
第6図　伝善知鳥館跡地域図……11
第7図　F26住居跡……13
第8図　G26住居跡……14
第9図　F27住居跡……17
第10図　F29住居跡……18
第11図　陥し穴状遺構 (1) ……21
第12図　陥し穴状遺構 (2) ……24
第13図　陥し穴状遺構 (3) ……27
第14図　土坑 (1) ……31
第15図　土坑 (2) ……32
第16図　溝跡 (1) ……34
第17図　溝跡 (2) ……35
第18図　溝跡 (3) ……37
第19図　溝跡 (4) ……39
第20図　溝跡 (5) ……41
第21図　溝跡 (6) ……43
第22図　溝跡 (7) ……44
第23図　縄文土器 (1) ……47
第24図　縄文土器 (2) ……48
第25図　縄文土器 (3) ……51
第26図　縄文土器 (4) ……53

第27図　縄文土器 (5) ……55
第28図　縄文土器 (6) ……57
第29図　縄文土器 (7) ……58
第30図　縄文土器 (8) ……59
第31図　縄文土器 (9) ……60
第32図　須恵器・土師器・陶磁器……61
第33図　石器 (1) ……63
第34図　石器 (2) ……64
第35図　石器 (3) ……66
第36図　古銭……67

写真図版目次

図版 1　遠景……77
図版 2　遠景・遺構検出状況……78
図版 3　F26住居跡……79
図版 4　G26住居跡……80
図版 5　E27住居跡……81
図版 6　F29住居跡……82
図版 7　陥し穴状遺構 (1) ……83
図版 8　陥し穴状遺構 (2) ……84
図版 9　陥し穴状遺構 (3) ……85
図版10　陥し穴状遺構 (4) ……86
図版11　陥し穴状遺構 (5) ……87
図版12　陥し穴状遺構 (6) ……88
図版13　土坑 (1) ……89
図版14　土坑 (2) ……90
図版15　溝跡 (1) ……91
図版16　溝跡 (2) ……92
図版17　溝跡 (3) ……93
図版18　溝跡 (4) ……94
図版19　溝跡 (5) ……95
図版20　溝跡 (6) ……96
図版21　溝跡 (7) ……97
図版22　溝跡 (8) ……98
図版23　溝跡 (9) ……99
図版24　調査風景…… 100
図版25　縄文土器 (1) …… 101
図版26　縄文土器 (2) …… 102
図版27　縄文土器 (3) …… 103
図版28　縄文土器 (4) …… 104
図版29　縄文土器 (5) …… 105
図版30　縄文土器 (6) …… 106
図版31　縄文土器 (7) …… 107
図版32　須恵器・土師器・陶磁器…… 108
図版33　石器 (1) …… 109
図版34　石器 (2) …… 110
図版35　石器 (3) …… 111
図版36　古銭…… 112



第１図　遺跡の位置と北上川水系

Ⅰ　調査に至る経過

一般国道４号は東京都中央区から青森市に至る延長814kmの我が国最長の国道であり、東北地方の大動脈となる幹線道路である。岩手県内ではバイパスなど拡幅工事等の改築事業が実施されており、県都盛岡市の南部に位置する紫波地区の拡幅工事は交通混雑の解消を目的に昭和61年度に着手された。同事業は紫波町大字犬渕字上田66－１を起点に同町北日詰字東ノ坊10－16の終点まで総延長2,000m、幅員20～22mであり、平成元年度に完了の予定である。

これに関連する埋蔵文化財包蔵地には伝善知鳥館跡、南日詰遺跡、比爪館跡等の周知の遺跡が所在し、これらの取り扱いについては建設者東北地方建設局岩手工事事務所と岩手県教育委員会との間で協議された。分布調査を含む協議の経過は、以下のとおりである。

昭和59年６月30日付け	建東岩二工第64号による分布調査の依頼
７月11～13日	岩手県教育委員会文化課による分布調査の実施
７月16日付け	教文第230号による現地確認調査結果の回答
昭和61年８月20日付け	教文第291号による昭和62年度における埋蔵文化財関連土木事業等の照会
11月７～８日	岩手県教育委員会文化課による現地確認調査
12月３日	建設省東北地方建設局岩手工事事務所、岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団の３者による埋蔵文化財調査に関する協議

これにより、３遺跡の発掘調査は工事計画に沿って実施することとなり、岩手県教育委員会は調整のうえ、昭和62年度に伝善知鳥館跡500㎡、南日詰遺跡1,900㎡についての調査を岩手県文化振興事業団への委託事業とした。

昭和62年８月24日付け	教文第289号による昭和63年度における埋蔵文化財関連土木工事等の照会
９月10日付け	建東岩二工第78号による回答
12月９日	建設省東北地方建設局岩手工事事務所、岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団３者の埋蔵文化財に関する協議
昭和63年２月25日付け	建東岩二工第21号による発掘調査の依頼

これにより、岩手県教育委員会は昭和63年度に南日詰遺跡3,860㎡、比爪館跡1,200㎡の調査を岩手県文化振興事業団の委託事業にすることとした。

これをうけて当埋蔵文化財センターは、昭和62年４月１日付け及び昭和63年４月９日付け委託契約により、発掘調査に着手したものである。

II　遺跡の立地と環境

1．遺跡の位置

南日詰遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線日詰駅南側約1.5kmの国道4号沿いに位置している。南日詰遺跡の南端に伝善知鳥館跡があり、両遺跡は南北に隣接している。遺跡の所在する紫波町は、県都盛岡市から南方に18km、岩手県の内陸ほぼ中央部にある。町の中央を北上川が南流し、東北本線と国道4号が南北に縦断している。東側は大迫町、西側は雫石町、南側は石鳥谷町、北側は矢巾町・都南村と隣接し、総面積238.32km²である。

国土地理院発行の5万分の1地形図「日詰」（ＮＪ－54－13－15）の図幅に含まれ、北緯39度31分20秒、東径141度9分57秒付近にあたる。また、平面直角座標第Ｘ系ではＸ＝－52,614m～－53,177m、Ｙ＝＋28,571m～＋28,662mにある。

2．地形

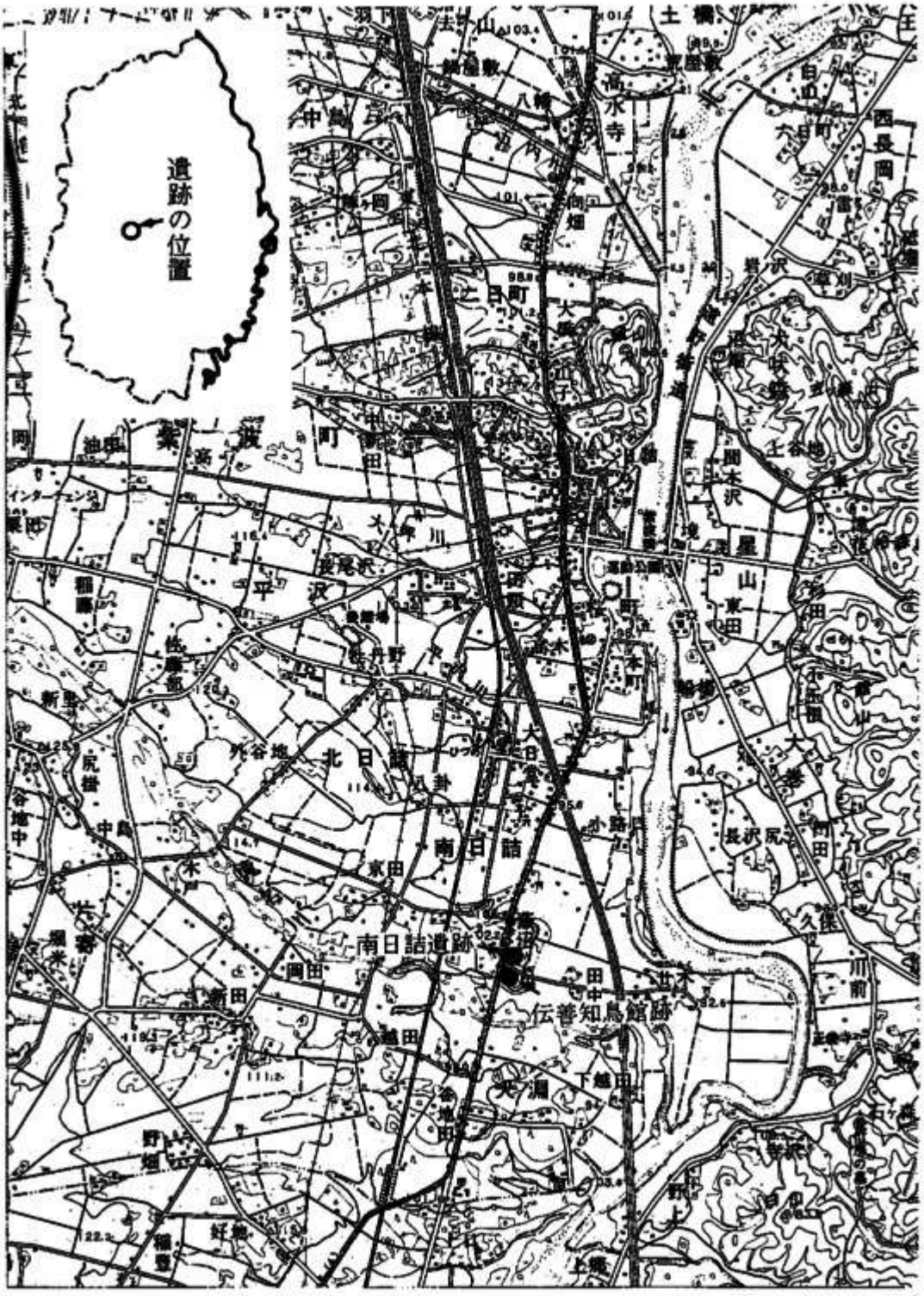
北上川は県北の七時雨山（標高1,060m）に源を発し、北上・奥羽両山系を東西に2分して、北上河谷帯を南北に縦断する全長243kmの大河で、盛岡以北を上流、盛岡～一関間を中流、一関以南を下流域と3区分されている。両遺跡が所在する紫波町は、北上川中流域北部に位置している。

周囲の地勢を概観すると、中央部には南北に北上河岸低地がのびており、東縁を北上川が南流している。東側は丘陵地が北上山地西縁部に連なり、西側は奥羽山脈の山麓から東方に丘陵地と段丘（台地）が広がっている。北上川の以西には、広汎な段丘群の発達が見られる。これは奥羽山脈から流出している滝名川、太田川等の支流によって形成された大小の扇状地や旧河岸が段丘化したものである。これらの段丘は中川久夫氏[註1]らによって、石鳥谷段丘(高位段丘)、二枚橋段丘（中位段丘）、都南段丘（低位段丘）に分けられている。県南地域における西根段丘、村崎野段丘に対比されるものである。

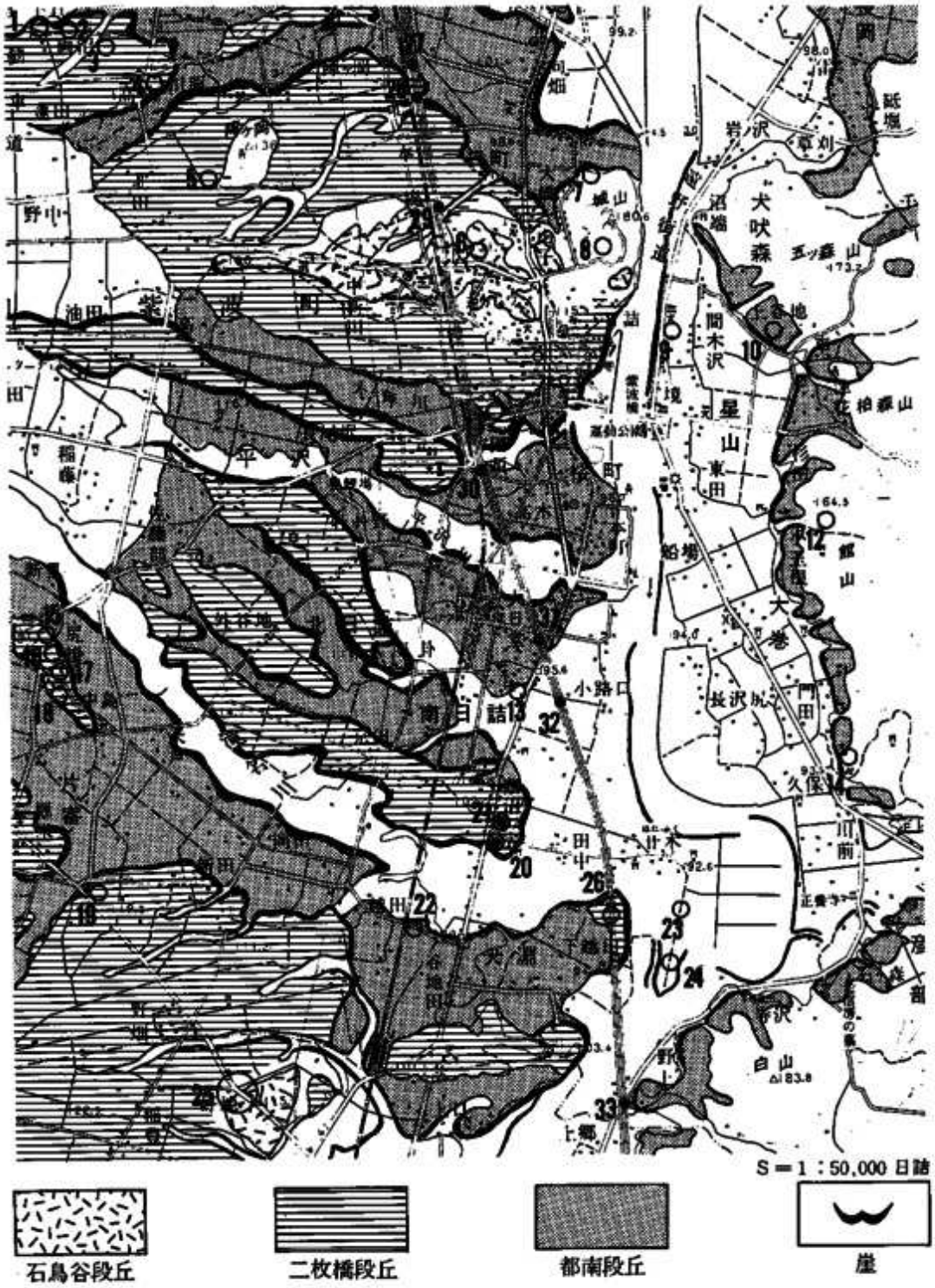
本遺跡は北上川右岸の二枚橋段丘面に立地している。北側と東側には低位の都南段丘や北上河岸低地が広がり、南側は東流する滝名川沿いの低地で区切られている。標高は102m～103mで、低地の水田との比高は7mほどである。

遺跡が載る中位段丘面はほぼ平坦で、一帯は畑地と草地で大部分を占めている。国道4号は南日詰遺跡の中央と伝善知鳥館跡西縁を縦断しており、道路沿いは宅地造成のため削平や盛土による旧地形の改変が著しい。

註1　中川久夫・他（1963）　「北上川中流沿岸の第四系および地形」『地質学雑誌』第69巻第812号



第2図　周辺の地形図



第３図　地形分類図

3．周辺の遺跡

紫波町内における遺跡は、岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧[註1]や全国遺跡地図3岩手県[註2]等によれば256箇所余り登録されている。遺跡数は、道路網整備や地域開発に関連しての詳細な分布調査が近年実施されたことにより増加している。

第3図は、東北新幹線関連遺跡と縄文時代の遺跡を中心とした33遺跡を「全国遺跡地図」3岩手県から抜粋したものである。

縄文時代の多くの遺跡は、低位の都南段丘と中位の二枚橋段丘縁辺部や舌状台地の突端部に立地している。時期は中期・後期が大部分を占めるものの、調査例が少なく実態は明らかではない。東北新幹線関連の㉖西田遺跡からは、縄文時代中期の大木8ａ式期の大規模な環状集落跡が発見されている。集落の中央部には舟底形土壙群が並び、その外周に長方形柱穴列、竪穴住居跡が環状に配置されている。墓域を基本とする集落で、共同墓地・集団墓地としての性格をもつものであろうとされている。遺物は中期の大木8ａ式土器を主体とし、土偶、土製品、石器、硬玉製大珠等が出土している。硬玉の原産地は北陸地方が考えられ、広範な交易を示唆している。

平安時代の遺跡も縄文時代と同様な立地状況を示している。竪穴住居跡が検出されている遺跡は、東北新幹線関連の㉖西田遺跡（平安前半２棟）、㉗杉の上Ⅰ遺跡（平安後半１棟）、㉘杉ノ上Ⅱ遺跡（平安前半３棟）、㉙杉の上Ⅲ遺跡（平安前半４棟、後半１棟）、㉚田頭遺跡（平安前半５棟）、㉝野上遺跡（平安前半１棟）などである。また、徳丹城跡（813年）は本遺跡の北方約9.2kmに所在している。

No.	遺跡名	内容・時代	No.	遺跡名	内容・時代
1	両沼Ⅰ遺跡	散布地・縄文・平安	18	片寄中島遺跡	散布地・平安
2	両沼Ⅱ遺跡	散布地・縄文・平安	19	片寄野畑遺跡	散布地・縄文(後期)・平安
3	両沼Ⅲ遺跡	集落跡・縄文(早・前期)・平安	20	伝善知鳥館跡	館跡・平安
4	太田川原遺跡	散布地・縄文(後期)	21	南日詰遺跡	集落跡・縄文(中期)
5	陣ヶ岡遺跡	集落跡・縄文(後期)・平安	22	片寄越田遺跡	散布地・縄文(中・後期)・平安
6	普念寺山遺跡	散布地・縄文(後期)	23	下川原Ⅰ遺跡	散布地・縄文(中・後期)
7	清水寺Ⅰ遺跡	散布地・縄文(中・後期)	24	下川原Ⅱ遺跡	散布地・縄文
8	二日町吉兵衛遺跡	散布地・縄文(中期)	25	焼場遺跡	散布地・縄文(中期)・平安
9	間木沢遺跡	散布地・縄文(後期)	26	西田遺跡	集落跡・縄文(早・前・中期)・平安
10	大吠森遺跡	散布地・縄文(後期)	27	杉ノ上Ⅰ遺跡	集落跡・平安
11	日詰牡丹野遺跡	散布地・縄文(後期)	28	杉ノ上Ⅱ遺跡	集落跡・平安
12	花立遺跡	散布地・縄文(中期)	29	杉ノ上Ⅲ遺跡	集落跡・平安
13	五郎沼遺跡	散布地・縄文(中・後期)	30	田頭遺跡	集落跡・平安
14	彦部小学校敷地遺跡	散布地・縄文(後期)	31	大日堂遺跡	散布地・縄文(後期)・平安
15	土館尻掛遺跡	散布地・縄文(中・後期)	32	大銀遺跡	散布地・平安
16	尻掛カワラベ遺跡	散布地・縄文(中・後期)	33	野上遺跡	集落跡・平安
17	尻掛Ⅴ～Ⅶ遺跡	散布地・縄文			

註1　岩手県教育委員会（1986）

註2　財団法人国土地理協会（1984）

4．基本土層

調査区域は南北方向に長く、表土の利用状況も異なっている。南側区域は住宅の敷地、中央区域は製材所・宅地、北側区域は宅地・畑地として利用されている。そのため上層部に多少の違いがあるものの、基本的な層序は次の５層に分けられる。

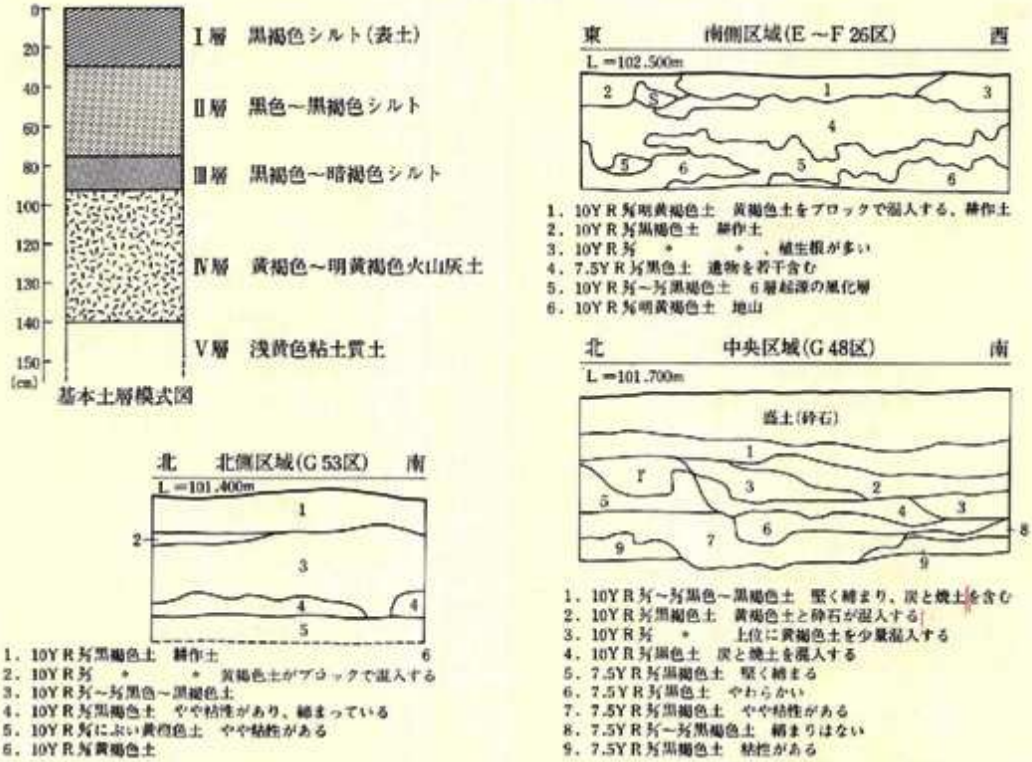
Ⅰ層　黒褐色土（10ＹＲ3/2～3/3）表土で畑地の耕作土、宅地や道路の盛土層である。礫や砕石、木根が多く混じる箇所もある。層厚は30cm～40cmである。

Ⅱ層　黒色～黒褐色土（10ＹＲ3/1～3/2）旧表土を含み、主な遺物包含層である。粘性はなく、下層のⅢ～Ⅳ層が細粒で混入している。中央部では色調がやや赤味が強い。層厚は区域により異なり、30cm～50cmである。

Ⅲ層　黒褐色～暗褐色土（10ＹＲ3/2～3/3）Ⅳ層を起源とする風化層で、黄褐色土がブロック状や粒状で多く混入している。下位は褐色に近くなり、粘性がありよく締まっている。層厚は10cm～20cmで、起伏がある。

Ⅳ層　黄褐色～明黄褐色土（10ＹＲ5/6～5/8）地山の粘土質火山灰層である。粘性に富み、堅く締まっている。層厚は60cm～70cmである。

Ⅴ層　浅黄色土（５ＹＲ7/4～7/3）粘土質土である。深い遺構の底面はこの層まで及んでいる。層厚は不明である。下位に砂礫層が続いている。



第４図　基本土層図

Ⅲ　調査の経過と調査方法

1．調査の経過

発掘調査は、昭和62年に南日詰遺跡の第１次調査と伝善知鳥館跡、翌昭和63年に第２次調査を実施した。以下は調査経過の概略である。

〈昭和62年度調査〉

５月１日(金)　調査器材を搬入して現場設営を行う。刈払いと雑物の撤去作業にとりかかる。

５月２日(土)　南日詰遺跡の数箇所に試掘トレンチを設定し、遺構検出面までの確認と土層断面の観察を行う。

５月６日(水)　両遺跡の調査区画の設定ならびに、区画割りの杭打ちを行う。

５月９日(土)　伝善知鳥館跡調査区の南端部に試掘トレンチを２箇所設定し、11日まで遺構検出作業を行う。試掘の結果、今回の調査区域からは遺構と遺物は検出されなかった。

５月12日(火)　南日詰遺跡の粗掘と遺構検出作業を並行して開始する。表土の厚い箇所と住宅跡のコンクリートや盛土層の除去は、６月10日までの延べ7.5日間重機を使用した。

５月14日(木)　遺構の精査と実測を調査区域南側から開始する。

５月27日(水)　基準点の設置と測量を行う。

６月３日(水)　陥し穴状遺構、溝跡、掘立柱建物跡の精査と実測を行う。

６月27日(土)　岩手県教育委員会文化課の遺跡調査終了確認を受ける。一部埋め戻し作業を重機で行う。

６月30日(火)　器材の搬出を行い、現地を撤収して第１次調査を終了する。

〈昭和63年度調査〉

４月８日(金)　調査器材を搬入して現場設営を行う。

４月９日(土)　調査前の近景写真撮影を行う。調査区域の数箇所に試掘トレンチを設定し、遺構検出面までの深さを確認した。試掘トレンチはE31区から北側に順次実施する。

４月18日(月)　粗掘と並行して遺構検出作業を開始する。表土除去は重機を使用することとし、５月20日までに延べ10日間使用した。

４月28日(木)　溝跡と土坑の精査を開始する。

５月９日(月)　溝跡、陥し穴状遺構、土坑の実測を精査と並行して開始する。

５月27日(金)　国道の西側の粗掘と遺構検出作業を行う。

５月30日(月)　岩手県教育委員会文化課の遺跡調査終了確認を受けた後、埋め戻し作業を重機で行う。調査器材の整理及び梱包をする。

５月31日(火)　埋め戻し作業終了。器材の搬出を行い、現地を撤収する。

2．野外調査の方法

調査区画の設定　本遺跡の調査区域（第５図参照）は、国道４号両側に位置することから比較的幅のある東側区域に任意の基準点１・２を設置し、２点間を見通す直線と基準点を通りこれに直交する直線を座標の基軸線とした。各基準点の平面直角座標値（第Ｘ系）は下記のとおりである。調査区画は基準点１を原点とする４ｍ×４ｍの区画を設け、西側から東側へアルファベットのＡ～Ｉ、南側から北側へ１～143の数字を付した。区画の名称はこれらの組合せによってＡ１、Ａ２区と呼称した。区画の南北線は真北に対し約９度34分東偏している。

基準点１　　Ｘ＝－53,017.682ｍ、Ｙ＝＋28,588.414ｍ

基準点２　　Ｘ＝－52,915.187ｍ、Ｙ＝＋28,605.707ｍ

粗掘　調査区域の半分ほどは宅地跡と道跡で占められており、基礎に用いたコンクリート塊や砂利・砕石の除去作業は、遺構検出面までの深さを把握したのち重機を使用した。

精査　住居跡は４分法、他の遺構は２分法を原則としたが、遺構の重複や検出状況に応じて使い分けた。遺構内出土の遺物は必要に応じて写真撮影や出土地点を図面に記録した。

実測　遺構の平面図は簡易の遣り方測量を設定して行ったが、補助的に平板測量も用いた。実測図の縮尺は20分の１を原則とし、状況に応じて10分の１で作製した。

写真撮影　６×７㎝判１台（モノクロ）と35㎜判２台（モノクロ・リバーサル）を使用した。

3．室内整理の方法

遺物の処理　遺物は水洗、ラベルの記入、接合復元、実測、トレース、写真撮影、遺物図版作成の順に整理を行った。

遺物図版　遺構別に、遺構外出土遺物は種類別に掲載した。縮尺は土器・土器拓影・礫石器が３分の１、剥片石器・古銭が２分の１を原則としたが、器種の大小に応じて適宜縮尺を変えて掲載した。

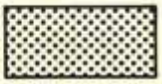
遺構図面　図面は第１原図の点検、修正、合成、トレース、遺構図版作製の順に整理を行った。

遺構図版　図版の縮尺は住居跡60分の１、陥し穴状遺構50分の１、土坑50分の１・80分の１、溝跡は不定である。図版中の調査区域外、撹乱箇所、焼土、切り合いには、次のようなスクリーントーンを使用した。また、石はアルファベットのＳ、土器はＰ、小穴・柱穴はNo.１・No.２で図示している。

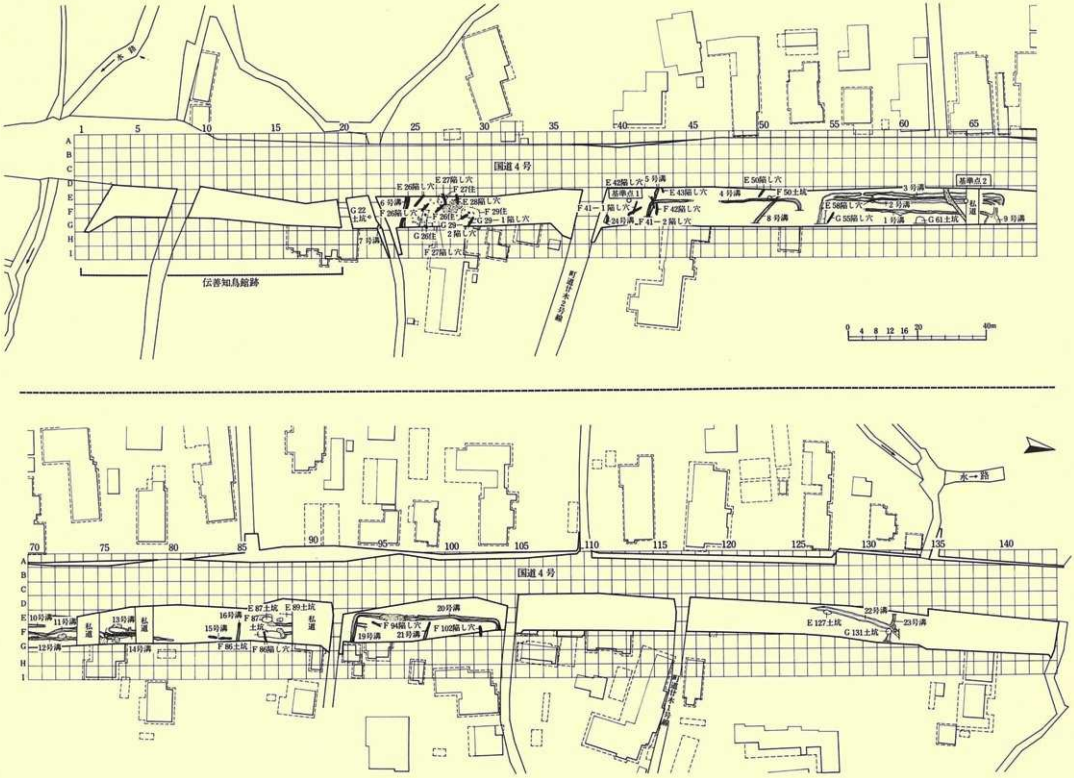
写真図版　縮尺は不定である。遺物番号は遺物図版と符合している。

調査区域外

撹乱箇所


焼　土

切り合い



第５図　遺構配置図

Ⅵ　伝善知鳥館跡

当館跡は、従来から善知鳥館（うとうだて）と伝承される場所である。南日詰遺跡の南側に隣接し、同一段丘面上に位置している。両遺跡の境界は、館跡を囲むように巡る空堀である。国道４号は館跡の西縁をかすめて南北に縦断している。

今回の調査区域は、国道に沿った東側の館跡西縁部にあたる。現状は改変が著しく、調査面積の３分の２はすでに宅地造成のために２ｍ～３ｍ削平されている。調査は残りの南端部で実施した。

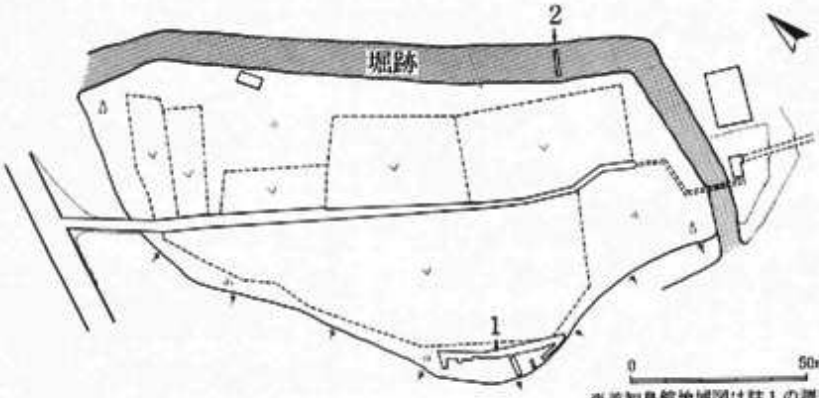
〈調査の結果〉

調査区は、雑草が繁茂し、表面にヒューム管やコンクリート塊、伐採した丸太が半ば埋まりかけていた。旧地形面が残っているかどうかは、トレンチ掘で確認することとした。Ｆ４～６グリットに幅２ｍ、長さ４ｍと12ｍのトレンチを設定して深掘を行う。深さ60cmまで下げたものの砂利層が続き、その時点でこの場所は７ｍ～８ｍ落ち込んで低地へ続く段丘縁辺部斜面の凹地であったことが地区住民から聴取できた。トレンチの試掘結果と合わせて、現地形は厚い盛土層であることが判明した。今回の調査では、館跡に関連する遺構と遺物は確認されなかった。

〈館跡の位置付け〉

安倍頼時の郎従善知鳥文治安方の居館跡と伝えられ遺跡は、昭和38年６月24日～26日までの３日間紫波町教育委員会によって発掘調査されている。報告書[註1]によれば、若干の縄文時代中期の土器片や古代の土師器破片の遺物、柵列跡、濠跡（空堀）等の遺構が検出された。安倍氏時代の柵か、もしくは安倍氏につながりのある有力者の居館であることがほぼ明らかにされている。館跡の構造とそれをとりまく集落との時代考証は、今後の課題であろう。

註１　板橋源・他（1964）　岩手県紫波町善知鳥館調査報告書　　紫波町教育委員会



※善知鳥館地域図は註１の調査報告書から転載
１・２は昭和38年調査のトレンチの位置を示す

第６図　善知鳥館跡地域図

V　南日詰遺跡

1．検出された遺構

本遺跡で検出された遺構は、縄文時代（中期前葉）の住居跡４棟、陥し穴状遺構18基、土坑10基、溝跡24条である。以下順に記述することにする。

（1）縄文時代の住居跡

４棟の住居跡は、調査区域の南側（E・F・G25～30区）に集中して検出された。壁は確認できないものの、炉を中心にして主柱穴が長方形や六角形に配置されている。また、陥し穴状遺構と重複しているが、住居跡より上位で検出されていることから後続する時期と考えられる。

F26住居跡（第13・23・26・29・31図、写真図版３・25・28・31）

調査区域南側に位置し、G26住居跡・F26陥し穴状遺構と重複している。検出は中央の石囲炉が確認されてから柱穴を発見できたものである。平面形は不明である。

炉を囲む柱穴の配置を検討してみると、いくつかの柱穴が並ぶ。No.２・No.15・No.17の柱穴は一直線上にのり、深さも50cm～65cmとそろっている。埋土の堆積状況や特徴も共通している。この３個の柱穴と向かい合って対になるのが、No.20・No.27の柱穴である。No.２となる位置は、F26陥し穴状遺構が床面を壊している場所にあたる。その箇所に１個あったと想定すると、合計６個の柱穴が長方形に石囲炉を囲む配置となる。長軸の方向はN85°Wを示している。長軸の長さは3.5m、短軸の長さは1.6mを測る。その周辺の小穴で当住居跡にかかわりそうなものは、西側のNo.３、東側のNo.18・No.21などがある。柱痕（柱あたり）は断面の観察によっても明確ではなかった。

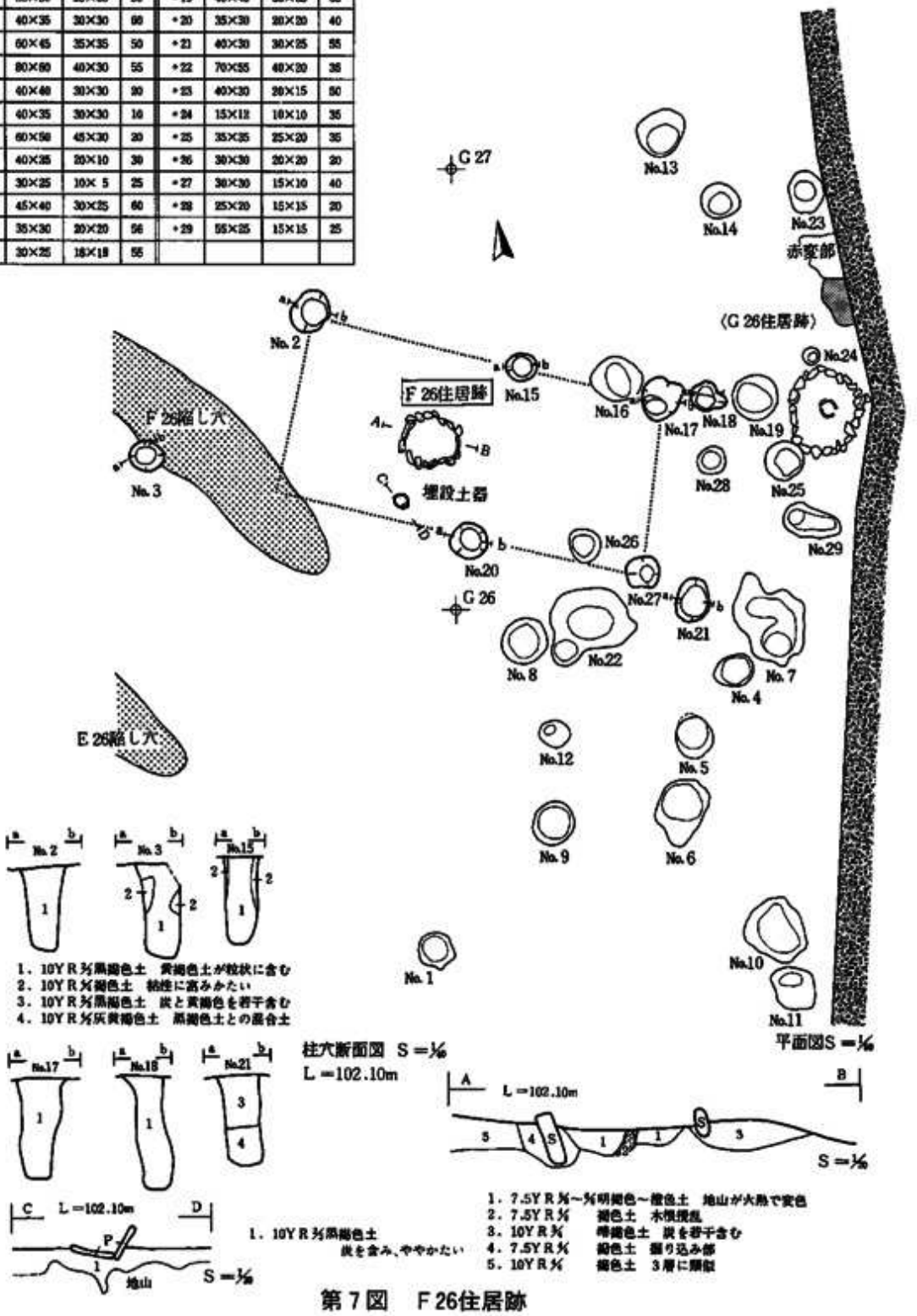
床面は黄褐色土が混入する黒褐色土面であり、上面に炭化物粒と土器が散在している。貼床は認められず、平坦である。

石囲炉は楕円形で、径６cm～15cm大の円礫と角礫を用いてつくられている。規模は60cm×50cmで、長軸は柱穴方向と一致する。礫の大きさに応じて深さを変えて埋め込んでいる。礫は細砂質凝灰岩・琉璃質流紋岩・チャート・輝石安山岩を使用している。底面と礫の上辺部は、火熱によって赤色変化を生じている。

また、石囲炉の南端から40cm離れた所に、土器の底部が浅く正立に埋設されていた。底径12cm、器厚１cmの深鉢の底部（第31図211）で、器表面には上から流れたようなタール状煤の付着が見られる。石囲炉に付随して用いられた土器であろう。

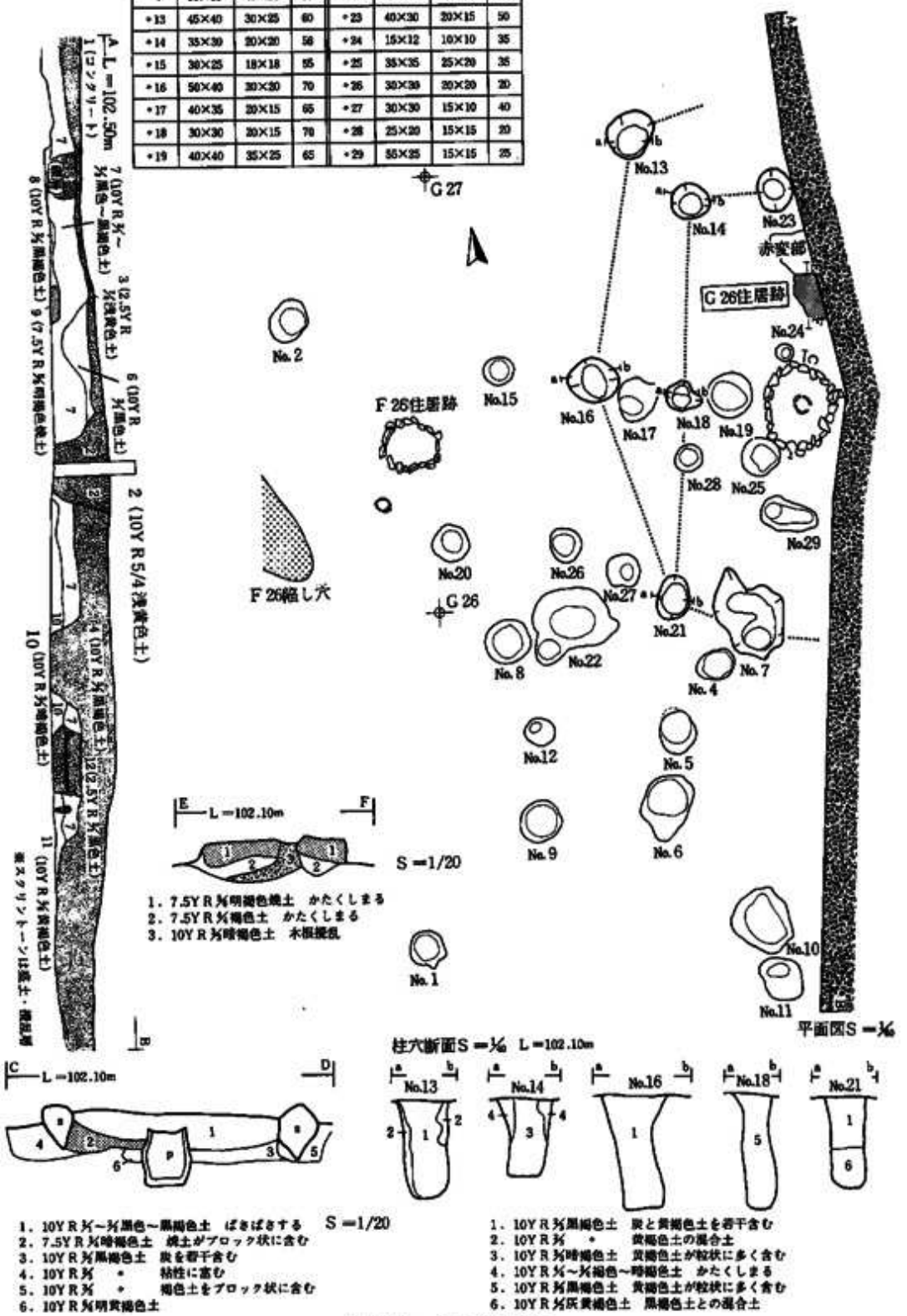
遺物は床面から第23図４・５・24、第26図134、第29図200、第31図209などの土器88点とフレーク類が４点出土している。第Ⅰ群土器（撚糸圧痕文）８点、第Ⅱ群土器（沈線文・刺突文）３点、第Ⅲ群土器（隆線文・貼付文）３点、第Ⅳ群土器（地文・無文）74点である。

柱穴名	開口部径cm	底部径cm	深さcm	柱穴名	開口部径cm	底部径cm	深さcm
No.1	35×35	20×20	20	No.16	50×40	30×20	70
＊2	40×30	25×25	50	＊17	40×35	20×15	65
＊3	30×30	18×18	55	＊18	30×30	20×15	70
＊4	35×30	25×25	50	＊19	40×40	35×25	65
＊5	40×35	30×30	60	＊20	35×30	20×20	40
＊6	60×45	35×35	50	＊21	40×30	30×25	55
＊7	80×60	40×30	55	＊22	70×55	40×20	35
＊8	40×40	30×30	20	＊23	40×30	20×15	50
＊9	40×35	30×30	10	＊24	15×12	10×10	35
＊10	60×50	45×30	20	＊25	35×35	25×20	35
＊11	40×35	20×10	30	＊26	30×30	20×20	20
＊12	30×25	10× 5	25	＊27	30×30	15×10	40
＊13	45×40	30×25	60	＊28	25×20	15×15	20
＊14	35×30	20×20	56	＊29	55×25	15×15	25
＊15	30×25	18×18	55				



第７図　Ｆ26住居跡

柱穴名	開口部径cm	底部径cm	深さcm	柱穴名	開口部径cm	底部径cm	深さcm
No.1	35×35	20×20	20	No.20	35×30	20×20	40
＊4	35×30	25×25	50	＊21	40×30	30×25	55
＊7	80×60	40×30	55	＊22	70×55	40×20	35
＊13	45×40	30×25	60	＊23	40×30	20×15	50
＊14	35×30	20×20	50	＊24	15×12	10×10	35
＊15	30×25	18×18	55	＊25	35×35	25×20	35
＊16	50×40	30×20	70	＊26	30×30	20×20	20
＊17	40×35	20×15	65	＊27	30×30	15×10	40
＊18	30×30	20×15	70	＊28	25×20	15×15	20
＊19	40×40	35×25	65	＊29	35×25	15×15	25



第8図　G26住居跡

G26住居跡（第８・23・27・28・30図、写真図版４・25・29・30・31）

調査区域南側に位置し、遺構の東側半分は調査区域外に延びるため規模・形態は不明である。また西側ではＦ26住居跡と重複するものの、壁が残っていないために前後関係は不詳である。

柱穴は石囲炉を中心に20個程検出され、どの柱穴が伴うものか必らずしも明確ではない。位置と大きさ、深さ、埋土の点から検討し、第８図のような２種の配置が考えられる。柱穴配置の１は、石囲炉に近接して直線上に並ぶNo.14・No.18・No.21の３個と、そこから直角方向のNo.７・No.23の２個、合計５個の配置である。柱穴は埋土に違いがあるものの、開口部径が近似し、深さも50cm～70cmと共通して深い。配置はほぼ長方形になり、長軸の方向はＮ５°Ｗを示している。

柱穴配置の２は、No.13・No.16・No.21を結ぶ線である。３個の柱穴は開口部径が40cm～50cm、深さが55cm～70cmと近似し、埋土は炭と黄褐色土を含んだ黒褐色土である。調査区域外も含めて配置を推定すれば、５～８角形となろう。

この２種の配置の他に、No.13・No.16・No.22・No.６の柱穴を結ぶものも考えられる。その他の小穴は、さらに１～２棟重複している住居跡の柱穴であろうと思われる。

床面は平坦で、西側で重複するＦ26住居跡との段差は見られない。上面には炭化物粒が散在し、堅く締まっている。

石囲炉は、径５cm～15cm大の比較的小さい円礫を用いてつくられている。平面は楕円形で、規模は85cm×75cmである。長軸の方向はＮ5°Ｗを示している。炉の中央には深鉢の底部が10cm程掘り込んで埋置されている。炉の埋土は炭と焼土粒を含む黒色～黒褐色土が堆積する。使用している礫はチャート・玻璃質流紋岩・細砂質凝灰岩・両輝石安山岩溶岩で、上半部は火熱による赤色変化が見られる。

石囲炉の北側80cmに地床炉が検出されたものの、一部は東側の調査区域外に広がっている。床面と同一レベルであることから、本遺構に伴うものであろう。

調査区域外との境界で土層断面（Ａ～Ａ′）を観察したが、撹乱が著しいため壁の立ち上がりは確認できなかった。７層は縄文時代の遺物包含層である。

遺物は床面から第23図１・２・25、第27図172、第28図195、第30図207などの土器120点とフレーク類７点が出土している。土器分類の第Ⅰ群土器７点、第Ⅱ群土器２点、第Ⅲ群土器８点、第Ⅳ群土器103点である。粗掘の際には遺構上部から多量の縄文土器が出土している。

Ｆ27住居跡（第９・31・230図、写真図版５・31・33）

調査区域の南側に位置し、西側の一部は国道４号で削平されているために詳細な規模・形態は不明である。Ｅ27・Ｆ27陥し穴状遺構と重複し、柱穴No.１とNo.３の一部が切られている。遺

構の新旧関係は陥し穴状遺構の方が新しい。

柱穴は土器埋設炉を囲む形でNo.1～20が検出されている。炉に伴う柱穴は明確ではないものの、規模や位置から想定される配列は次のように考えられる。柱穴No.2・3・6・11は1直線上に並び、柱穴No.4・10・15の3本が対応する。後者の列は柱穴の形態・規模ともやや不揃いである。配置は東側中央の柱穴No.5を加えた多角形ないし長方形となり、長軸の方向はN75°Wを示している。柱穴No.2～6・11は埋土の堆積状況や特徴も共通している。他の小穴No.1・7～8・14・16も柱穴と同様な規模を呈することから、別に1棟重複している可能性がある。

床面は平坦で、黄褐色土が混入する黒褐色土が使用面である。貼床は施されていない。

炉は第31図210の深鉢の底部を用いた土器埋設炉であるが、土器をはじめ周辺部も火熱による赤色変化を生じていることから、G26住居跡と同様の石囲炉であったとも考えられる。土器は地山を8cm程掘り込んで埋設している。

遺物は床面から縄文土器9点、第33図230の掻・削石器、フレーク1点が出土している。うち第Ⅲ群土器は2点である。また、柱穴埋土からも第Ⅱ群土器を主体とする14点が出土している。

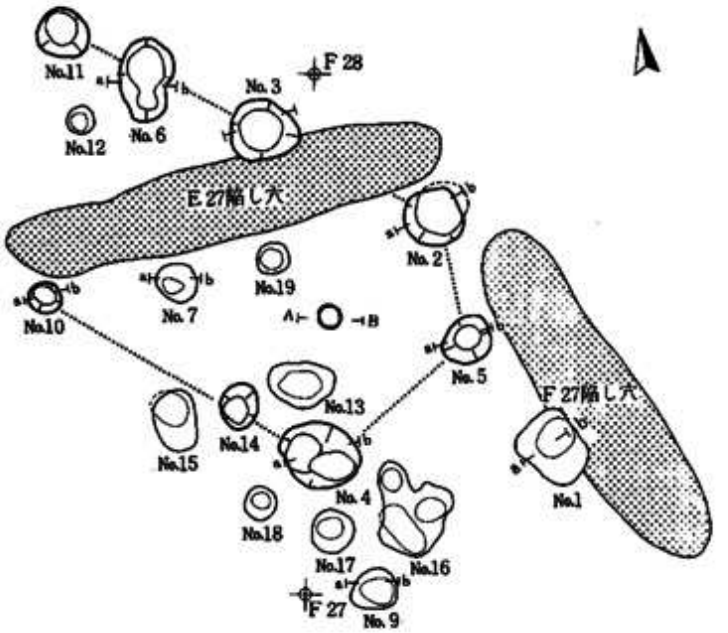
F29住居跡（第10・30・35図、写真図版6・31・35）

調査区域の南側に位置している。粗掘段階で遺物の出土が多い場所であったが、壁は確認できず、石囲炉の検出で遺構の存在が判明したものである。G29－1・2陥し穴状遺構と重複し、床面の一部が切られている。壁が残っていないために平面形は不明である。

石囲炉を囲んでNo.1～13の柱穴が検出された。不規則な柱穴もあるものの、ほとんどが当遺構に関連したものと思われる。柱穴配置はNo.1～3・5～7・9を結んだ6角形になり、対応する柱穴の間隔はほぼ同様である。長軸の長さは5.5m、短軸の長さは3mで、長軸の方向はN3°Eを示している。柱穴の規模は開口部径が30cm前後、深さは50cm～55cmを測る。特に深い主柱穴はNo.1・9を除いた6本である。埋土は黒褐色土を主体としている。

石囲炉は径8cm～25cm大の円礫と角礫を用いてつくられ、礫の内側には同一個体の深鉢破片を敷きつめている。規模は65cm×55cmの楕円形を呈している。礫は床面から15cm程掘り下げて埋設されている。敷きつめられている土器は第30図204の大型深鉢で、その3分の2を使用したものである。底面と側面に重ねてあり、最上部には底部破片が置かれていた。そのままの状態で使用したらしく、土器は火熱を受けて脆くなっている。炉に用いられた礫は、玻璃質流紋岩、細砂質凝灰岩、硬砂岩、両輝石安山岩である。また、第35図250の磨石は炉の縁石に転用したものである。

遺物は石囲炉内の土器と柱穴埋土中から11点出土している。第Ⅱ群土器と第Ⅳ群土器で構成される。



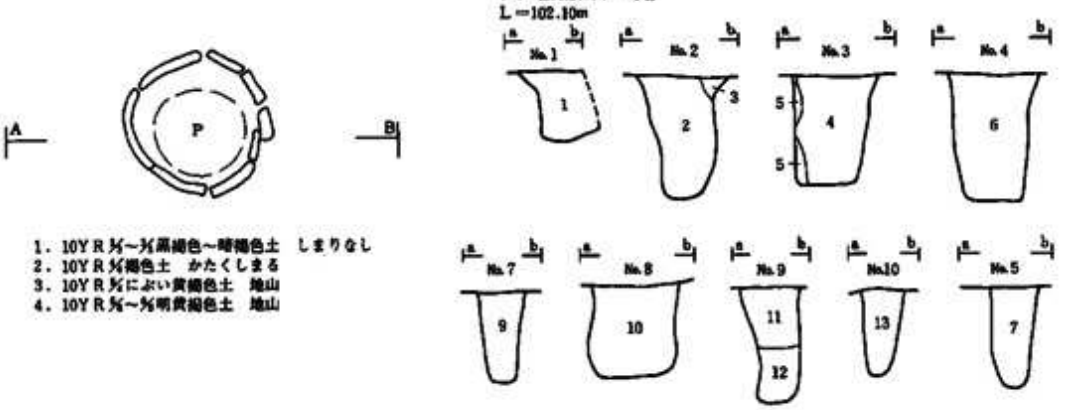
( )は推定値

柱穴名	開口部径cm	底部径cm	深さcm
No.1	55×(50)	30×25	35
No.2	50×45	40×35	65
No.3	55×50	35×30	55
No.4	65×50	40×25	65
No.5	40×35	20×15	50
No.6	65×45	50×30	45
No.7	30×30	15×10	45
No.8	50×40	55×50	50
No.9	35×30	25×20	60
No.10	25×20	20×15	45
No.11	40×35	25×25	50
No.12	20×20	15×15	25
No.13	55×35	35×20	5
No.14	35×25	20×20	40
No.15	50×30	25×25	35
No.16	70×60	45×25	50
No.17	35×30	20×15	10
No.18	25×25	15×15	10
No.19	25×25	15×15	21
No.20	30×25	25×20	34

平面図S＝1/60

柱穴断面図S＝1/40

L＝102.10m

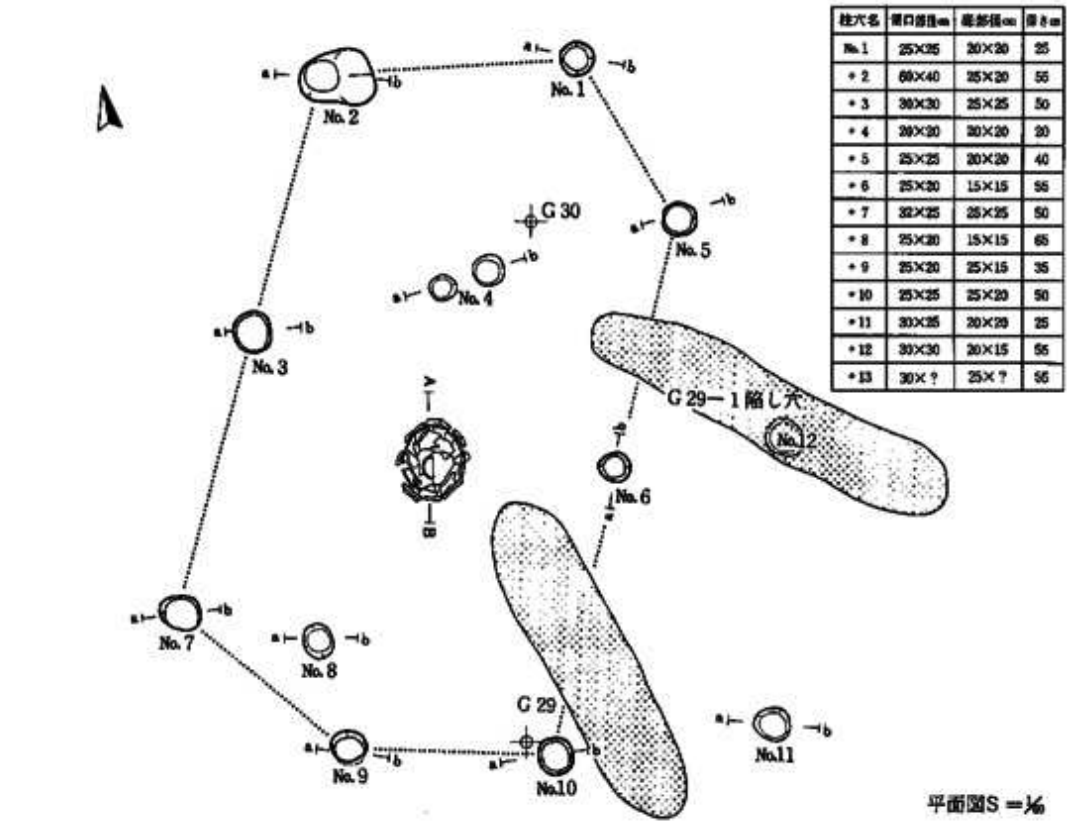


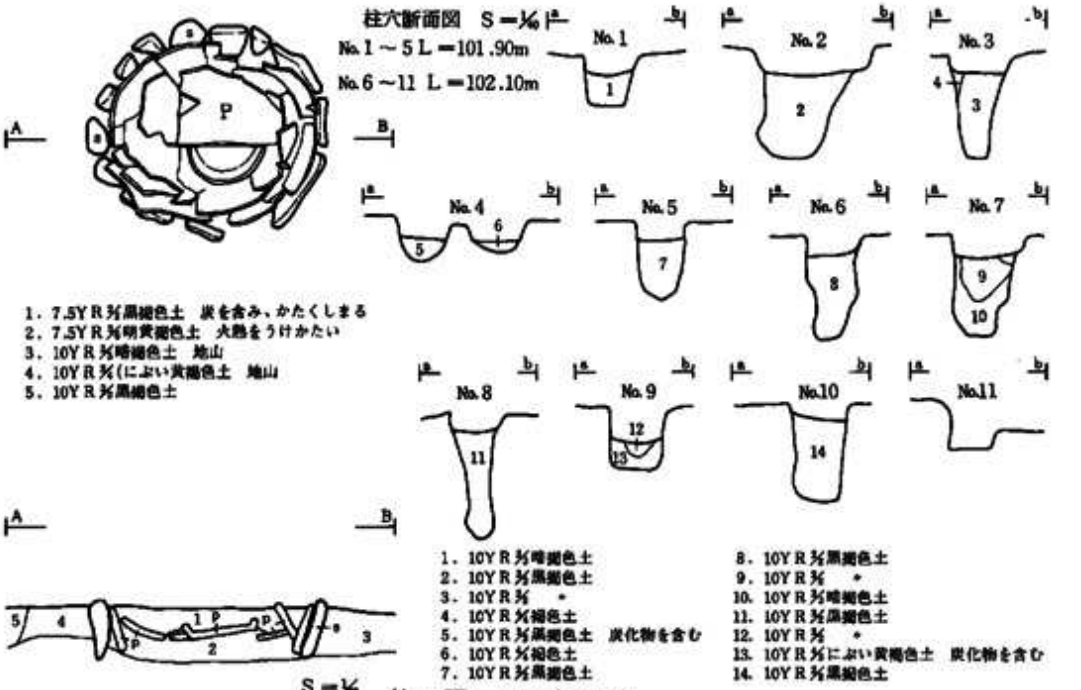
1. 10YR 3/4～3/4黒褐色～暗褐色土　しまりなし
2. 10YR 3/4褐色土　かたくしまる
3. 10YR 3/4にぶい黄褐色土　地山
4. 10YR 5/4～5/6明黄褐色土　地山

1. 10YR 3/4黒褐色土　かたくしまる
2. 10YR 3/4～3/4黒褐色～黒色土　上位かたくしまる
3. 10YR 3/4黒褐色土　かたくしまる
4. 10YR 3/4黒褐色土　上位はかたくしまる
5. 10YR 5/4明黄褐色土
6. 10YR 3/4黒褐色土
7. 10YR 3/4　〃
8. 10YR 3/4　〃　暗褐色土を含む
9. 10YR 3/4　〃
10. 10YR 3/4　〃
11. 10YR 3/4黒褐色土　炭を含む
12. 10YR 3/4～3/4褐色～暗褐色土
13. 10YR 3/4黒褐色土

第9図　F 27住居跡

柱穴名	開口部径cm	底部径cm	深さcm
No.1	25×25	20×20	25
＊2	60×40	25×20	55
＊3	30×30	25×25	50
＊4	20×20	30×20	20
＊5	25×25	20×20	40
＊6	25×20	15×15	55
＊7	32×25	25×25	50
＊8	25×20	15×15	65
＊9	25×20	25×15	35
＊10	25×25	25×20	50
＊11	30×25	20×20	25
＊12	30×30	20×15	55
＊13	30×？	25×？	55





第10図 F 29住居跡

（2）陥し穴状遺構

細長い溝状を呈する陥し穴状遺構は、18基検出された。調査区の南側から中央部に分布するが、南側区域に半数以上が集中している。一部縄文時代中期の住居跡と重複しており、検出状況等から住居跡の方が古いと考えられる。

E26陥し穴状遺構（第11・24・27・33図、写真図版７・26・29・33）

調査区域南側畑地の南西に位置し、西側は国道の東縁に接している。東側２ｍにはＦ26陥し穴状遺構が並列している。平面形は開口部が崩落したため不整な長楕円形を呈し、底部は長方形状にほぼ直線的である。規模は開口部410cm×90cm、底部365cm×25cm、深さ110cm～125cmを測る。長軸の方向はＮ60°Ｗである。壁は崩落のため凹凸が見られる。断面形は、短軸が底部から直線的に外傾して立ち上がり開口部に至る。長軸は垂直に立ち上がっているものの、北西壁は崩れて段を形成している。底面は起状があり、中央部でやや深くなっている。

埋土は４層に分けられる。下層は壁の崩落土主体の暗灰黄色土、中層は黄褐色土、上層は黒色土である。堆積状況は自然に埋没したものである。

遺物は埋土から第24図55、第27図164をはじめとする縄文土器44点と、第33図236の掻・削器１点が出土している。

Ｆ26陥し穴状遺構（第11・23・24・26・27図、写真図版７・25・26・28・29）

調査区域南側畑地の南西のやや中央寄りに位置し、Ｆ26住居跡と重複している。確認されたのが住居跡の床面より上位であり、住居跡より新しいと考えられる。平面形は開口部が崩落したため不整な長楕円形であり、底部では長方形状でほぼ直線的である。規模は開口部315cm×80cm、底部325cm×20cm、深さ100cmを測る。長軸の方向はＮ55°Ｗである。壁は開口部での崩落が大きい。長軸方向の断面でみると、底面はやや凹凸があり、北東半分で10cm程低くなっている。壁は底部からほぼ垂直に立ち上がり、内傾して開口部に至る。短軸の断面は垂直に立ち上がり、開口部で緩く外傾する。

埋土は８層に分けられる。上層は黒色土で、中～下層は壁の崩落土と黒褐色土の互層である。この埋土の堆積状況は自然埋没によるものである。

遺物は埋土から第23図８～10、第24図39・63、第26図138、第27図142・162などの縄文土器88点が出土している。

Ｅ27陥し穴状遺構（第11・23・26・28図、写真図版７・25・28・30）

南側調査区域の西寄りに位置している。Ｆ27住居跡と重複し、床面と柱穴の一部を切っている。また南西側でＦ27陥し穴状遺構と隣接している。平面形は開口部が長楕円形を呈し、底部

は細長い溝状でやや屈曲している。規模は開口部350cm×60cm、底部330cm×10cm、深さ90cmを測る。長軸の方向はN65°Eである。底面は平坦であるが、西方にやや低く傾斜している。短軸の断面は底部から垂直に立ち上がり、中位でやや外傾する。長軸の断面は東端で張らみがあるものの、ほとんど垂直に近い立ち上がりを示している。

埋土は5層に分けられる。上層は遺物を含む黒色土、中層は壁の崩落土、下層は黒褐色腐植土で、全体にやわらかい。自然埋没層である。

遺物は埋土の中～下位から、第23図26、第26図116・120、第28図189などの縄文土器36点、埋土上～中位から縄文土器17点、フレーク1点が出土している。

F27陥し穴状遺構（第11・24・25・27・28図、写真図版8・26・27・29・30）

南側調査区域の中央に位置し、F27住居跡と重複している。平面形は開口部がやや幅広の長楕円形、底部が広めの長方形を呈する。極端に細長いタイプではなく、他の遺構に比べて幅広である。規模は開口部290cm×70cm、底部310cm×20cm、深さ85cm～95cmを測る。長軸の方向はN48°Wである。床面は平坦である。短軸の断面形は底部から垂直に近く立ち上がり、外傾して開口部に至る。長軸の断面形は底部でやや張らみ、内湾又は内傾して立ち上がる。

埋土は6層に分けられる。上層は遺物を含む黒褐色土、中層は大量の崩落土の黄褐色土、最下層は黒褐色土である。自然埋没層である。

遺物は埋土の下位から第24図35、第25図86などの縄文土器22点、埋土の上～中位から第24図60、第25図88、第27図166、第28図178などの土器86点が出土している。

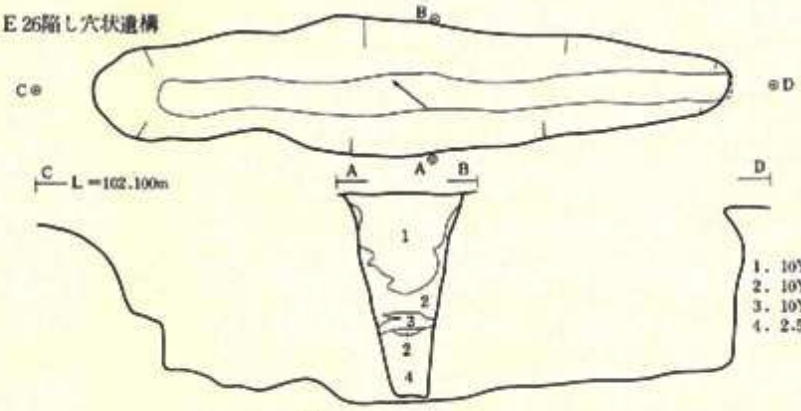
E28陥し穴状遺構（第12・26図、写真図版8・28）

南側調査区域の西寄りに位置している。E27陥し穴状遺構北側3.5mの所に、長軸方向を同じくして並列している。東半分は最近まであった宅地に伴ったゴミ穴によって壊されている。平面形は開口部が幅の狭い長楕円形で、底部は狭い溝状でいくらか屈曲している。壁の大きな崩落は見られない。規模は開口部の推定320cm×50cm、底部295cm×15cm、深さ80～90cmを測る。長軸の方向はN72°Eである。長軸の断面でみると、底部は中央部でやや高まり、両端で緩く波うっている。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。短軸の断面は垂直に近い。

埋土は5層に分けられる。上層は遺物を含む黒色土で、中～下層は壁の崩落土と黒褐色土との互層である。自然埋没層である。

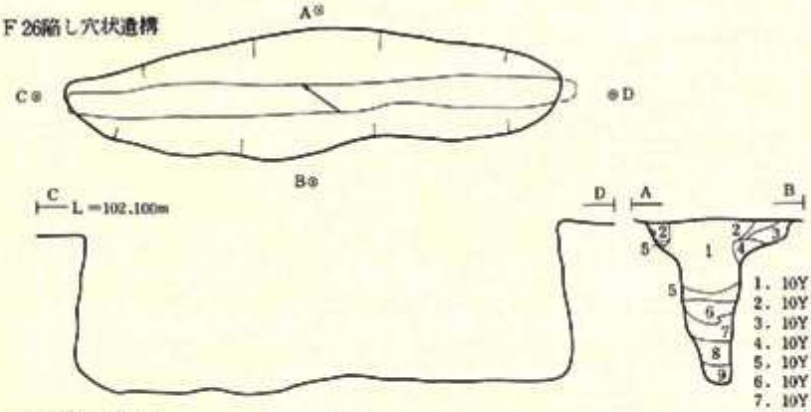
遺物は埋土の下位から第26図115をはじめとする縄文土器7点、埋土の上～中位から21点が出土している。

E 26陥し穴状遺構



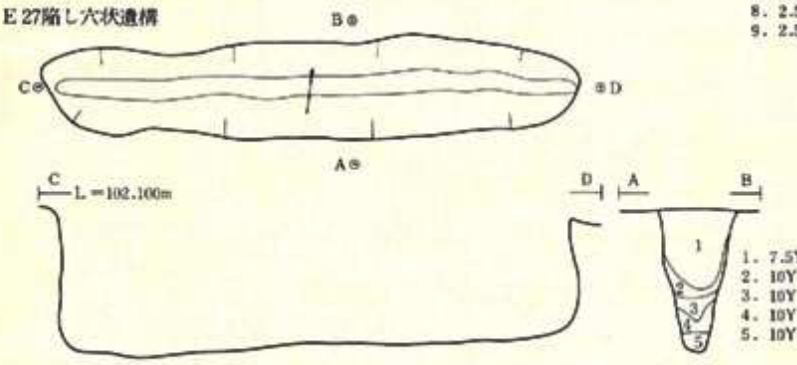
1. 10YR 3/1黒色土　やゝかたく粘性なし
2. 10YR 3/4～5/4黄褐色～明黄褐色土
3. 10YR 3/1黒色土　褐色土が若干混入
4. 2.5Y 5/3暗灰黄色土　淺黄色土の浮れ土

F 26陥し穴状遺構



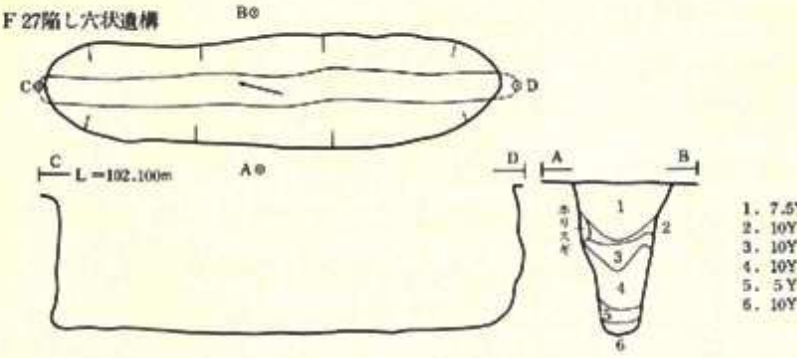
1. 10YR 3/1黒色土　粘性しまりともなし
2. 10YR 3/1黒褐色土　やゝ粘性あり
3. 10YR 5/3暗褐色土
4. 10YR 3/1黒褐色土　褐色土が若干混入
5. 10YR 5/3にぶい黄褐色土　壁崩落土
6. 10YR 3/1黒色土　やゝ粘性あり
7. 10YR 5/3にぶい黄褐色土　5層に同じ
8. 2.5Y 5/3暗灰黄色土　淺黄色土の浮れ土
9. 2.5Y 3/1黒褐色土

E 27陥し穴状遺構



1. 7.5YR 3/1黒色土　遺物を含む、粘性なし
2. 10YR 5/6明黄褐色土　壁崩落土
3. 10YR 5/1にぶい黄褐色土　黒色土が混入
4. 10YR 5/6明黄褐色土　壁崩落土
5. 10YR 3/1黒褐色土　黒色土と淺黄色土の混土

F 27陥し穴状遺構



1. 7.5YR 3/1黒色土　遺物を含む
2. 10YR 3/1黒褐色土　1と黄褐色土の混土
3. 10YR 3/1黒褐色土　2よりも黒色土多い
4. 10YR 5/6明黄褐色土　壁崩落土
5. 5Y 7/3淺黄色土　〃
6. 10YR 3/1黒褐色土　黒色土と淺黄色土の混土

第11図　陥し穴状遺構(1)　　S=1/60

G29－1陥し穴状遺構（第12・24図、写真図版8・26）

南側調査区域の北寄りに位置し、F29住居跡と重複して床面と柱穴の一部を壊している。また南西側1.5mにはG29－2陥し穴状遺構が近接している。東端部の開口部は調査区域外へ延びている。平面形は開口部が長楕円形、底部が極めて狭い溝状を呈している。規模は開口部の推定320cm×60cm、底部295cm×10cm、深さ100cmを測る。長軸の方向はN78°Wである。細い底面は長軸の断面でみると、西端から東端へかけて10cm程高くなり、緩く傾斜している。開口部の検出面も同様である。壁は垂直に近い立ち上がりを示すものの、東端部は内湾してやや膨らんでいる。短軸の断面はやや開くY字状をしている。

埋土は4層に分けられる。上層は遺物を含む黒色土と黒褐色土、中層は壁の崩落土、下層はやわらかい黒褐色土で構成されている。自然埋没層である。

遺物は埋土の下位から第24図57などの縄文土器12点、埋土の中～上位から第24図52・56をはじめとする縄文土器27点が出土している。

G29－2陥し穴状遺構（第12・23～27・29・34図、写真図版9・25～29・31・34）

南側調査区域の北寄りに位置し、F29住居跡と重複して床面の一部を壊している。G29－1陥し穴状遺構と北東側1.5mに近接しているが、長軸の方向はややずれている。平面形は開口部が整った長楕円形で、底部は狭い溝状を呈している。規模は開口部270cm×60cm、底部285cm×15cm、深さ110cmを測る。長軸の方向はN42°Wである。底面は平坦である。長軸の断面でみると底部がやや膨らみ、壁は内傾して立ち上がりそのまま開口部に続いている。短軸の断面はY字状である。

埋土は5層に分けられる。上層は遺物を含む黒色土、中・下層は壁の崩落土と黒褐色土が互層を成し、最下層はやわらかい黒色土で構成される。自然埋没層である。

遺物は埋土の下位から第26図114・133などの縄文土器17点、埋土の上～中位から第23図6・27・30、第24図54、第25図83・84、第26図113・128・135、第27図141、第29図201の復元個体などの縄文土器124点、第34図246の使用痕ある剥片とフレーク7点である。

F41－1陥し穴状遺構（第12図、写真図版11）

南側調査区域の北寄りに位置している。東端部はF41－2陥し穴状遺構と重複し、切られていることから本遺跡の方が古い。また、北側には4号溝とE42陥し穴状遺構が近接している。平面形は開口部が長楕円形で、底部は狭い溝状となっている。規模は開口部380cm×30cm、底部385cm×10cm、深さ63cmを測る。長軸の方向はN84°Wである。底面は凹凸もなくほぼ平坦で、西端部が東端部に比べ28cm程高まっている。短軸の断面は開口部がやや開いたY字状である。

埋土は５層に分けられる。上層は黒色土、中～下層は黒色土とにぶい黄褐色の壁崩落土で構成されている。いずれも自然埋没層の様相を呈する。

遺物は出土していない。

Ｆ41－２陥し穴状遺構（第12図、写真図版11）

南側調査区域の北寄りで、Ｆ42－１陥し穴状遺構と重複して位置している。重複関係は本遺構の方が新しい。北側には４号溝とＥ42陥し穴状遺構が近接する。平面形は開口部が長楕円形、底部は溝状を呈している。Ｆ42－１陥し穴状遺構よりも幅は広くなっている。規模は開口部450cm×48cm、底部455cm×18cm、深さ76cmを測る。長軸の方向はＮ38°Ｗである。底面は平坦を呈し、南東端で僅かに湾曲する。長軸の断面でみると北西側で13cm程オーバーハングし、南東側はやや垂直に開口部へ立ち上がっている。短軸の断面は開口部がやや開くＵ字状である。

埋土は黒色土を主体とする７層に分けられる。上層～中層は黒褐色土で占められ、下層は明黄褐色の壁崩落土、最下層は砂混じりの黒褐色土である。開口部から流れ込みの自然埋没層である。

遺物は出土していない。

Ｅ42陥し穴状遺構（第12図、写真図版11）

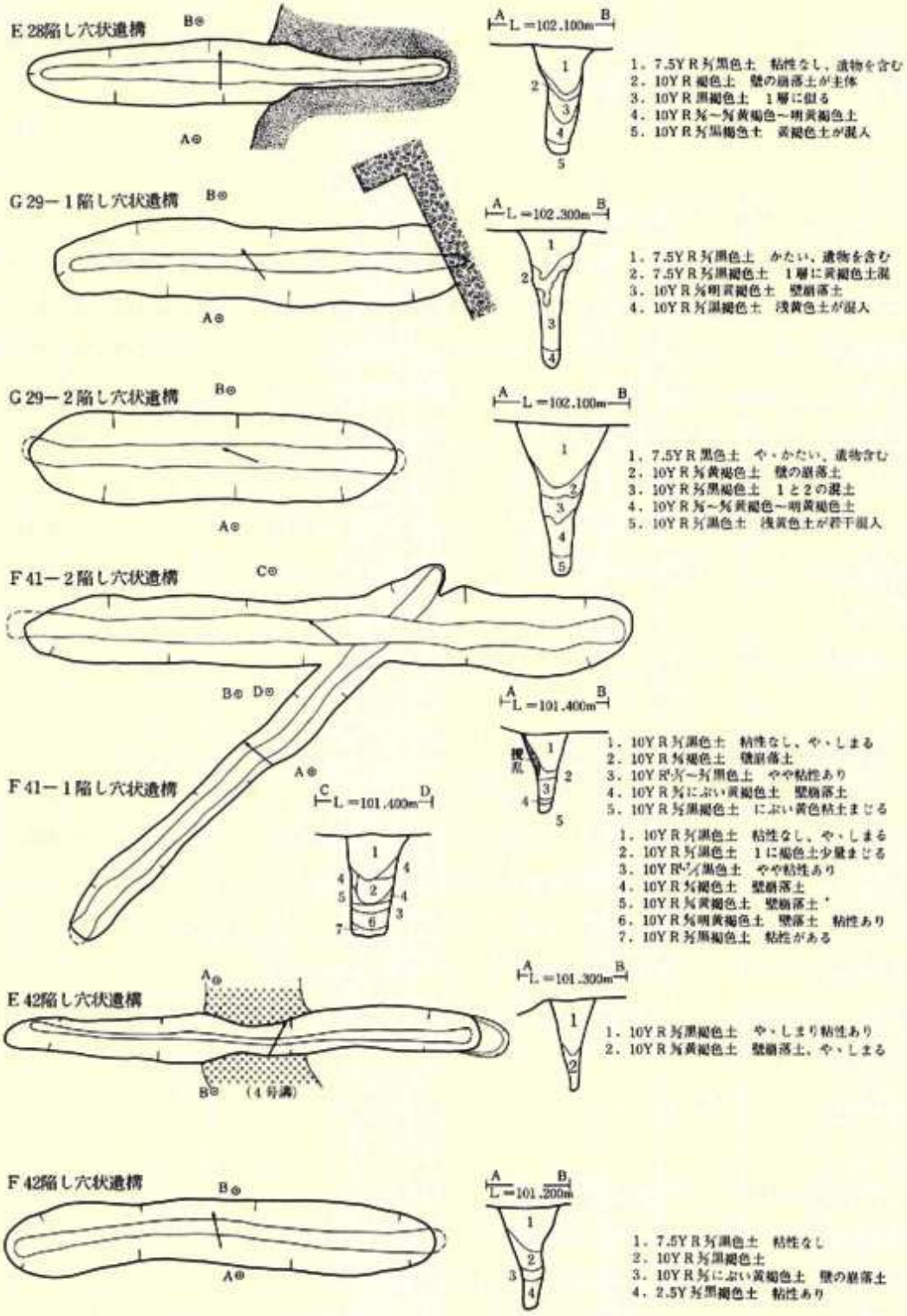
南側調査区域北寄りに位置している。中央部が４号溝と重複し、本遺構が切られていることから溝の方が新しい。北側はＥ43陥し穴状遺構と並列し、南側でＦ41－１・２陥し穴状遺構が近接している。平面形は細長い溝状を呈し、僅かに屈曲している。規模は開口部が350cm×35cm、底部326cm×５cm、深さ70cmを測る。長軸の方向はＮ64°Ｅである。底面は凹凸もなく平坦で、極端に細くなっている。短軸の断面は開口部がやや開くＶ字状である。

埋土は上層がややしまりのある黒褐色土、下層は黄褐色の壁崩落土の２層に分けられる。自然埋没層である。

遺物は出土していない。

Ｆ42陥し穴状遺構（第12図、写真図版９）

南側調査区域の北寄りに位置し、西側で４号溝とＥ42陥し穴状遺構に近接している。平面形は開口部が緩く弧状に湾曲した長楕円で、底部は極めて狭い溝状である。規模は開口部320cm×50cm、底部320cm×10cm、深さ75cmを測る。長軸の方向はＮ79°Ｅである。底部は弧状に湾曲しているが、全体に平坦である。長軸の断面でみると、底部の膨らみはほとんどなく、壁は垂直に近い立ち上がりを示し、短軸の断面はＹ字状を呈している。



第12図　陥し穴状遺構(2)　　S＝1/60

埋土は４層に分けられる。上層は黒色土、中・下層は壁の崩落土と黒褐色土である。自然埋没層である。

遺物は出土していない。

Ｅ43陥し穴状遺構（第13図、写真図版９）

南側調査区域の北寄りに位置し、半分は調査区域外へ延びているため詳細な形態・規模は不明である。南側で５号溝に隣接している。平面形は細い溝状であるが、極端に細いタイプではない。検出した規模は、開口部120cm×35cm、底部115cm×25cm、深さ75cmを測る。長軸の方向はＮ65°Ｅである。底面は平坦で、壁の立ち上がりも垂直に近い。

埋土は４層に分けられる。上層は表土層から続く黒色土と壁の崩落土、下層は黒褐色土、最下層は黒褐色土混じりの黄褐色土で構成され、全体にやわらかい。自然埋没層である。

遺物は出土していない。

Ｅ50陥し穴状遺構（第13図、写真図版10）

中央区域の南側に位置し、北西端部は調査区外に延びている。北東側でＥ50土坑と東側で４号溝と近接している。平面形は細長い溝状を呈し、全体が屈曲し、狭い底部は蛇行している。規模は開口部推定360cm×40cm、底部340cm×15cm、深さ45cm～60cmを測る。長軸の方向はＮ70°Ｗである。底面は長軸の断面でみると中央部がやや高く、両端が15cm程低くなり、小さな凹凸がある。壁は底部で膨らんで内傾し、弱いフラスコ状となる。短軸の断面では壁が垂直に底部から立ち上がっている。

埋土は４層に分けられ、黒褐色土に黄褐色土が間層で入る。自然埋没層である。

遺物は出土していない。

Ｇ55陥し穴状遺構（第13図、写真図版10）

中央区域の南側に位置し、１号溝や３号溝と近接している。平面形は開口部が長楕円形で、底部は極めて狭い溝状である。規模は開口部360cm×40cm、底部310cm×８cm、深さ80cmを測る。長軸の方向はＮ78°Ｗである。底面は平坦で、直線的に細い。長軸の断面でみると壁は東端で垂直に近い立ち上がりを示すが、西端では緩やかに外傾している。短軸の断面はＹ字状を呈している。

埋土は５層に分けられる。上～中層は黒色～黒褐色土と暗褐色土で構成され、下層は浅黄色の壁崩落土である。自然埋没層である。

遺物は出土していない。

E58陥し穴状遺構（第13図、写真図版10）

中央区域の南寄りに位置し、２号溝と重複している。前後関係は不明であるが、重複により開口部の端は壊れている。平面形は開口部がやや不整な長楕円形で、底部は極めて狭い溝状である。規模は開口部340cm×45cm、底部335cm×10cm、深さ90cmを測る。長軸の方向はN20°Wである。底面はやや凹凸がある。長軸の断面と短軸の断面はともに壁が底面から垂直に近い立ち上がりを示すが、北端部で若干の崩落による凹みがある。

埋土は４層に分けられる。上層は黒褐色土、中・下層は黄褐色土の崩落土が主体を占める。自然埋没による土層である。

遺物は出土していない。

F86陥し穴状遺構（第13図、写真図版12）

中央区域の北寄りに位置している。西半部はF86土坑と重複し切られている。東側は調査区域外に延びているため、詳細な形態・規模は不明である。北側にはF87土坑が近接している。平面形はやや細い構状で、検出した規模は開口部330cm×40cm、底部325cm×12cm、深さ58cmを測る。長軸の方向はN70°Eである。底面はほぼ平坦である。短軸の断面は開口部がやや外傾するU字状を呈している。

埋土は６層に分けられ、上層はにぶい黄褐色土、中層は黒褐色と黒色土が混じった黄褐色の壁崩落土、下層は黒褐色土で構成される。いずれも自然埋没層である。

遺物は出土していない。

F94陥し穴状遺構（第13図、写真図版12）

中央調査区の北端に位置している。西側に20号溝、南側が19号溝と近接している。平面形は開口部が長楕円形、底部は溝状である。規模は開口部280cm×50cm、底部278cm×10cm、深さ88cmを測る。長軸の方向はN17°Eである。底面は長軸の断面でみると中央部がやや低くなるほかは平坦で、南西端は５cm程オーバーハングしている。短軸の断面はU字状を呈している。

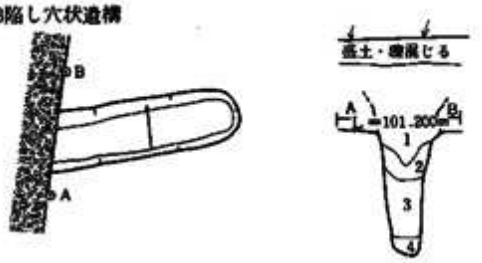
埋土は５層に分けられる。上層は黒褐色土、中層～下層は黄褐色の壁崩落土と黒褐色土の互層である。自然埋没層である。

遺物は出土していない。

F102陥し穴状遺構（第13図、写真図版12）

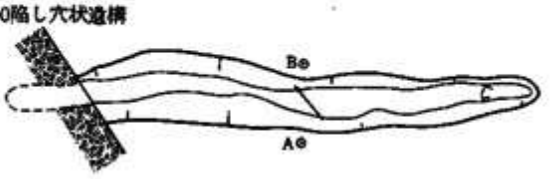
北側調査区域の南寄りに位置し、西側に20号溝が近接している。平面形は開口部が長楕円形、底部が溝状である。規模は開口部365cm×65cm、底部356cm×16cm、深さ95cmを測る。長軸の方

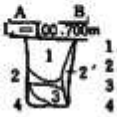
E 43陥し穴状遺構



1．7.5YR⅕黒色土　粘性あり
2．10YR⅝黄褐色土　壁崩落土、かたい
3．7.5YR⅕黒褐色土　柔らかい
4．10YR⅝黄褐色土　黒褐色土が混入

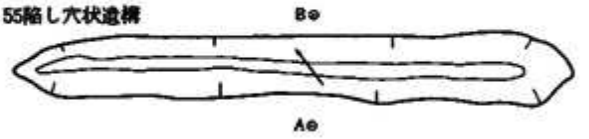
E 50陥し穴状遺構

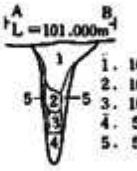




1．2.5Y⅕黒褐色土　粘性なし
2．2.5Y⅝暗褐色土　崩落土、2′は汚れなし
3．7.5YR⅕黒褐色土　粘性あり、柔らかい
4．10YR⅝にぶい黄橙色土　崩落土

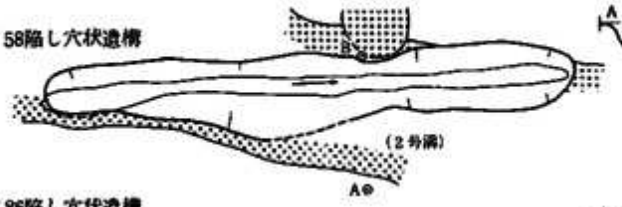
G 55陥し穴状遺構

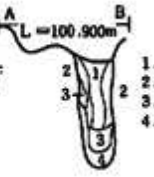




1．10YR⅝～⅝黒色～黒褐色土　柔らかい
2．10YR⅝暗褐色土　柔らかい、浅黄色土混
3．10YR⅝黒褐色土　粘性あり、柔らかい
4．5Y⅝浅黄色粘土と黒褐色土半々の混土
5．5Y⅝浅黄色土　粘土質土、崩落土

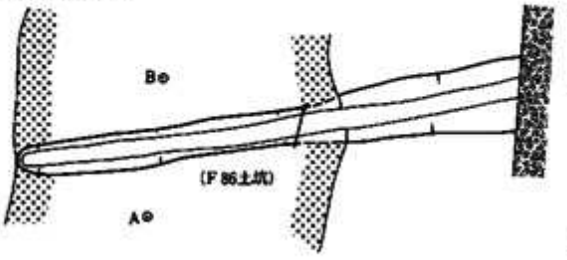
E 58陥し穴状遺構

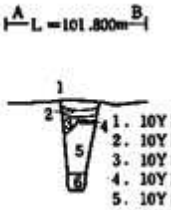




1．10YR⅝黒褐色土　粘性あり
2．10YR⅝～⅝にぶい黄褐色～褐色土
3．10YR⅝黄褐色土　壁崩落土
4．10YR⅝明黄褐色土　壁崩落土

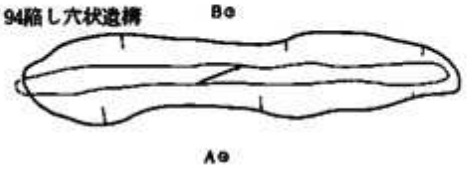
F 86陥し穴状遺構

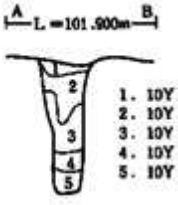




1．10YR⅝にぶい黄褐色土　堅くしまる
2．10YR⅝にぶい黄褐色土　柔らかい
3．10YR⅝黒褐色土　柔らかい
4．10YR⅝黒色土　柔らかい、砂質シルト
5．10YR⅝黒褐色土

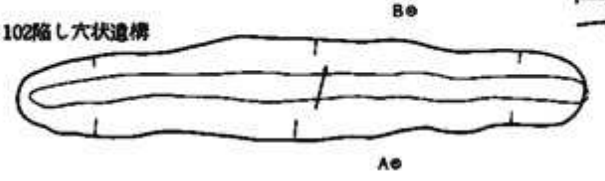
F 94陥し穴状遺構

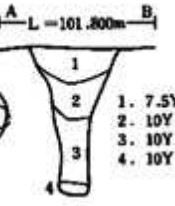




1．10YR⅝黒褐色土　粘性、しまりともなし
2．10YR⅝褐色土　暗褐色の混土
3．10YR⅝黄褐色土　しまりなく、粘性あり
4．10YR⅝黒褐色土　しまり、粘性なし
5．10YR⅝明黄褐色土　浅黄色起源の粘土

F 102陥し穴状遺構





1．7.5YR⅕黒色土　かたくしまる
2．10YR⅝褐色土　黒褐色の混土
3．10YR⅝黄褐色土　壁崩落土、しまりなし
4．10YR⅝黒褐色土　しまりなし、粘性あり

第13図　陥し穴状遺構(3)　　S＝1/6

向はN75°Eである。底面はほぼ平坦を呈し、東端部は僅かにオーバーハングをしている。短軸の断面は開口部が開いたY字状を呈している。

埋土は4層に分けられ、上層は黒色～褐色土、中層は黄褐色の壁崩落土、下層は黒褐色で構成される。開口部から流れ込んだ自然埋没層である。

遺物は出土していない。

（3）土坑

検出された土坑10基のうち、1基は縄文時代と推定され、他は時期不明である。

G22土坑（第14図、写真図版13）

南側調査区域の南端部に位置している。伝善知鳥館跡との境界にあたり、7号溝と近接している。平面形は円形で、断面形はビーカー形である。規模は開口部80cm×75cm、底部65cm×55cm、深さ50cmを測る。底面は平坦で、副穴等はない。壁には不規則な崩落は見られず、底面から垂直に立ち上がっている。

埋土は5層に分けられ、全体にかたくしまっている。黒褐色土が大半を占め、壁際には暗褐色土や壁の崩落土が堆積する。最下層はやわらかい黒色土である。各層には粒状の黄褐色土が混入することなどからみて、自然埋没による土層である。遺物は出土しないものの、他の遺構埋土とは全く異なり、かたくしまっていることから縄文時代の遺構と推定される。

F50土坑（第14図、写真図版13）

中央調査区域の南寄りに位置し、4号溝や8号溝に隣接している。平面形は円形で、断面形はビーカー形である。規模は開口部70cm×70cm、底部65cm×60cm、深さ20cmを測る。検出面は表土下80cmであり、実際には1m程の深さが推定される。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がっている。

埋土は2層に分けられる。径2～3cmの小石混じりの黒褐色土と、汚れた地山の黄褐色土で構成される。1層から丸釘が出土していることから、近代以降のものと思われる。

E50土坑（第14図、写真図版13）

中央調査区域の北寄りに位置し、4号溝の下位に重複して検出された。F50土坑と同様に検出面がかなり下がってから確認された土坑である。溝との前後関係は、検出の順からみて当遺構が古いといえる。F50土坑や8号溝に近接している。平面形は円形で、浅いビーカー形の断面形を呈している。規模は開口部140cm×135cm、底部130cm×125cm、深さ10cmを測る。底面は壁際の周辺が幅20cm程で一段低く、中央は5cm程高くなっている。底面では浅い周溝状とな

る。壁は底面から垂直に立ち上がっている。

埋土は2層に分けられ、上層は黒色土、下層は地山の汚れた灰白色粘土質土である。黒色土中から、近世以降の染付皿の破片が出土している。

G61土坑（第14図、写真図版13）

中央調査区域の南寄りに位置している。半分は調査区外にあるために詳細な形態・規模は不明である。1号溝が西側に近接している。平面形は円形または隅丸方形と推定される。断面形は鍋底形である。規模は推定開口部260cm、底部185cm、深さ50cmを測る。底面は中央に低くなり、緩やかに湾曲している。中央には径60cm×60cm、深さ20cmの不整な楕円形の凹んだ部分がある。壁は緩やかに底面から傾斜して立ち上がっている。

埋土は黒色土の単層でやわらかい。埋土の最上位から土師質の素焼の細片が小石とともに出土しているが、時期は不明である。

F86土坑（第14図、写真図版14）

中央調査区域の北側に位置し、F87土坑・F86陥し穴状遺構と重複して検出された。F87土坑は陥し穴状遺構を、切っていることから本遺構の方が新しい。西側にはE87・89土坑と17号溝が近接している。平面形は隅丸長方形を呈している。規模は開口部270cm×200cm、底部225cm×155cm、深さ40cm前後を測る。底面は多少の凹凸が見られるものの平坦である。壁は外傾して底面から立ち上がっている。

埋土は5層に分けられ、全体にややしまっている。炭混じりの黒色土が主体を占め、壁際には壁崩落土の明黄褐色土と褐色土が堆積している。遺物は出土していない。

F87土坑（第14図、写真図版14）

中央調査区域の北側に位置し、南側でF86土坑、北側で17号溝と重複して検出された。これらの前後関係は、古い順に17号溝、本遺構、F86土坑となる。平面形は一部に撹乱や削平があるものの、隅丸長方形を呈している。規模は開口部570cm×200cm、底部510cm×170cm、深さ25cmを測る。底面は撹乱による凹凸が見られるほかは平坦である。壁はやや外傾するように底面から立ち上がっている。

埋土は黒色土を主体とする5層に分けられ、上層には炭が混入している。時期を決定する遺物は出土していない。

E87土坑（第15図、写真図版14）

中央調査区域の北側に位置し、F89土坑と重複して検出された。E89土坑との前後関係は、切り合い関係から本遺構の方が新しい。遺構の東・西側は近年の土坑等による攪乱を受けている。平面形は攪乱のため不詳な箇所もあるが、やや不整な楕円形を呈すると思われる。規模は開口部285cm×165cm、底部240cm×110cm、深さ50cm前後を測る。底面はほぼ平坦である。壁は底面から緩やかに立ち上がっている。

埋土は4層に分けられる。上層は微量に炭が混入する黒色土と褐色土、中層は黒褐色土、下層は黄褐色の壁の崩落土が混入する混合土である。遺物は出土していない。

E89土坑（第15図、写真図版14）

中央調査区域の北側に位置し、南側でE87土坑と重複し切られている。北側と西側は道路下位に延びているために詳細な形態・規模は不明である。東側には18号溝が並列している。平面形は隅丸長方形を呈すると思われる。検出した規模は開口部640cm×310cm、底部640cm×250cm、深さ30cm前後を測る。底面は平坦である。壁は緩やかな傾斜で立ち上がっている。

埋土は黒色土を主体とする3層に分けられ、壁際は暗褐色と黒色土の混合土が堆積をしている。遺物は出土していない。

E127土坑（第15図、写真図版14）

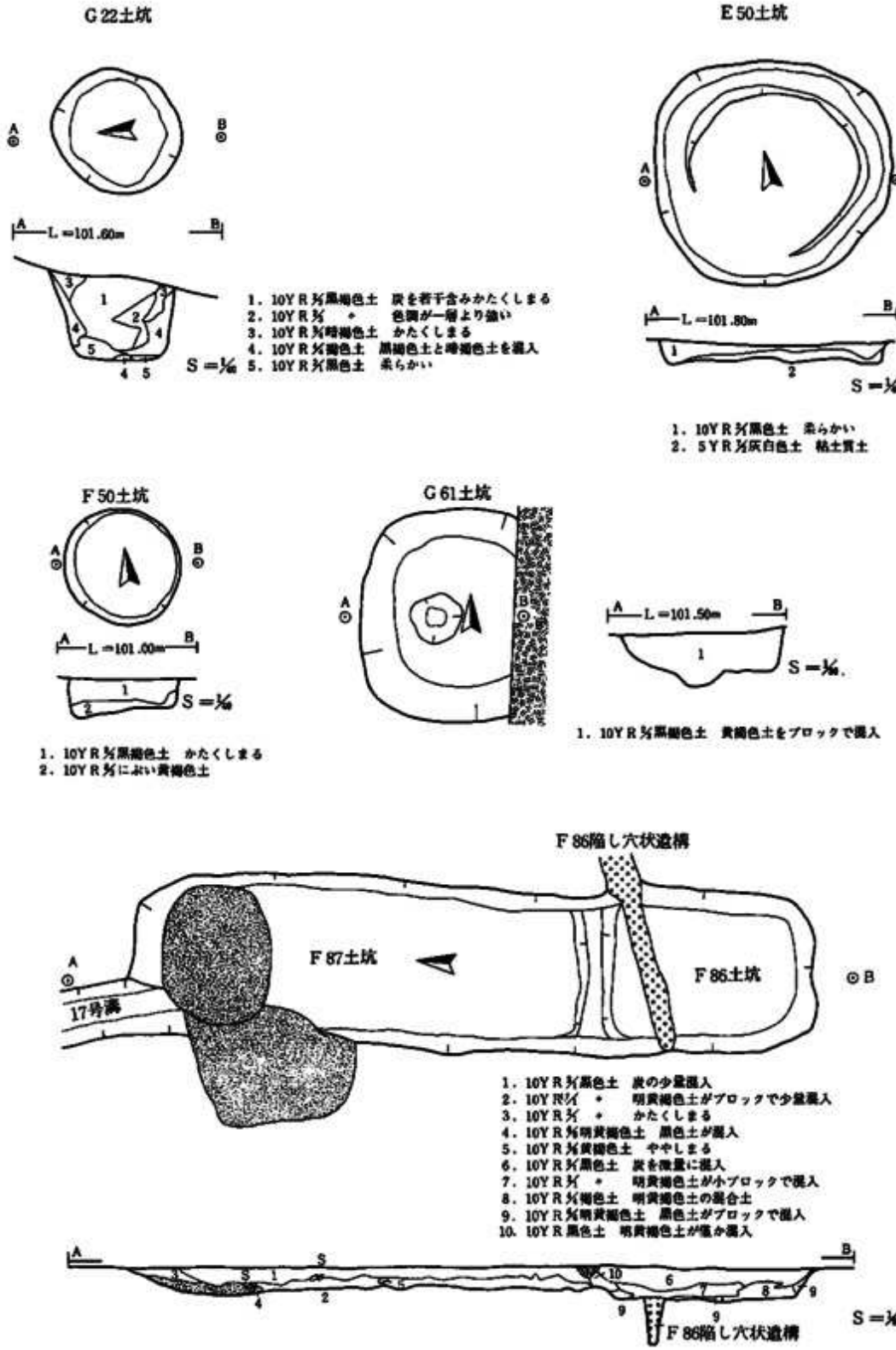
北側調査区域の北寄りに位置している。西側で22号溝と重複しており、溝を切っていることから本遺構の方が新しい。平面形は重複のために詳細な形態・規模は不明であるが、楕円形を呈すると思われる。規模は開口部推定210cm×150cm、底部138cm×96cm、深さ34cmを測る。底面は多少の凹凸が見られ、かたくしまっている。壁は緩やかな傾斜で底面から立ち上がっている。

埋土は黒褐色土を主体とする4層に分けられる。壁際は壁の崩落した褐色土と暗褐色土の互層である。遺物は出土していない。

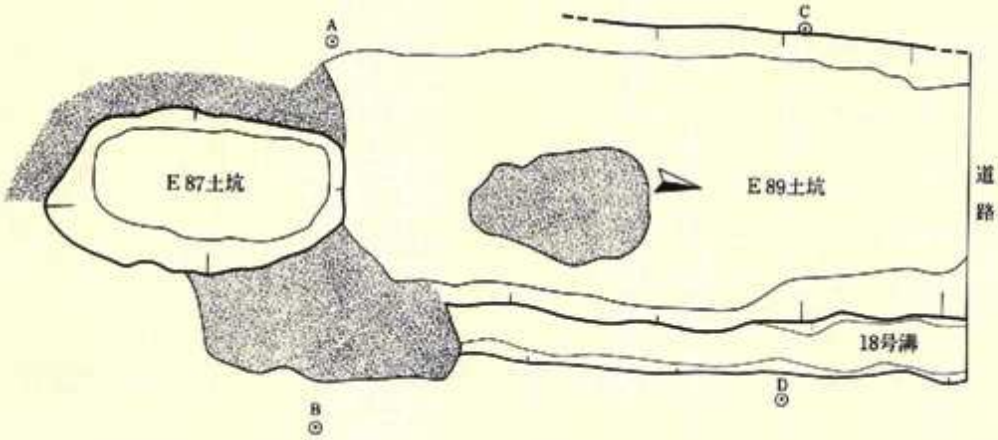
G131土坑（第15図）

北側調査区域の北端部に位置している。南北方向に延びる22号溝と東西方向に延びる23号溝との交差箇所で重複し、溝によって切られている。遺構の大部分は削平され、僅かに下部が現存している。平面形は円形で、断面形は皿状を呈している。規模は開口部165cm×160cm、底部150cm×145cm、深さ45cmを測る。底面は平坦である。壁は垂直に底面から立ち上がる。

埋土は上半部が削平され攪乱をうけているが、黒褐色土を主体とする5層に分けられる。壁際は黄褐色の壁崩落土が堆積している。時期を決定する遺物は出土していない。

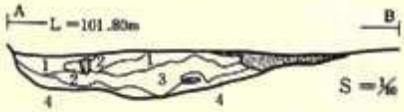

G 22土坑
A
B
A L＝101.60m B
1. 10YR 3/1黒褐色土　炭を若干含みかたくしまる
2. 10YR 3/1　〃　色調が一層より強い
3. 10YR 3/1暗褐色土　かたくしまる
4. 10YR 3/1褐色土　黒褐色土と暗褐色土を混入
5. 10YR 3/1黒色土　柔らかい
S＝1/60
E 50土坑
A
B
A L＝101.80m B
1. 10YR 3/1黒色土　柔らかい
2. 5YR 3/1灰白色土　粘土質土
S＝1/60
F 50土坑
A
B
A L＝101.00m B
1. 10YR 3/1黒褐色土　かたくしまる
2. 10YR 3/1にぶい黄褐色土
S＝1/60
G 61土坑
A
B
A L＝101.50m B
1. 10YR 3/1黒褐色土　黄褐色土をブロックで混入
S＝1/60
F 86陥し穴状遺構
F 87土坑
F 86土坑
A
B
17号溝
1. 10YR 3/1黒色土　炭の少量混入
2. 10YR 3/1　〃　明黄褐色土がブロックで少量混入
3. 10YR 3/1　〃　かたくしまる
4. 10YR 3/1明黄褐色土　黒色土が混入
5. 10YR 3/1黄褐色土　ややしまる
6. 10YR 3/1黒色土　炭を微量に混入
7. 10YR 3/1　〃　明黄褐色土が小ブロックで混入
8. 10YR 3/1褐色土　明黄褐色土の混合土
9. 10YR 3/1明黄褐色土　黒色土がブロックで混入
10. 10YR 黒色土　明黄褐色土が微か混入
A B
S＝1/60
F 86陥し穴状遺構

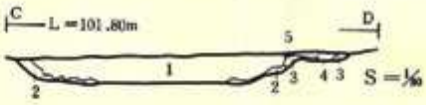
第14図　土坑(1)

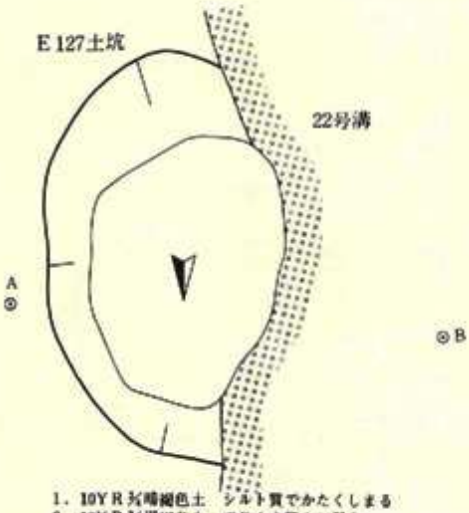


1．10YR 3/1黒色土　微量の炭を混入ししまる
2．10YR 3/1褐色土　黒色土との混合土
3．10YR 3/1黒褐色土　黄褐色シルトが少量混入
4．10YR 3/1　〃　黄褐色土との混合土

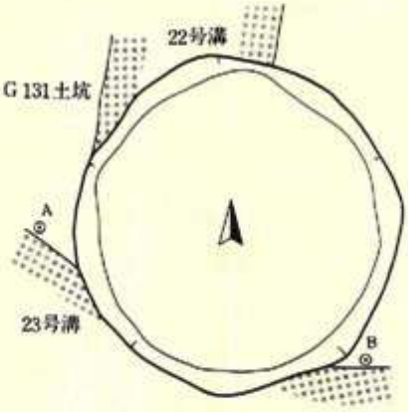
1．10YR 3/1黒色土　シルト質でかたくしまる
2．10YR 3/1暗褐色土　黒色土が少量混入
3．10YR 3/1黒褐色土　黄褐色シルトと混合土
4．10YR 3/1　〃　黄褐色シルトを微量に混入
5．10YR 3/1黄褐色土　黄褐色シルトのブロック



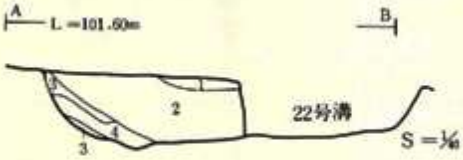


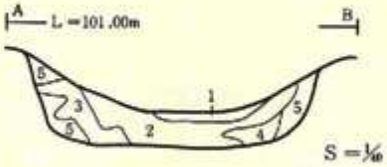


1．10YR 3/1暗褐色土　シルト質でかたくしまる
2．10YR 3/1黒褐色土　褐色土を僅かに混入
3．10YR 3/1褐色土　壁崩落土
4．10YR 3/1暗褐色土　褐色土がブロックで混入



1．10YR 3/1暗褐色土　黄褐色シルトが混入
2．10YR 3/1黒褐色土　〃　が少量混入
3．10YR 3/1褐色土　暗褐色土と黄褐色土の混合土
4．10YR 3/1　〃　黒褐色土がブロック状に混入
5．10YR 3/1黄褐色土　壁崩落土





第15図　土坑(2)

（4）溝跡

溝跡は24条検出されている。南側区域６条、中央区域14条、北側区域４条で、断面形や深さは大きく異なるものはないが、方向は一様ではない。遺構の３分の２は南北方向に、他は東西方向にのびている。

１号溝跡（第16・32図、写真図版15・32）

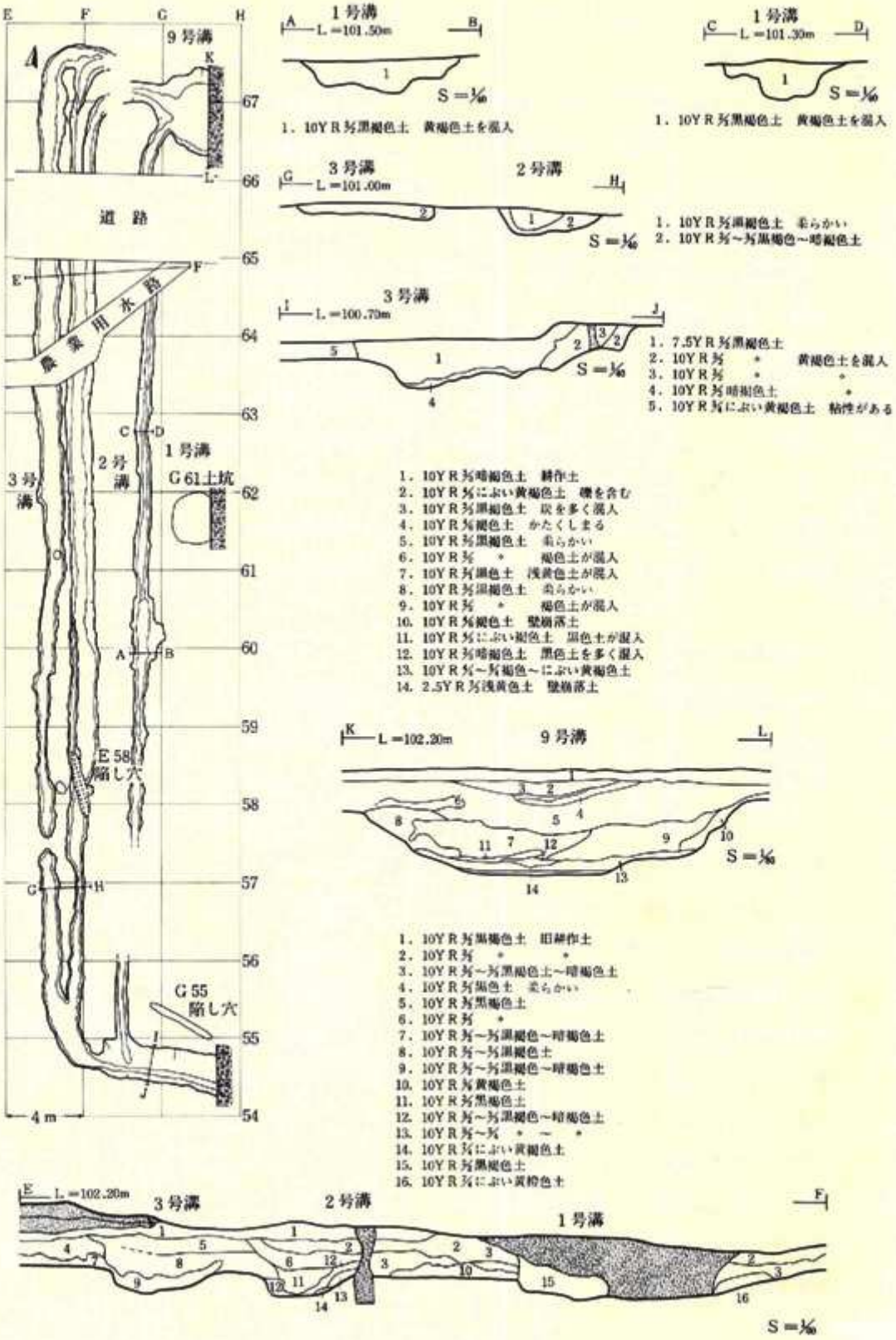
中央調査区域の東寄りに位置している。２号・３号溝と南北方向に並行し、北端は９号溝に続き、南端で３号溝に合流している。検出面は表土下位40cm～50cmの黄褐色土の地山面である。北寄りの一部は終戦直後の農業用水路で壊されている。南側のＦ56・57区で一部途切れる箇所は、本来続いていたものと考えられる。全長は約48ｍ、幅は60cm～90cm、深さ10cm～40cmである。断面形は逆台形又は浅い皿形である。壁面や底面には不規則な凹凸が見られる。

埋土は柔らかい黒褐色土を主体とし、下半部は黄褐色土が小ブロックで混入する。砂質土や泥質土などは全くみられず、水が常時流れたような痕跡は埋土の堆積状況からは観察されない。出土遺物は埋土中から第32図223の鉄釉陶器が２点出土している。近世以降のものである。

２号溝跡（第16・32図、写真図版16・32）

中央調査区域の西寄りに位置し、３号溝と南北方向に並行して検出された。１号・３号溝と同一方向を示している。北端は東側に屈曲して９号溝につながり、南端で３号溝に合流している。表土から50cm～80cm下がった黄褐色土が検出面である。北寄りの一部は農業用水路で壊されている。また、縄文時代のＥ58陥し穴状遺構と重複している。１号・３号溝との前後関係は明確ではないが、検出面の上下関係でみると本遺構が新しいと思われる。全長は３号溝に合流するＥ55区から９号溝まで約52ｍ、幅は80cm～1.2ｍ前後である。深さは15cm～45cm程で、北側へ向かって徐々に深くなっている。部分的にはＥ56・57区のように25cm程の幅になる箇所や、Ｅ66・67区付近では逆に広く浅くなる箇所も見られる。断面形は浅い皿形や逆台形、Ｖ字状と一定ではない。また、Ｅ58区から北半分では底面に１段低い幅30cm～50cm、深さ10cmの溝があり、本遺構はつくり変えがあったものと思われる。断面図でもその低い部分の埋土が異なっている。底面は小さな凹凸があり平坦ではない。

埋土は黒褐色土が主体である。粘性はなく、径２cm～３cm大の小石が若干含まれている。北半分の埋土には、礫や木根の腐植したものが多く混入している。砂質土は全く見られない。遺物は第32図212・213の須恵器２点と鉄釉陶器の体部片１点が埋土から出土している。陶器片は近世以降のものである。

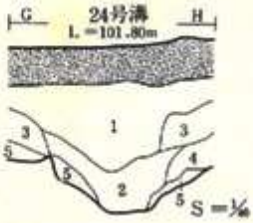

9号溝
道路
農業用水路
1号溝
2号溝
3号溝
G 61土坑
E 58 陥し穴
G 55 陥し穴
4 m
1号溝
L.=101.50m
S=1/60
1. 10YR 3/3黒褐色土 黄褐色土を混入
1号溝
L.=101.30m
S=1/60
1. 10YR 3/3黒褐色土 黄褐色土を混入
3号溝
L.=101.00m
2号溝
S=1/60
1. 10YR 3/3黒褐色土 柔らかい
2. 10YR 3/3～3/4黒褐色～暗褐色土
3号溝
L.=100.70m
S=1/60
1. 7.5YR 3/3黒褐色土
2. 10YR 3/3 〃 黄褐色土を混入
3. 10YR 3/3 〃 〃
4. 10YR 3/3暗褐色土 〃
5. 10YR 3/3にぶい黄褐色土 粘性がある
1. 10YR 3/3暗褐色土 耕作土
2. 10YR 3/3にぶい黄褐色土 礫を含む
3. 10YR 3/3黒褐色土 炭を多く混入
4. 10YR 3/3褐色土 かたくしまる
5. 10YR 3/3黒褐色土 柔らかい
6. 10YR 3/3 〃 褐色土が混入
7. 10YR 3/3黒色土 浅黄色土が混入
8. 10YR 3/3黒褐色土 柔らかい
9. 10YR 3/3 〃 褐色土が混入
10. 10YR 3/3褐色土 壁崩落土
11. 10YR 3/3にぶい褐色土 黒色土が混入
12. 10YR 3/3暗褐色土 黒色土を多く混入
13. 10YR 3/3～3/4褐色～にぶい黄褐色土
14. 2.5YR 3/3浅黄色土 壁崩落土
9号溝
L.=102.20m
S=1/60
1. 10YR 3/3黒褐色土 旧耕作土
2. 10YR 3/3 〃 〃
3. 10YR 3/3～3/3黒褐色土～暗褐色土
4. 10YR 3/3褐色土 柔らかい
5. 10YR 3/3黒褐色土
6. 10YR 3/3 〃
7. 10YR 3/3～3/3黒褐色～暗褐色土
8. 10YR 3/3～3/3黒褐色土
9. 10YR 3/3～3/3黒褐色～暗褐色土
10. 10YR 3/3黄褐色土
11. 10YR 3/3黒褐色土
12. 10YR 3/3～3/3黒褐色～暗褐色土
13. 10YR 3/3～3/3 〃 ～ 〃
14. 10YR 3/3にぶい黄褐色土
15. 10YR 3/3黒褐色土
16. 10YR 3/3にぶい黄橙色土
L.=102.20m
3号溝
2号溝
1号溝
S=1/60

第16図　溝跡(1)

1．10YR 3/1黒色土　かたくしまる

1．7.5YR 3/1黒色土　やゝかたくしまる

1．7.5YR 3/1黒褐色土　かたくしまる
2．7.5YR 3/1褐色土　浅黄色土が混入



1．10YR 3/1黒褐色土　黄褐色土を混入
2．10YR 3/1　〃　シルト質土
3．10YR 3/1　〃　シルト質土でかたくしまる
4．10YR 3/1黒色土　黄褐色土を混入
5．10YR 3/1黄褐色土　黒褐色土との混合土

第17図　溝跡(2)

3号溝跡（第16図、写真図版16）

中央調査区域の西寄りに位置し、国道と同一方向で2号溝と並行している。北端では東へ屈曲して9号溝につながり、南端で1号・2号溝と合流し、東へ屈曲して調査区外へと延びている。表土から80cm下がった黄褐色土が検出面である。北寄りの箇所は農業用水路が横断して壊されている。1号・2号溝との前後関係は不明であるが、埋土が異なることから同時存在ではない。全長は60m程である。幅は70cm～1mであるが、南端東側のE～G54区では1.5m程に広くなっている。深さは15cm～40cmである。E57区では浅くなり、途切れる箇所もある。断面形は浅い皿形や

かまぼこ形を呈している。底面や壁面には小穴や細かい凹凸がある。

埋土は黒褐色土～暗褐色土で構成され、黄褐色土を粒状に含んでいる。遺物は北端部で陶磁器片１点が埋土中から出土している。

4号溝跡（第17・32図、写真図版17）

南側調査区域の北側に位置し、南北方向に長く延びている。南側で５号溝、北側でE50土坑・８号溝と重複している。前後関係は不明である。検出面は表土下位60cmの黄褐色土である。南北両端部は東側へ屈曲して、調査区外へ延びている。F45～47区にかけては浅くなり、途切れている。全長は約43m、幅は30cm～40cmで南端と北端が80cmと広い。南端や北端付近で深さ20cm～25cmを測る。断面形は逆台形や浅い皿状である。底面は１～３号溝に比べてやや平坦である。

埋土は南半部では粘性のある黒色土、北半部は小石が混入する黒褐色土で構成される。遺物は埋土から第32図214の須恵器片１点が出土している。

5号溝跡（第17図、写真図版17）

南側調査区域に位置し、西側は調査区域外に延びている。東側で４号溝と重複している。前後関係は不明である。今回の調査で判明した長さは４ｍである。幅は55cm～60cm、深さ20cmである。断面形は逆台形を呈している。底面や壁面には凹凸が見られる。

埋土はかたくしまった黒色土で構成され、下位には黄褐色土が若干混入する。遺物は出土していない。

6号溝跡（第18図、写真図版18）

南側調査区域の中央部に位置している。調査区を東西方向に横断し、両端部は調査区域外に延びている。全長は東西に8.5m、幅は1.2m～1.3m、深さ30cmを測る。断面形は段をもつ鍋底形をしている。中央部で段差があることから、つくりかえの可能性もある。

埋土は上層が黒褐色土で占められ、下層には黄褐色土がブロック状に混入する。時期を決定する遺物は出土していない。

7号溝（第18図、写真図版18）

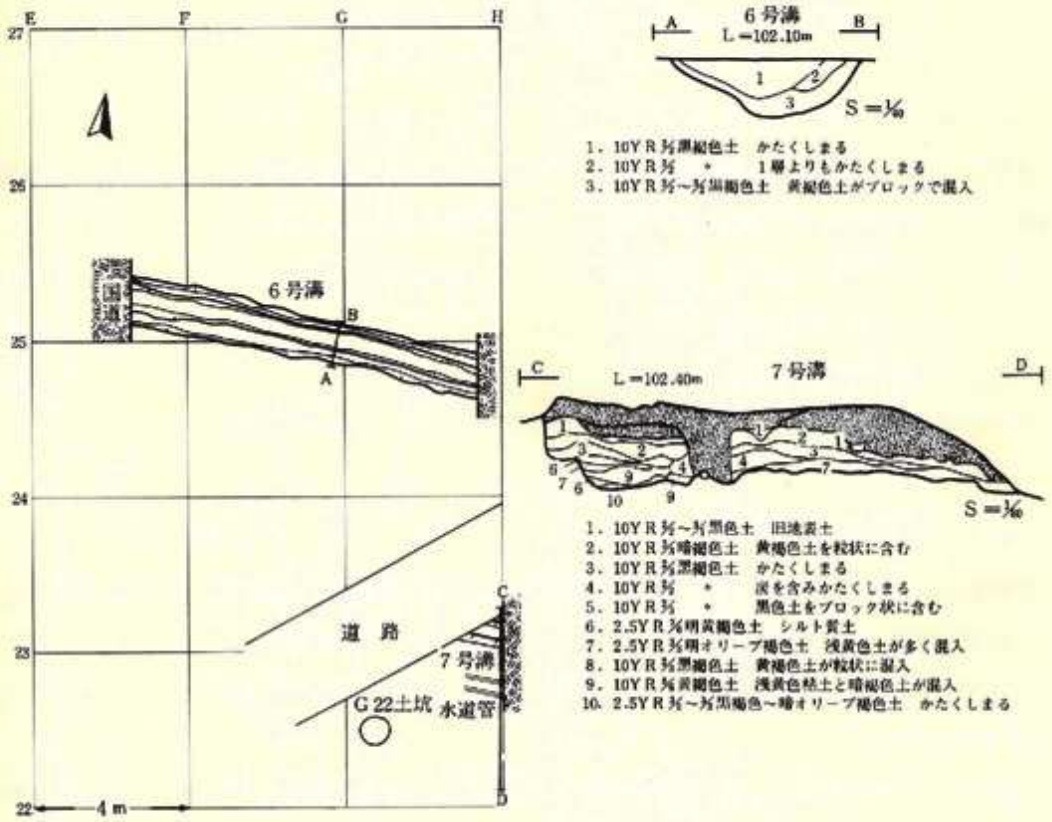
南側調査区域の東寄りに位置し、水道敷設の溝と重複し壊されている。私道の下部と調査区外に延びているために、精査できた長さは1m弱である。北壁側は残っているが、南壁は削平され、撹乱のため不明である。深さは25cmである。

埋土は黄褐色土が粒状に混入した黒褐色土が主体である。遺物は埋土上位で縄文土器片1点が出土している。

8号溝（第17図、写真図版17）

南側調査区域の東寄りに位置し、東側は調査区域外に延びている4号溝と重複しているが、前後関係は不明である。当遺構が4号溝より下層で検出されている。全長は9.5mで、幅は65cm、深さ10cmである。断面形は浅い箱型である。底面は平坦である。

埋土は粘土質の黒褐色土で構成される。遺物は出土していない。



第18図　溝跡(3)

9号溝跡（第16図、写真図版18）

中央調査区の東側に位置している。大部分は東側の調査区域外に延びているため詳細は不明である。1号～3号溝の北端部が屈曲し、本遺構に合流している。検出された規模は全長4.7m、幅2.3m、深さ1.3mを測る。断面形は鍋底形である。壁の立ち上がりは不明瞭で、緩く湾曲をしている。底面は若干の凹凸が見られる。

埋土は14層に分けられる。上層の4層は最近埋め戻された撹乱土である。5層以下は黒褐色土と黒色土を主体とするもので全体にやわらかい。下層には壁の崩落土が多く混入している。下半部の土層は自然埋没と思われる。時期を決定する遺物は出土していない。

10号溝跡（第19図、写真図版19）

中央調査区域に位置し、表土下位34cmの黄褐色土上面で検出された。東側には11号・12号溝が並行し南北方向に延びている。東側は私道の下部に続くために詳細は不明である。全長は約5m、幅は60cm～80cm、深さ15cm～25cmである。壁は底面から外傾するように立ち上がっている。底面は作物等による撹乱の凹凸が見られる。

埋土は黒色土～暗褐色土で構成される。遺物は出土していない。

11号溝跡（第19図、写真図版19）

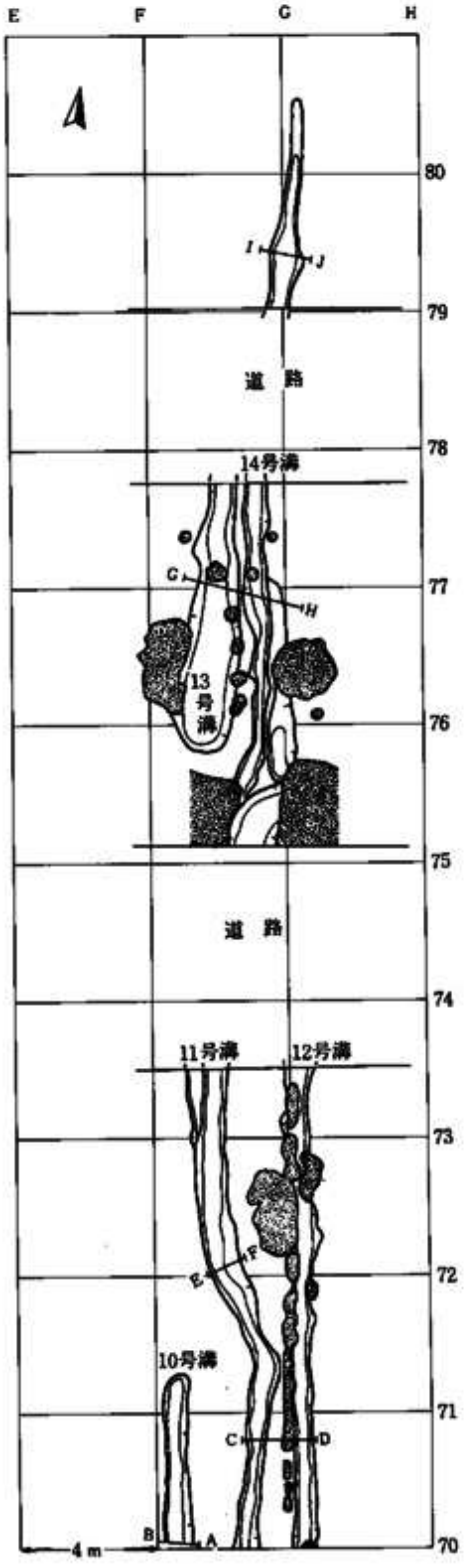
中央調査区域に位置し、検出面は表土下位30cm～40cmの黄褐色土上面である。東側に10号溝、西側に12号溝が並行し、南北方向に延びている。F71区で緩やかに蛇行し、北側で東側へ屈曲して調査区域外に続いている。南側と北側の一部は私道の下部にあたるため詳細は不明である。全長は約22m、幅は撹乱のため一定でなく40cm～1m、深さ10cm～20cmを測る。底面は作物による撹乱の凹凸が著しい。

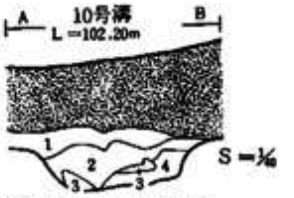
埋土は黒褐色土と暗褐色土を主体として構成されている。遺物は出土していない。

12号溝跡（第19図、写真図版19）

中央調査区域に位置している。検出面は表土下位30cmの黄褐色土上面である。西側には近接して10号・11号溝が並行して南北方向に延びている。また、南北両端部は私道の下部に続いている。全長は14m、幅は50cm～60cm、深さ15cm前後を測る。底面は作物の撹乱が見られるものの平坦である。

埋土は上層がややかたくしまる黒褐色土、下層に壁崩落土の黄褐色土が堆積している。遺物は出土していない。

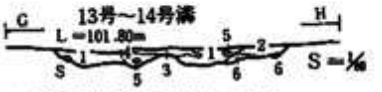




1. 10YR 3/1黒色土　褐色土が細粒で混入
2. 10YR 3/1　〃　しまりはなく柔らかい
3. 10YR 3/1　〃　褐色土がブロックで少量混入
4. 10YR 3/1暗褐色土　壁の崩落土

1. 10YR 3/1黒褐色土　ややかたくしまる
2. 7.5YR 3/1黄褐色土　壁の崩落土

1. 10YR 3/1黒褐色土　褐色土を小ブロックで混入
2. 10YR 3/1暗褐色土　褐色土の混合土
3. 7.5YR 3/1褐色土　かたくしまる



1. 10YR 3/1黒色土　ややしまっている
2. 10YR 3/1黒褐色土　黒色土と褐色土の混合土
3. 10YR 3/1　〃　褐色土が少量混入
4. 10YR 3/1　〃　褐色土が微量に混入
5. 10YR 3/1暗褐色土　黒色土が少量混入
6. 10YR 3/1黄褐色土　壁の崩落土

1. 10YR 3/1～3/1黒褐色土～暗褐色土　褐色土を小ブロックで混入
2. 10YR 3/1黒褐色土　ややしまっている
3. 10YR 3/1～3/1暗褐色～褐色土　しまっている
4. 7.5YR 3/1黄褐色土　壁崩落土

第19図　溝跡(4)

13号溝跡（第19図、写真図版20）

中央調査区域に位置し、表土下位40cmの黄褐色土上面で検出された。東側に近接して14号溝が南北方向に並行している。北側は私道の下部に延びており、詳細は不明である。全長は7.8m、幅は撹乱を受けて一定ではなく80cm～1.4m、深さ10cm前後である。底面は撹乱があるものの平坦である。

埋土は黒色土と黒褐色土を主体として構成され、全体にややしまっている。遺物は出土していない。

14号溝跡（第19図、写真図版20）

中央調査区域に位置している。検出面は13号溝と同様である。西側には13号溝が近接して南北方向に並行している。南半部は新しい撹乱が著しく、F78区で私道の下部に延びているため不明な点が多い。全長は約20m、幅は30cm～70cm、深さ5cm～10cmを測る。底面は作物等による撹乱の凹凸が著しい。

埋土は黒褐色土～暗褐色土を主体に構成され、壁の崩落土が小ブロック状で混入する。遺物は出土していない。

15号溝跡（第20図、写真図版20）

中央調査区域の北寄りに位置し、表土下位35cmの黄褐色土上面で検出された。南北方向に延びているが、大部分は削平され一部途切れている。全長は7m、幅は一定でなく30cm～55cm、深さ5cm～9cmである。底面は作物等による撹乱の凹凸が著しい。

埋土は黒色土の単層で、黄褐色シルトが小ブロック状に混入している。遺物は出土していない。

16号溝跡（第20図、写真図版21）

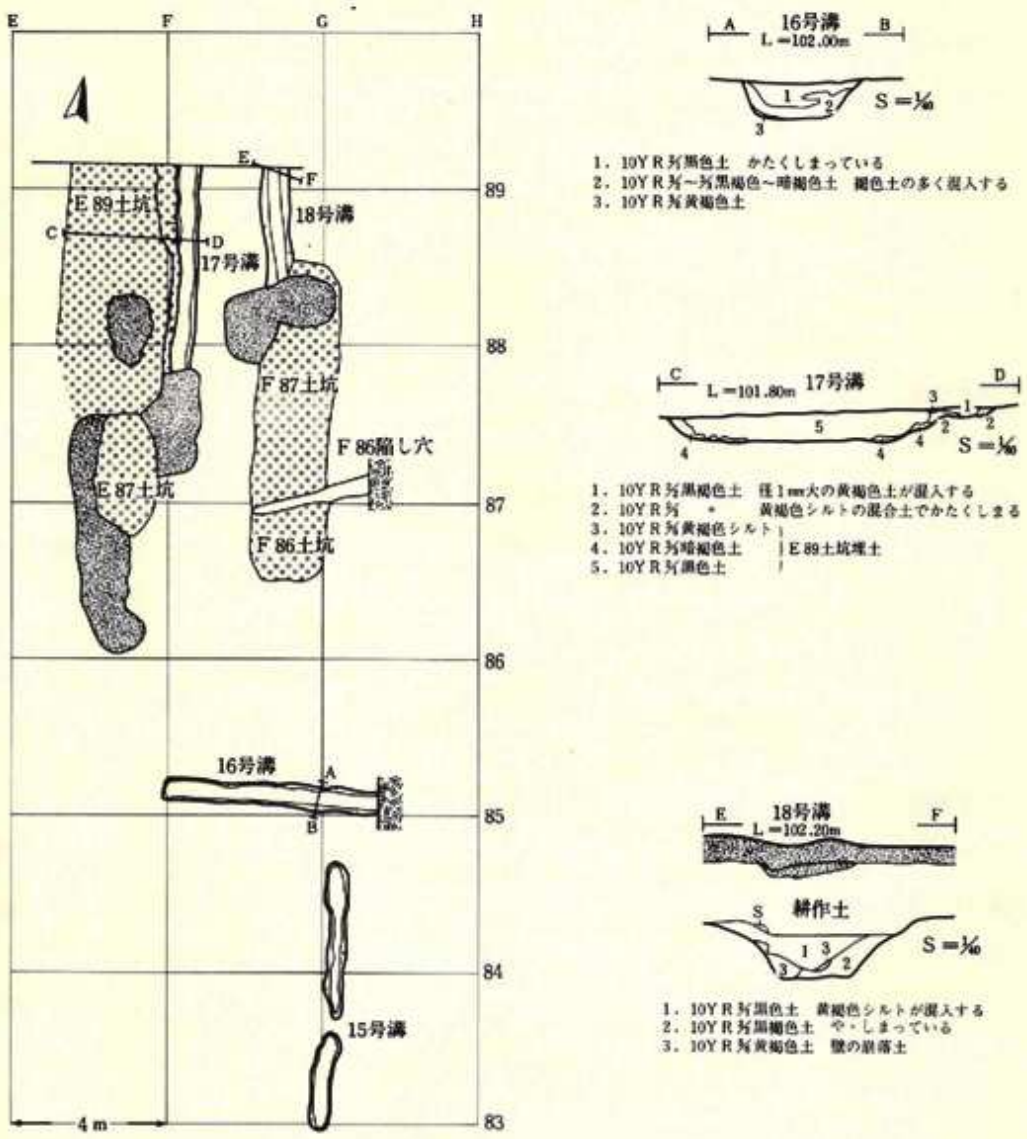
中央調査区域に位置し、南側1.4mに15号溝が近接する。検出面は表土下位30cm～35cmの黄褐色土である。東西方向に延び、東側は調査区域外に続いている。全長は約5.5cm、幅は50cm～60cm、深さ13cm～25cmで西側が浅くなっている。底面は一部に作物による撹乱が見られるほかは平坦である。

埋土は上層がかたくしまった黒色土、下層は黒褐色土～暗褐色土で構成されている。遺物は出土していない。

17号溝跡（第20図、写真図版14）

中央調査区域の北側に位置し、18号溝と南北方向に並行している。検出面は表土下位約40cmの黄褐色土上面である。東側はE89土坑と重複し切られ、南側は撹乱削平され、北側は私道の下部に延びているため精査できたのは長さ5.3m程である。幅は60cm前後、深さ10cm～13cmを測る。底面はほぼ平坦である。

埋土は黒褐色土の単層で、黄褐色土を少量混入する。遺物は出土していない。



第20図　溝跡(5)

18号溝跡（第20図、写真図版21）

中央調査区域の北側に位置し、西側1.5mに17号溝が南北方向に並行している。表土下位35cm～45cmの黄褐色土で検出した。北側は私道の下に延び、南側はF87土坑と重複し切られているため精査できたのは長さ3mである。幅は55cm～65cm、深さ30cm前後を測る。底面は作物等による撹乱の凹凸が見られるが全体に平坦である。

埋土は黒色土と黒褐色土で構成され、壁際に黄褐色土の壁崩落土が堆積している。遺物は出土していない。

19号溝跡（第21図、写真図版21）

中央調査区域の北端部に位置し、表土下位50cmの黄褐色土上面で検出された。南北方向に延びているが、南側は20号溝に切られて私道の下部に続き、北側は削平されている。全長は3.2m、幅は一定でなく75cm～1m、深さ17cm前後を測る。底面は撹乱の凹凸が見られるが平坦である。

埋土は黒褐色土と褐色土で構成され、壁際に黄褐色土が小ブロック状に混入する。遺物は出土していない。

20号溝跡（第21図、写真図版22）

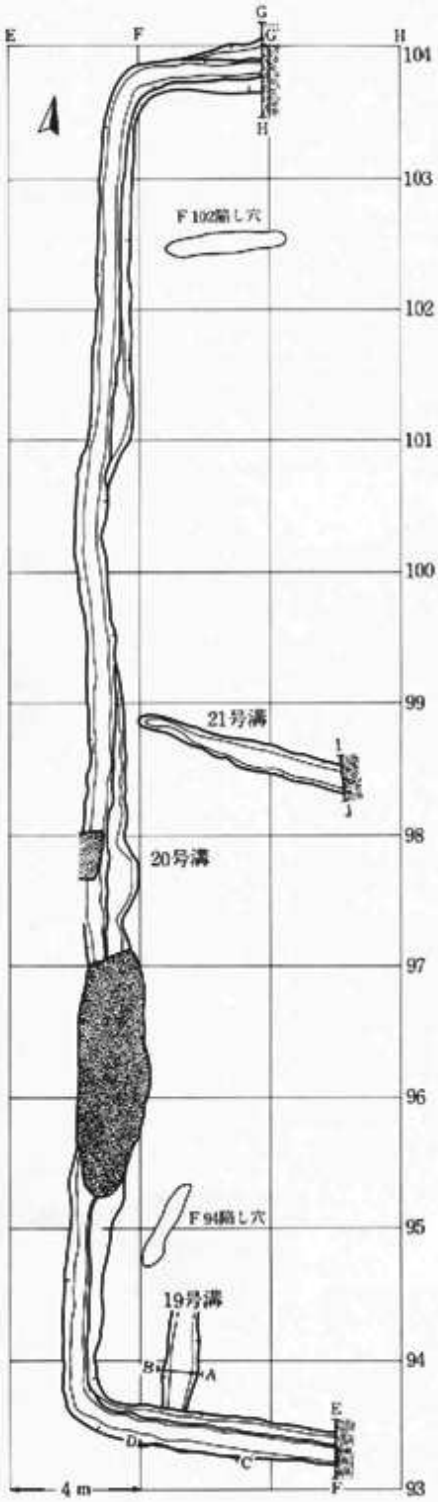
北側調査区域に位置している。検出面は表土下位40cm～50cmの黄褐色土上面である。南側で19号溝と重複しており、前後関係はこれを切っていることから本遺構の方が新しい。E93～103区にかけて南北方向に延び、両端は東側へ屈曲して調査区域外に続いている。全長は約42m、幅は一部撹乱があるものの90cm～1.2m、深さ30cm～40cmを測る。断面形は逆台形を呈している。底面はほぼ平坦である。

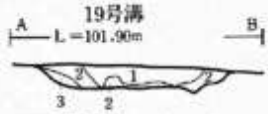
埋土は黒褐色土を主体とし、細粒の黄褐色土が混入する。遺物は出土していない。

21号溝跡（第21図、写真図版23）

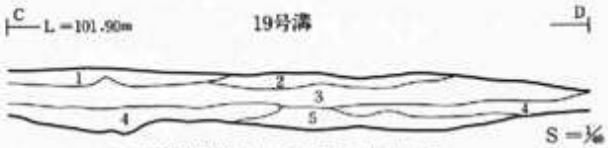
北側調査区域の南端部に位置し、表土下位50cmの黄褐色土上面で検出された。ほぼ東西方向に延び、東側は調査区域外に続いている。全長は6.5m、幅は一定でなく45cm～90cm、深さ10cm～43cmで西側が浅くなっている。底面は多少凹凸が見られる。

埋土は上層がかたくしまった黒色土、下層は壁の崩落土が混じる黒褐色土で構成されている。遺物は出土していない。

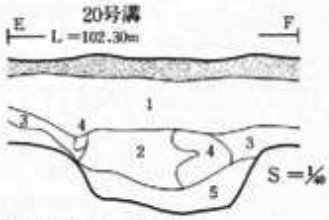




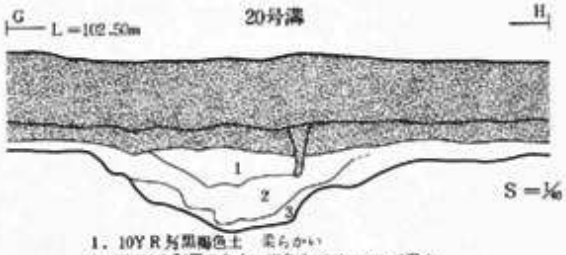
1．10YR 3/2黒褐色土　かたくしまる
2．10YR 3/3暗褐色土　黄褐色シルトとの混合土
3．10YR 5/6黄褐色土　盤磯部土



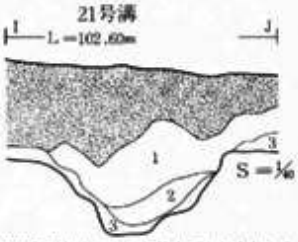
1．10YR 3/2黒褐色土　シルト質でかたくしまる
2．10YR 3/3暗褐色土　黄褐色シルトの混合土
3．10YR 3/2黒褐色土　黄褐色シルトが細粒で混入
4．10YR 5/6黄褐色土　シルト質土
5．10YR 3/2黒褐色土　やゝしまっている



1．10YR 3/2黒色土　柔らかい
2．10YR 3/2黒褐色土　黄褐色土が細粒で混入
3．10YR 3/2　〃　2層よりも黄褐色土の混合が多い
4．10YR 3/3暗褐色土　黄褐色土と黒褐色土の混合土
5．10YR 3/4黄褐色土　黒褐色土を混入



1．10YR 3/2黒褐色土　柔らかい
2．7.5YR 3/2黒褐色土　褐色土がブロックで混入
3．10YR 3/3暗褐色土　褐色土の混合土



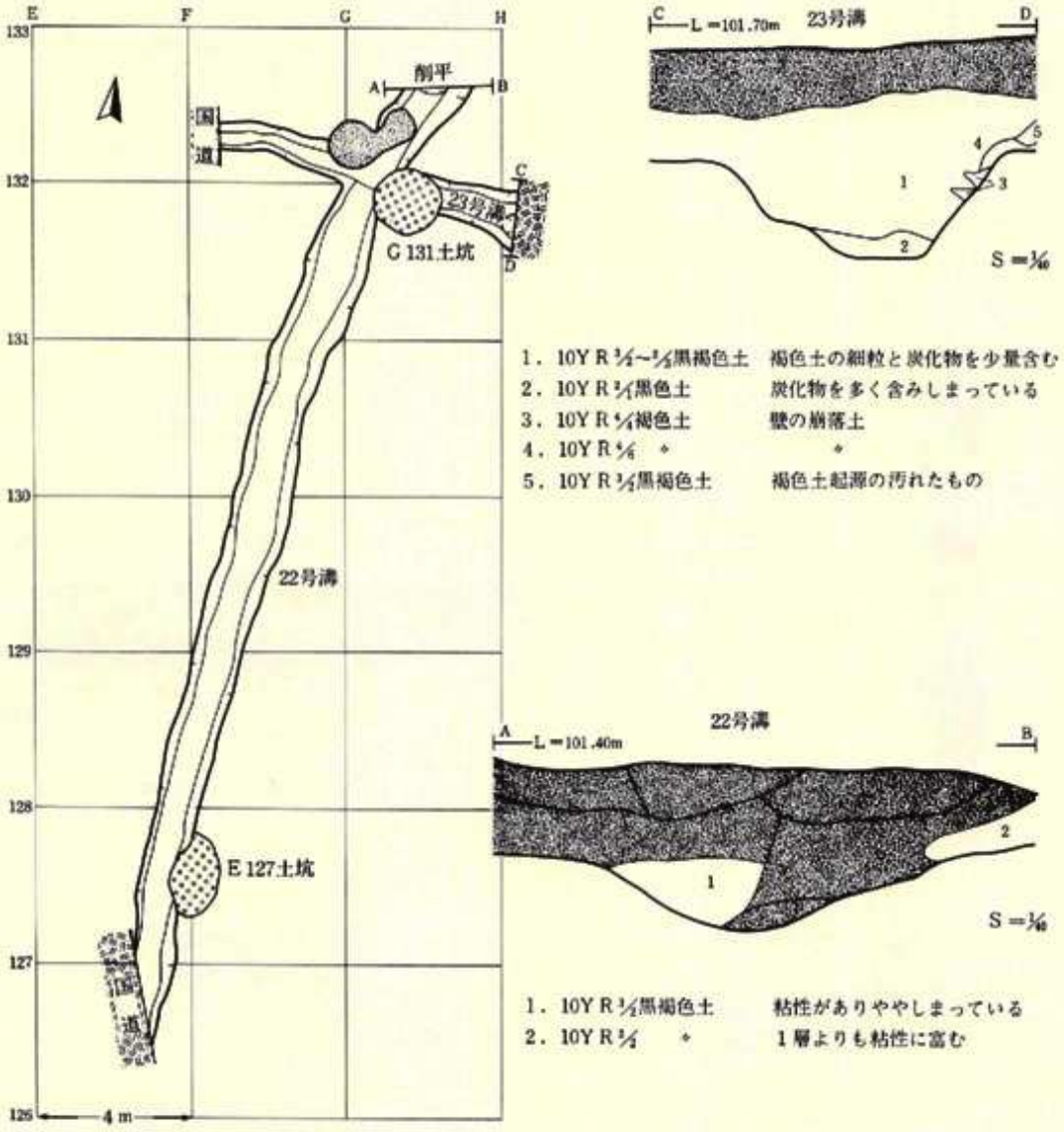
1．10YR 3/2黒色土　シルト質土でかたくしまる
2．10YR 3/2　〃　黄褐色土シルトがブロックで混入
3．10YR 3/2黒褐色土　褐色土と黄褐色土の混合土

第21図　溝跡(6)

22号溝跡（第22図、写真図版23）

北側調査区域の北端部に位置し、Ⅳ層上面の黄褐色土で検出された。国道と並行して南南西～北北東方向に延びているが、両端部は私道と国道で削平されている。E127・G131土坑、23号溝等と重複し、前後関係は古い順にG131土坑、本遺構、23号溝・E127土坑である。全長は約26m、幅は1m～1.5m、深さ20cm～53cmを測る。北半部は削平や撹乱が著しいため比較的浅くなっている。底面は平坦である。

埋土は粘性のある黒褐色土の単層で構成される。遺物は出土していない。



第22図　溝跡(7)

23号溝跡（第22図、写真図版23）

北側調査区域の北端部に位置している。検出面は22号溝と同様黄褐色土上面である。22号溝G131土坑と重複しているが、前後関係は本遺構が新しく22号溝、G131土坑の順となる。22号溝と交差して東西方向に延びるものの、東側は調査区域外に続き、西側は国道によって削平されている。全長は８ｍ、幅は70cm～１ｍ、深さ26cm～40cmである。底面は一部に撹乱による凹凸が見られる。

埋土は黒褐色土を主体とする５層で構成され、下位に炭化物を多く含む黒色土が堆積している。遺物は出土していない。

24号溝跡（第17図）

南側調査区域の北寄りに位置し、宅地の基礎跡下位から検出された。南側は町道の下部に、東側は調査区域外に延びている。精査できたのは長さ2.5ｍ程である。幅は30cm～50cm、深さ４cm～10cmを測り、西側がやゝ狭くなっている。底面は平坦である。

埋土は黒褐色土の主体とする５層に分けられ、全体に黄褐色土ルトがブロック状に混入している。遺物は出土していない。

２．出土遺物

遺構内及び遺構外も含めて、出土した遺物は縄文土器片約3,600点、石器33点、平安時代の須恵器片10点、土師器片75点、寛永通寶７点、近世以降～現代までの陶磁器若干である。

（１）縄文土器

出土総数3,600点のうち、遺構の埋土や床面からのものは950点、遺構外からは2,650点である。これらの大部分は住居跡や陥し穴状遺構が検出された南側調査区域Ｅ・Ｆ・Ｇ24～30区からの出土である。時期は縄文時代中期前葉（大木７ｂ式）のものが大部分である。

遺構内外を含めて文様や器形等の特徴的なもの211点を抽出し、拓影図と実測図で掲載した。施文法によってⅠ～Ⅳ群に大きく分類し、その中でさらに細分した。第Ⅰ群土器は撚糸原体の圧痕文、第Ⅱ群土器は沈線や刺突文、第Ⅲ群土器は隆線文を主として用いているものである。第Ⅳ群土器は地文と無文のものを一括している。

第Ⅰ群土器　（第23・24図１～51・第29図198～201、写真図版25・26・31）

撚糸圧痕文を主体に文様表現しているものである。撚糸圧痕文だけのものを１類、撚糸圧痕文以外に貼付文や隆線文を用いているものを２類に細分した。１類・２類とも胎土や器形に大きな差違は見られない。

1類　撚糸圧痕文を施文に用いるもの（1～23・198）器種は口縁部がやや膨んで内湾するキャリパー形の深鉢、口縁部が直上する深鉢がある。山形の大型突起をもち、大波状口縁となるものが半数を占める。大型突起は耳型、山型、三ッ山型などが見られ、5・23の上端には刻み目がある。3・2には把手の中に穿孔が施されている。大型のものは少なく、口径が20cm～25cm、器厚が6mm～7mm前後の中・小型が多い。口唇部は丸味を帯び、かつ平滑である。

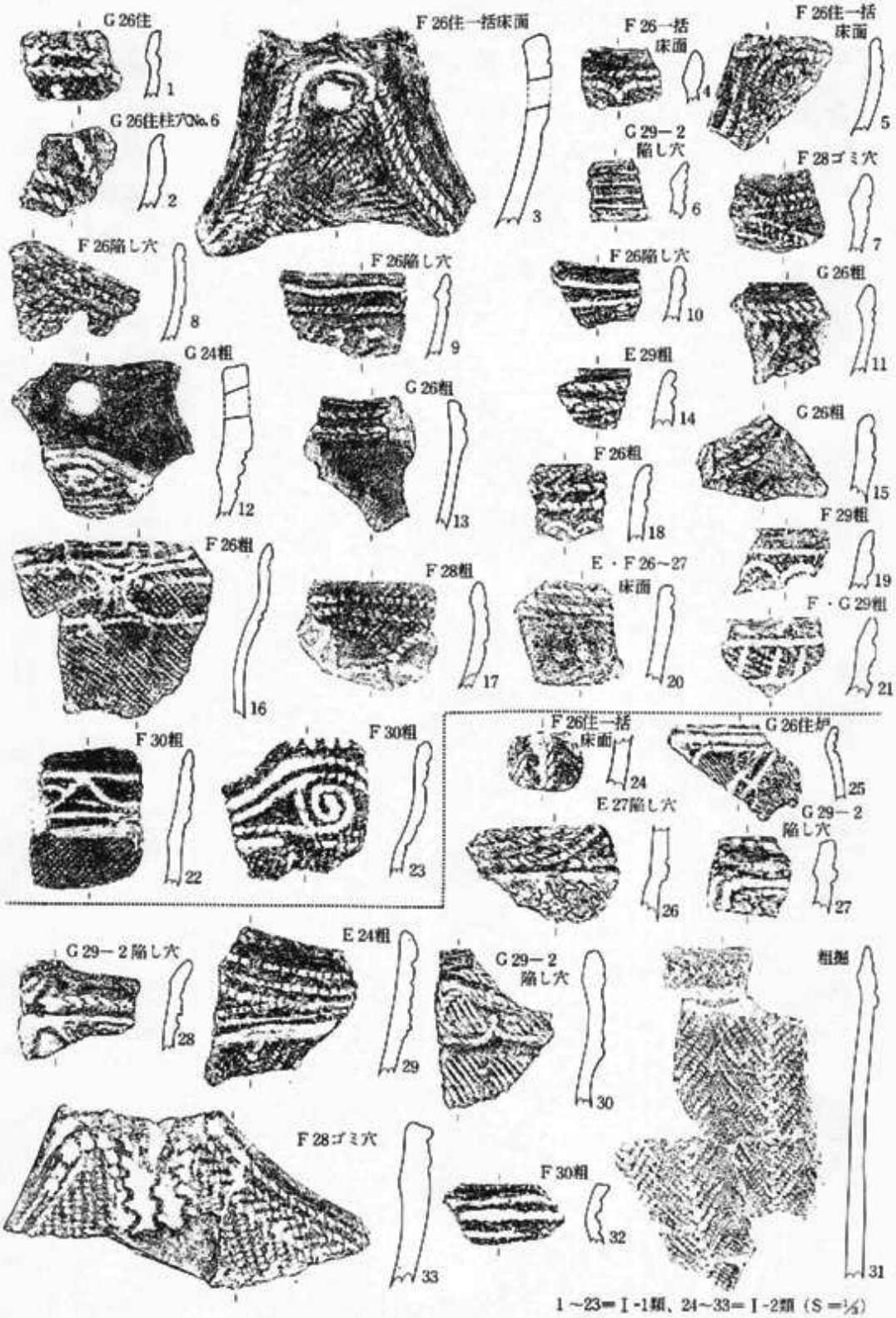
文様は口縁部に限られ、把手のつくものは把手を中心に波状や平行曲線で区画している。また、突起のつかない平口縁のものは平行線の他に、口縁部を1周する間に何回か同じ曲線文様をくり返している。5・12・23の突起部中央には渦巻文が1個配されている。4・8・17・19・22には横に連なる連弧文、16は口縁部を区画する長楕円文、21は平行線文の間に短い縦縞文様をそれぞれ施している。文様帯は体部に比較してやや肥厚するものが多い。特に13・15・22・198は顕著であり、1段厚く貼り付けた様子が断面でよく観察できる。

地文はＬＰかＲＬの単節斜行縄文の縦回転が主であるが、13・15は無文である。胎土には砂粒を多く含み、焼成は普通である。13・15は胎土に金雲母が少量含まれている。色調は黒褐色と黄褐色を呈するものが多い。

198は全体の5分の1程度が現存している中型の深鉢で、口径19.8cm、器厚5mmである。やや肥厚したせまい口縁部文様帯に長楕円形区画文を描き、その内側にも1本の撚糸圧痕文を施している。

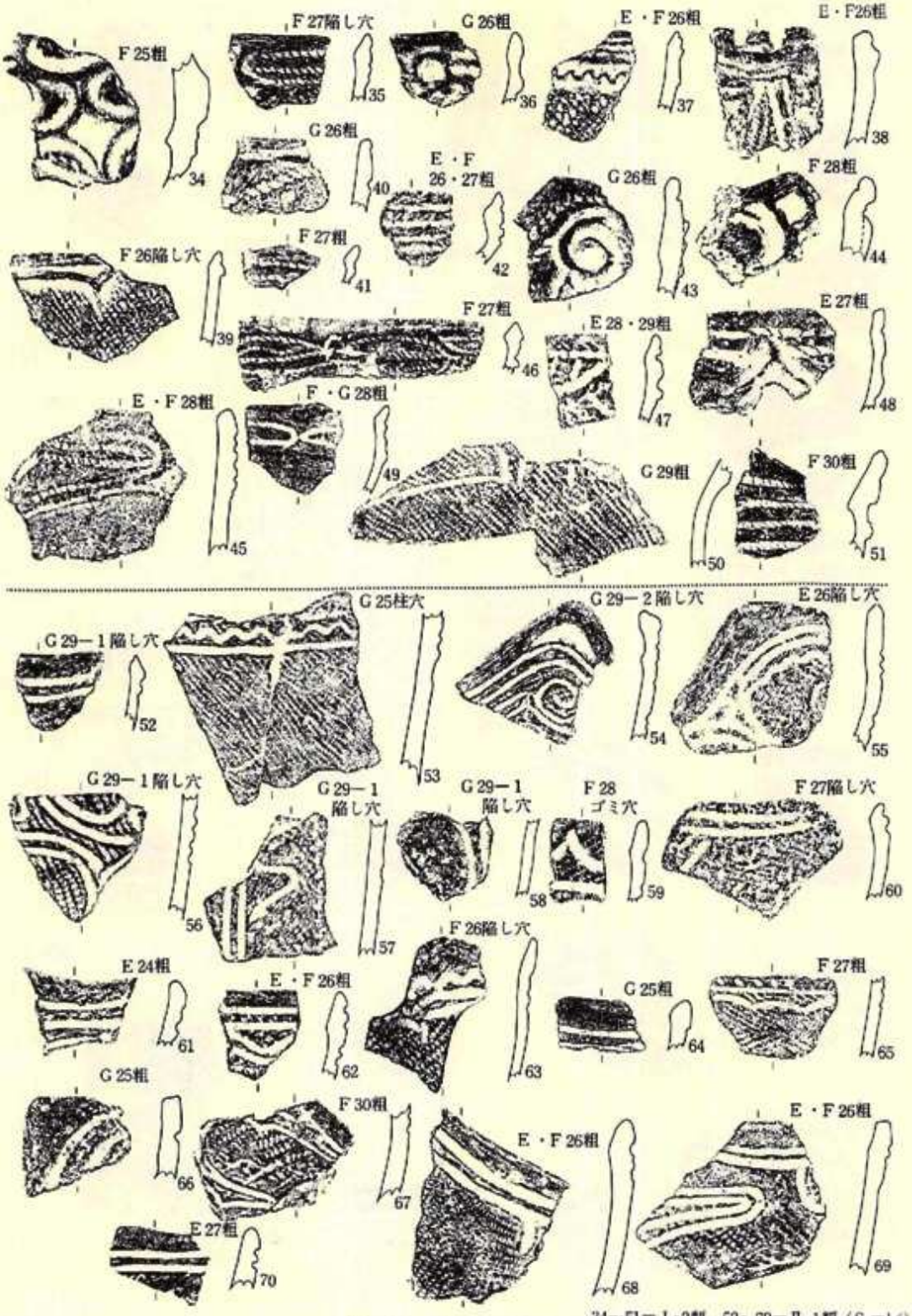
2類　撚糸圧痕文とともに隆線文・隆帯文・貼付文を用いるもの（24～51・199～201）
器種は深鉢が大部分を占め、浅鉢は42・46・49・201など僅かである。深鉢は口縁部が膨み、僅かに内湾するキャリパー形の199・200、口縁部が直上する31、口縁部が短く外反する32がある。口縁部上端は山型の突起をもち、大波状口縁となるものが多い。突起は上端が平らな大型の山型、背の低い瘤状の山型、34のような特殊な耳状のものがある。数は少ないが口縁部らしいのは25・35・47・48である。浅鉢で器形の全体を知り得るのは201のみである。口縁部は強く内湾して直上する形で42・46も同様と思われる。30・200は口径40cmを越える大型らしいが、199・201・31は口径が20cm前後、器厚5mm～6mmの中型のものである。口唇部は丸味を帯び平滑である。

文様は区画する直曲線を隆線文で表現し、それに沿う形で撚糸圧痕文を施文しているのが一般的である。隆線文と撚糸圧痕文による区画で最も多いのは、山型の把手部分を中心にして、長楕円形や隅丸三角形を連結するものである。より単純なものは31のような横線1本、200・39のように刺状に懸垂させたもの、201のような大波状曲線がある。用いられている文様単位としては34・35・44にある菱形文、36のボタン状文、文様の中央につけられた43・201の渦巻文、24・33・37・200の交互押圧によるジグザグな小波状隆線文などがある。46・48・201には撚糸圧痕文の小波状がある。また、33の上部には竹管による刺突列、25にも2本の平行沈線文があ



1～23＝Ⅰ-1類、24～33＝Ⅰ-2類（S＝1/3）

第23図　縄文土器(1)



34～51＝Ⅰ-2類、52～70＝Ⅱ-1類（S＝1/3）

第24図　縄文土器(2)

り、II群土器とのつながりをうかがわせる。

地文は単節斜行縄文の他、25・30は無節斜行縄文、40・43・49は無文、31は羽状縄文である。胎土には砂粒を多く含み、28・29・43に金雲母が若干混入する。焼成は良・不良が半々である。色調は褐色～暗褐色が大部分を占め、黄褐色や赤褐色を呈するものもある。31・46・48の器表面には煤が付着している。

199はキャリパー型深鉢の破片で、口径20cm、器厚6㎜と中型である。口縁部文様帯の上半は長楕円区画文、下半は大波状（三角形状）区画文である。区画文の接点には短い撚糸圧痕が施されている。200はF26住居跡の床面から出土した大波状口縁の深鉢である。文様を区画するのは横位のジグザグな隆線文で、それからY字状の懸垂文がでている。201はF29－2隘し穴状遺構の埋土から出土した。大波状口縁の浅鉢で、山型突起は4個あり、上辺は平坦である。全体の2分の1程現存し、口径21cm、器高12.7cm、底径6cm、器厚6㎜である。強く内弯し、直上する口縁部の文様帯は大波状の隆線文で区画され、それに沿って撚糸圧痕文の平行線や渦巻文・小波状文が描かれている。焼成は良くない。

第II群土器　（第24～26図52～139・第29～31図202～208、写真図版26～28・31）

沈線文や刺突文を主に用いて文様表現しているものである。II群土器は次の5類に細分した。I類は沈線文のみのもの、2類は沈線文と隆線文のもの、3類は沈線と短い沈線列による縦縞文様のもの、4類は沈線文と刺突列点文のもの、5類は隆線文と刺突列点文のものである。

1類　沈線文のみのもの（52～82・202・203）器種は深鉢がほとんどを占め、202のような壺型に近いものもある。口縁部が緩く内湾するキャリパー型深鉢は、大きな山型の把手をもつ大波状口縁である。平口縁となるのは59・62・72・203と少ない。山型の把手の形状は55・81のような上端が平らなもの、54のように先端部が三角形状のものがある。また、63・203のような小さな突起状も見られる。口唇部は丸味を帯び平滑である。大波状口縁のものは7㎜～8㎜と厚手で大型のものが大部分で、平縁のものは中・小型である。

文様は口縁部文様帯を平行沈線で区画し、その内部も沈線の曲線文で表現している。区画文は突起を中心にして、大波状や三角形をくり返しているものである。区画文の境目や中心点には54・74・81・202などのように渦巻文を配するものや、203のように短い刺突文（3個）を施すものがある。文様単位は53・55・57・63・73・77・81などに用いられる小波状文、59・65・74・80にある連弧文、その他流れる平行曲線文などがある。

地文は単節斜行縄文が大半である。8は羽状縄文である。胎土には砂粒を含み、焼成の不良なものがやや多い。64・69・80の3点には金雲母が若干含まれている。色調は褐色～暗褐色で、灰黄褐色のものが少量である。77・202・203の器表面には煤が付着している。

202は5分の1程が現存している小型の壺形で、口径は推定8cm、器高10cm、底径5cm、器厚

5㎜である。文様帯は体部上半から口縁部にかけて広く、平行沈線文と渦巻をくり返して表現している。口縁部に瘤状の小突起がある。203はキャリパー型深鉢の破片である。口径は推定22.5㎝、器厚5㎜と中型である。口縁部文様帯は大波状の区画が巡る。焼成は良好である。

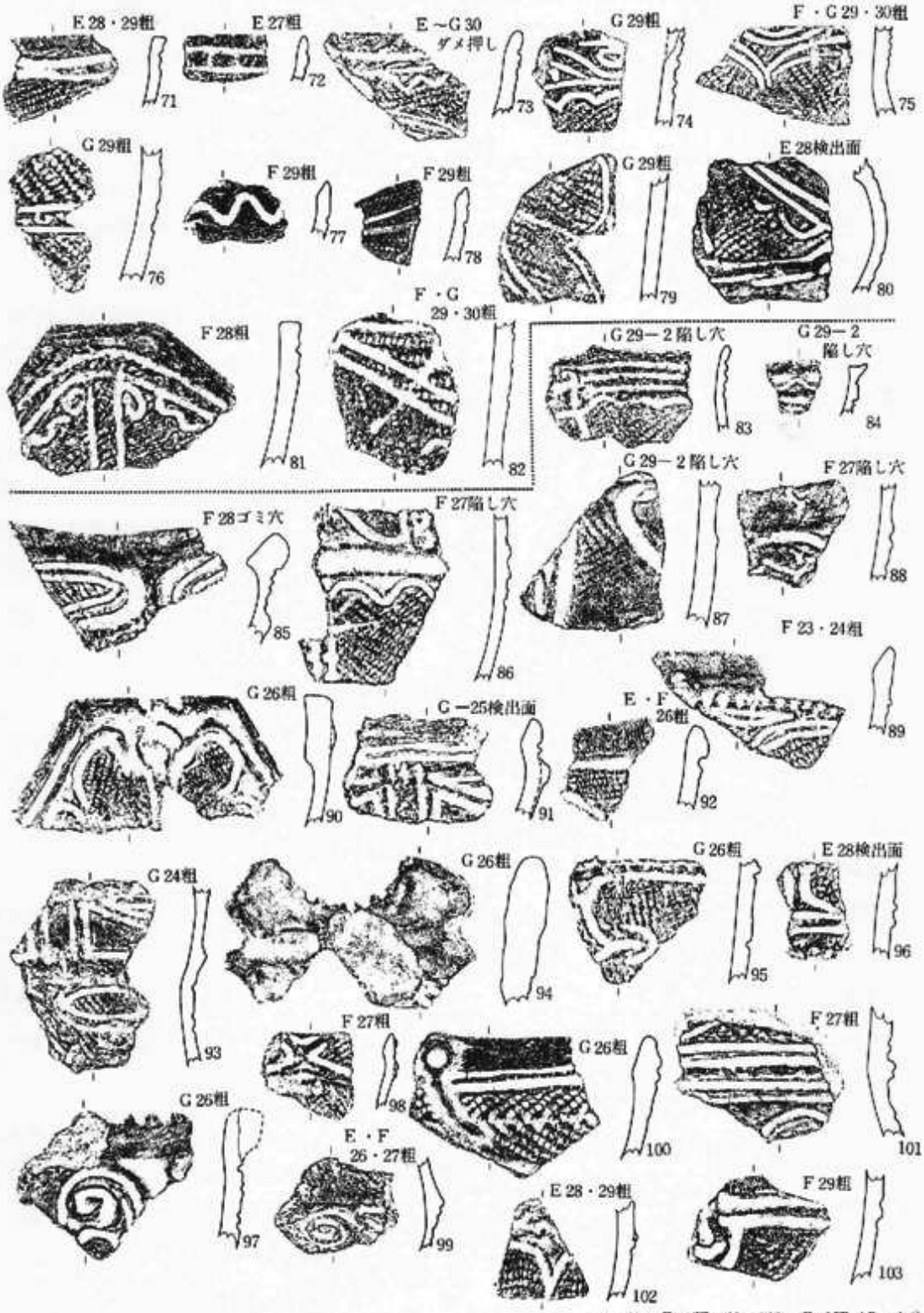
2類　沈線文と隆線文を併用するもの（83～112・204～207）器種は大部分が深鉢で、浅鉢とみられるのは99・206だけである。深鉢は204に代表されるような大きな山型突起をもち、大波状口縁となるものが主体である。205のキャリパー型のもの、83のように口縁部が弱く外反するものなどがある。山型突起の形状は106の上端が平らなもの、90・99・204のように刻み目のあるもの、94の耳を2つ出した形のものがある。口縁部の小突起は83・205に見られる。206の浅鉢は口縁部がくの字状に屈曲し、体部は摺鉢状に窄み、底部は小さく、I群2類の浅鉢と近似している。204をはじめ大型の深鉢が多い。

文様は区画する直曲線を隆線文で表現し、それに沿って沈線文が用いられている。区画文は口縁部の山型突起を中心に長楕円形や大波状を施し、その内部に沈線の曲線文や刺突文が描かれる。用いられる文様単位は97・99・106・110・204・205などの渦巻文、90・95・107・207の弧状文、205・86の連弧文、83・84の小波状文がある。貼付文や隆線文によるX字状の突起は98・110・205で見られ、瘤状の貼付文が83・91・204、ボタン状貼付文が100に用いられている。隆線上や長楕円の区画内に刺突列を施しているものは89・95・105・107・108・110・204・205・206である。109は溝状となった隆帯につけられた橋状把手部分であり、把手の表面には6本の撚糸圧痕文が施されている。206は文様帯から下がるY字状の懸垂文がある。平行沈線で区画している途中に刺状に屈曲させる表現は、204・206などをはじめ比較的よく見られるが、95はその先端に弧状文をつけ加えている。

文様帯はほとんど口縁部に限られるが、204は押圧のある隆帯を境に体部上半に直・曲線の文様を施している。

地文は単節斜行縄文が大半であるが、100・205・207は羽状縄文を用いている。胎土には砂粒を含み、焼成は良、不良半々である。胎土に金雲母を含むのは94・100・102・104・106である。205の器表面には煤が若干付着している。

204の大型深鉢は、F29住居跡の石囲炉内部に敷きつめられていたものである。体部が欠損し、全体の3分の2程現存している。大波状口縁で口径40.4㎝、器高61㎝、底径18㎝、器厚は10㎜である。炉内の火熱を受け脆くなっている。文様帯は口縁部から体部上半まで広がり、平行沈線の曲線文、区画文が縦横に描かれている。山型把手部分を中心に4回くり返す文様もあるが、場所によって自由に文様を変えている部分が多い。口縁部と体部との境には隆線文を配している。205はキャリパー型の中型深鉢である。口径は20.2㎝、器厚は6㎜で全体の5分の1程現



71～82＝Ⅱ-1類、83～103＝Ⅱ-2類（S＝1/3）

第25図　縄文土器(3)

存している。焼成は良好である。口縁部文様帯は連弧文と渦巻文が巡り、下位に隆帯文と刺突列点文が横走する。206の中型浅鉢は全体の２分の１程が現存している。口径24cm、器高11.6cm、底径7.8cm、器厚８mmである。口縁部文様帯は刺突列点文を伴った長楕円形区画文で、縁に隆線文が施される。Ｙ字状や刺状に下がる懸垂文が見られる。207はＧ26住居跡の床面より出土した大波状口縁の大型深鉢の体部破片である。器厚は８mmで、口径もかなり大きなものである。文様帯は縦と横の隆線文とそれに沿う沈線文である。鼻状の隆線文やその下の平行な弧状文が特徴的である。

３類　横走又は長楕円形に区画する沈線の間に、縦や斜めの短い沈線で縞状や矢羽根状文を表現したもの（113～126・208）器種は口縁部が直上する深鉢、口縁部が僅かに内湾する浅鉢が主である。126の１点を除けばすべて平縁である。208には小さな突起がつく。器形は単純で中・小型のものばかりである。

文様帯は口縁部上端の狭い範囲に限られている。横走する上下の沈線は口縁を巡る間に４回ほど節目をもち、長楕円形として連結しているものが大半である。沈線内の短い沈線列は縦と斜め方向が見られ、 10・120・121は矢羽根状である。沈線及び沈線列は同一の工具で描かれている。その他の文様単位は114・126が連弧文、208が円文と刺突文、119・120・208が棒状や瘤状の貼付文を施している。また、123の上２本の線は撚糸圧痕文であり、Ｉ群土器との関連性が考えられる。

地文は単節斜行縄文の他、208の羽状縄文がある。胎土には砂粒を多く含み、焼成は不良のものが多い。色調は灰黄褐色を呈するものが大部分を占め、赤褐色も３点ある。117・119・ 126の胎土には金雲母が含まれている。

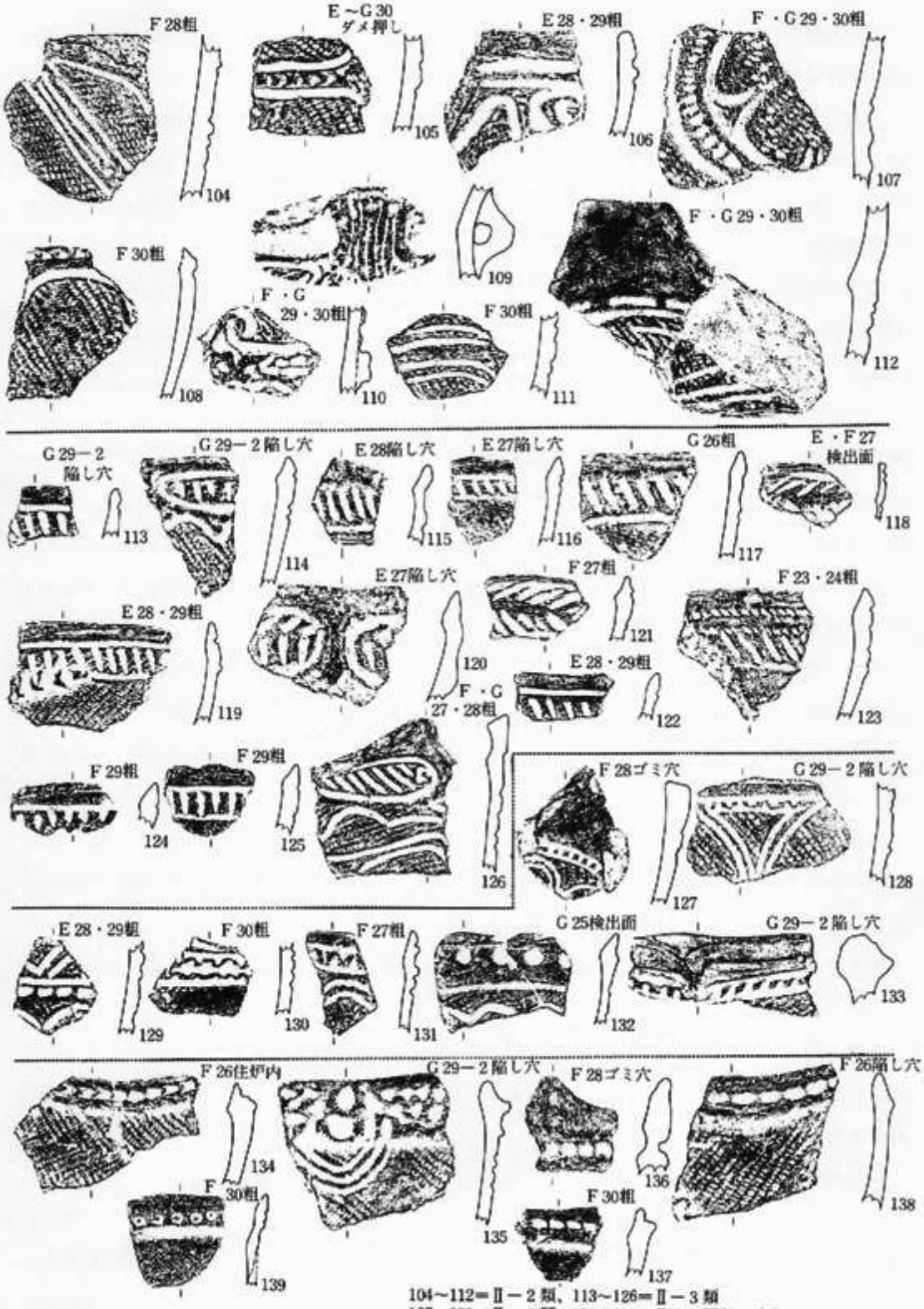
208の中型深鉢はＧ26陥し穴状遺構の埋土から出土したもので、全体の４分の１程が現存し、口径21cm、器厚６mmである。口縁部上端の狭い文様帯は長楕円文及び縞状沈線と円文を施し、瘤状突起がつけられている。

４類　沈線と刺突列点文を用いるもの(127～133）破片のみで器種は不明の点が多い。口縁が内湾するキャリパー形深鉢等であろう。127・133は大きな山型把手をもつ大波状口縁の一部である。

文様は平行な沈線の間に施す刺突列で表現され、刺突に若干の差違が見られる。128・130・131は上下両方からの交互刺突、127・129・133は１方向からの刺突を施している。また、139は球形を押しつけたような圧痕文列である。その他として平行沈線による区画文や曲線文が見られる。

胎土には砂粒を含み、焼成は良と不良が半々である。

５類　隆線文と刺突列点文を併用しているもの（134～139）器種は大波状口縁の大型深鉢、



104～112＝Ⅱ－2類、113～126＝Ⅱ－3類
127～133＝Ⅱ－4類、134～139＝Ⅱ－5類(S＝1/5)

第26図　縄文土器(4)

135の口縁部がやや内湾する深鉢、口縁部の外反する139のような深鉢である。136は大型の耳状山型把手の破片である。

文様に用いられる刺突文には差異が見られる。134・136・137・138は口縁部上端に厚く貼り付けた隆線文の間に横方向から斜めに刺突し、D字型となっている。又135・139はやや広めの隆帯（複合口縁状）の上に刺突し、135は右斜め方向からのD字型、139は真正面からの円形刺突を放している。135・139は他のものと様相が違い、異時期の可能性がある。

地文は単節斜行縄文の他に、134が羽状縄文、139が無文である。胎土には砂粒を含む。134・137は焼成不良であるが、他の4点は良い。胎土に金雲母を含んでいるのは134・135・137・138である。

第Ⅲ群土器　（第27・28図140～181、写真図版29・30）

隆線文や貼付文を主に用いて文様表現しているものである。隆線文や調整の違いで、次の4類に細分した。1類は細目の隆線文を用いるもの。2類は隆線文上に押圧や刻み目など施しているもの。3類は隆線文の両脇や間をなで調整しているもの。4類は特徴的な貼付文や隆線文を用いるもの。

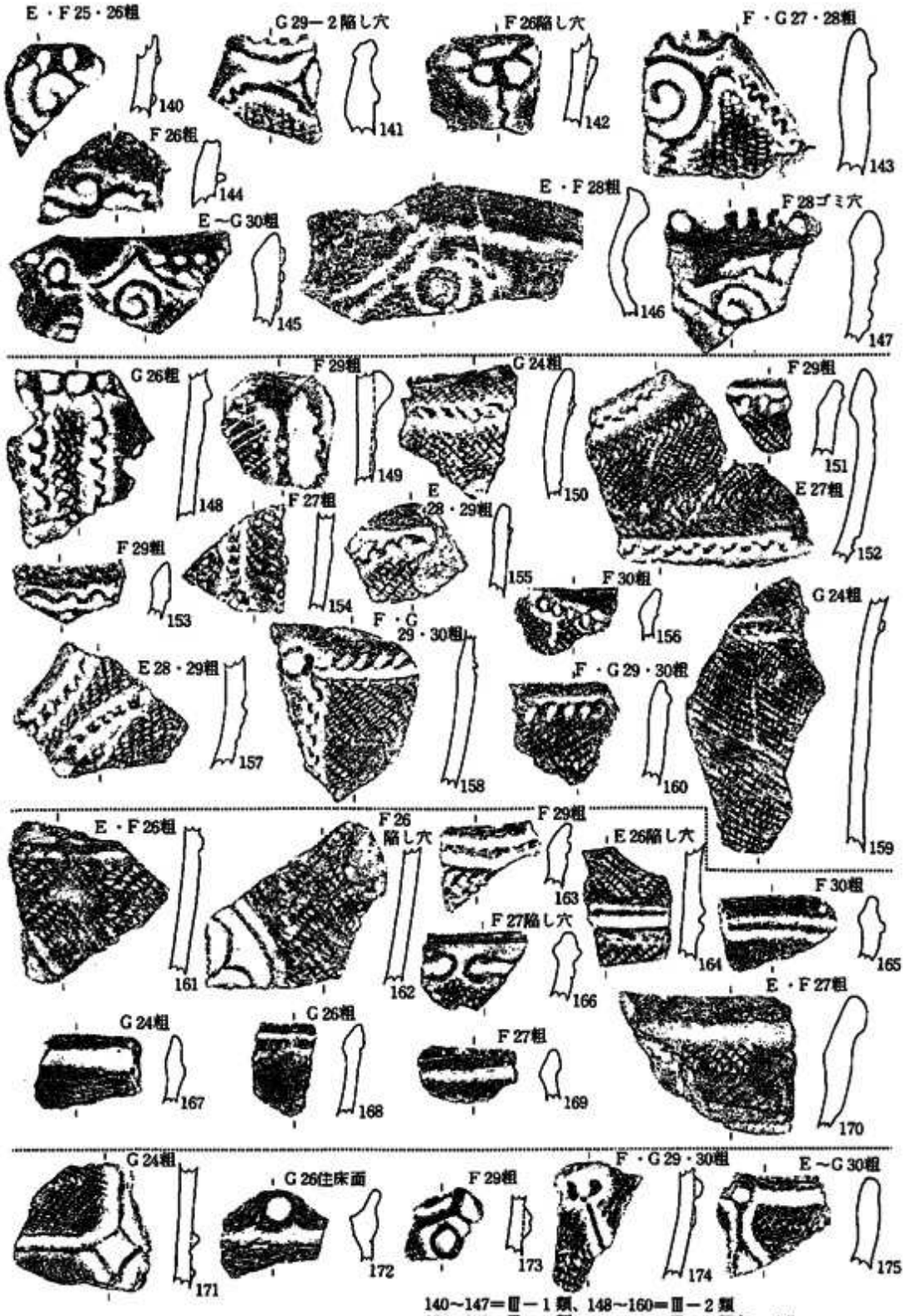
1類　隆線文による曲線文を用いるもの（140～147）　器種は大きな山型突起をもち大波状口縁の深鉢が主体である。146は口縁が外反する平縁の深鉢、145は浅鉢の可能性もある。147は山型突起の上辺に刻み目を施し、撚糸原体の押圧である。器厚は10㎜前後で大型のものが多い。

文様は渦巻文が多用される他、145・146に円文と大波状文が描かれている。145の上端にはD字型の刺突列点文がある。141・143には後述の2類と同様のジグザグな隆線文が用いられている。

地文は単節斜行縄文である。胎土には砂粒を含み、焼成は良、不良半々である。胎土に金雲母を含んでいるのは141・143・145である。

2類　隆線上に押圧や刺突を加えているもの（148～160）　器種は大きな山型突起をもつ大波状口縁の深鉢が大部分である。器厚は8㎜～10㎜と厚く、大型のものが多い。156は口縁部が外反する平縁の小型深鉢らしい。

文様は山形の突起部を中心に区画し、展開するものである。横帯の他、縦方向に区画する148・149・154・158がある。隆線上の押圧は149・155のように両方向からジグザグに行うものと、148・151・153・160などのように一方向からのみ行い、その効果を出しているものがある。150・157・159の3点は撚糸原体で押圧している。154は半割竹管の内側を用い、156はD字形の刺突を施している。その他の文様単位は149の瘤状突起、158のボタン状貼付文がある。149・155・



140～147＝Ⅲ－1類、148～160＝Ⅲ－2類
161～170＝Ⅲ－3類、171～175＝Ⅲ－4類(S＝1/3)

第27図　縄文土器(5)

158の一部には沈線文があり、II群土器との関連性をうかがわせる。

地文は単節斜行縄文と羽状縄文がある。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好なものが多い。金雲母を含むのは148・152・154・158である。色調は褐色が大半であり、赤褐色や黒褐色が少量混じる。

3類　隆線文の縁をなで調整したものや横帯のみのもの（161～170）　器種は波状口縁の大型深鉢、口縁部が内湾する平縁の深鉢や鉢である。161・112・170のように厚手で大型のものとその他の中・小型のものがある。

文様でグループ分けも可能である。161～165は隆線の両脇をなで調整した区画文や横帯を用いている。166・167は隆帯間を広めの溝状としている。168～170は口縁部の上端に厚い隆帯をもつものである。

地文は単節斜行縄文と無文である。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良・不良半々である。金雲母を含むのは161・162・164・166・168の5点である。

4類　特徴的な隆線文や貼付文をもつもの（171～181）　これらの貼付文等は他の土器群にも用いられるものの、それのみしかない破片を一括したものである。器種は深鉢が多く、大型から小型まで含んでいる。

文様単位には172・173・175・158・178・180などに見られるボタン状貼付文、171の菱形の隆線文、179のY字状懸垂文、175・177・178の人字状または鰭状の隆線文、174の二瘤状貼付などが用いられている。181はつまみ状の小さな貼付文が見られる。

地文は単節斜行縄文と羽状縄文が多く半数を占める。胎土には砂粒を多く含み、焼成不良のものが多い。金雲母は171～173の3点に含まれる。

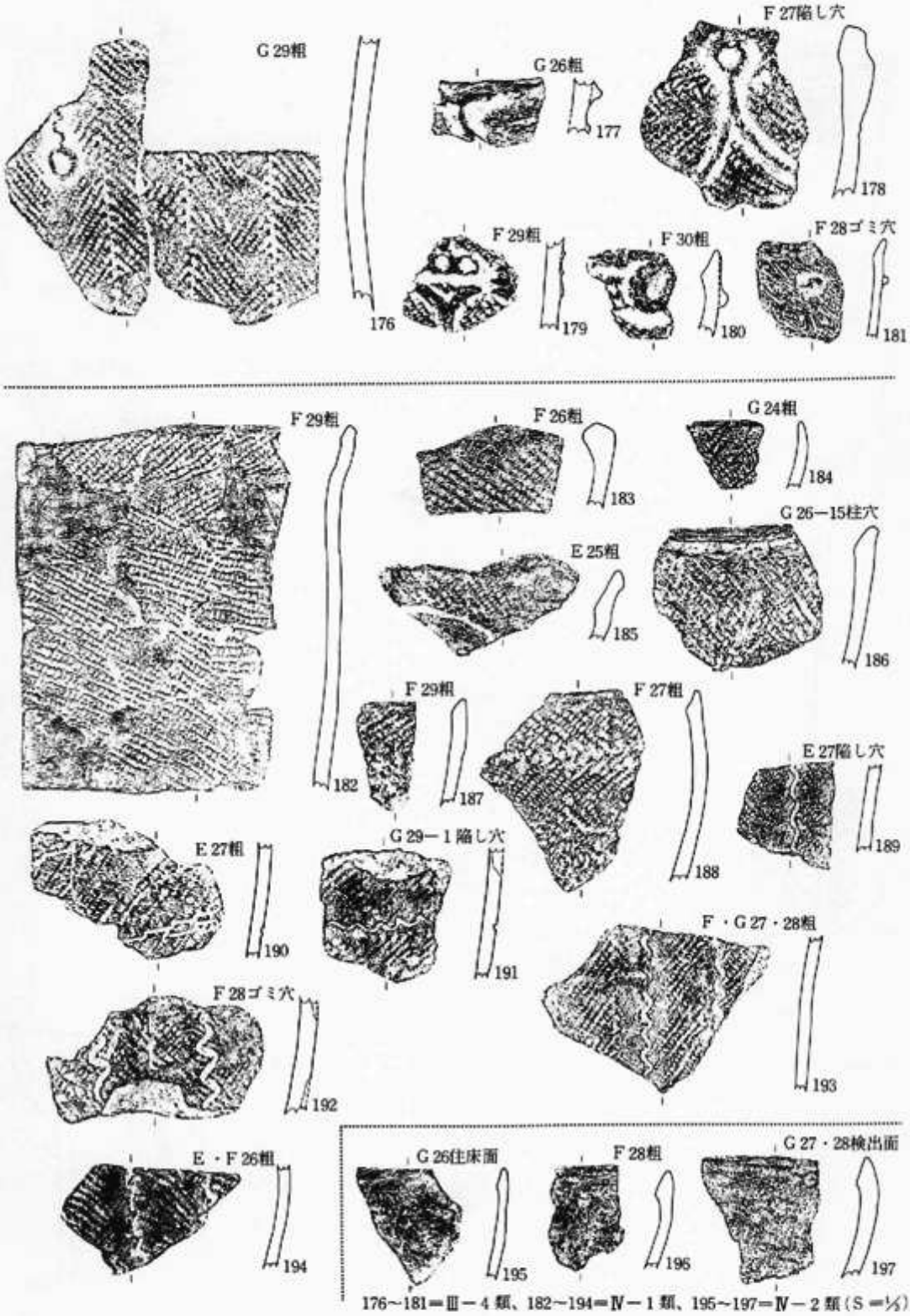
第IV群土器　（第28図182～197・第31図209～211、写真図版30・31）

地文のみや無文のものである。地文のみのものを1類、無文のものを2類とさらに細分した。

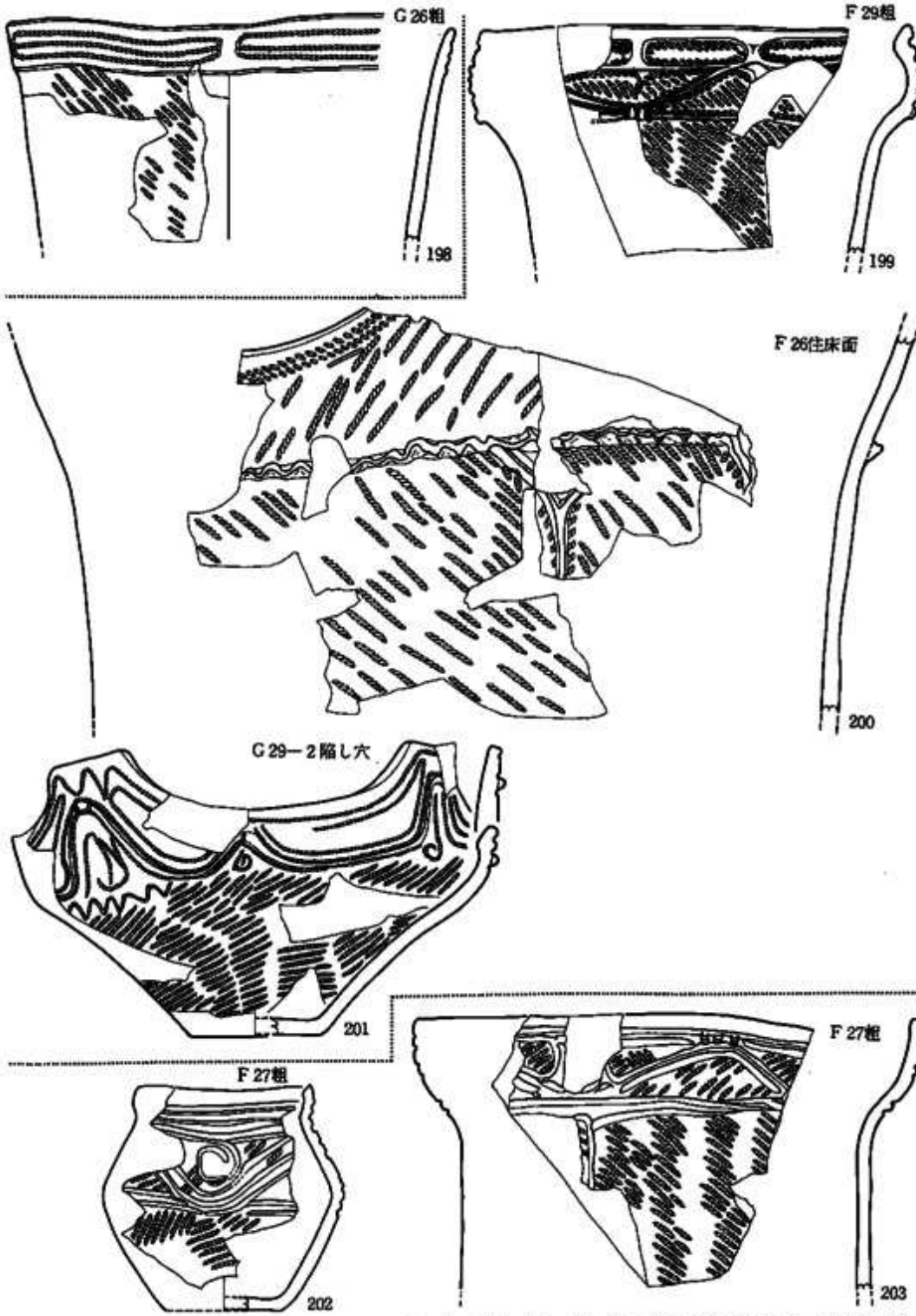
1類　地文のみのもの（182～194）　器種は182の口縁部が外反する深鉢、186の大波状口縁の深鉢、183・185の平縁の部分に小突起をもつ深鉢～浅鉢、184・188の口縁部が緩く内湾する浅鉢などがある。

地文は単節斜行縄文以外に188の羽縄文、189～194の綾絡文などがある。胎土には砂粒を含み、焼成は良、不良さまざまである。182・187の器表面には煤が付着している。

2類　無文のもの（195～197・209～211）　埋設土器の底部である210・211の2点を除けば、器種はいずれも浅鉢のようである。浅鉢の器形は口縁部が緩く内湾するものと、209の摺鉢状に底部が直線的に窄まるものがある。器表面は平滑になで調整されている。胎土に砂粒を含むが焼成は良い。

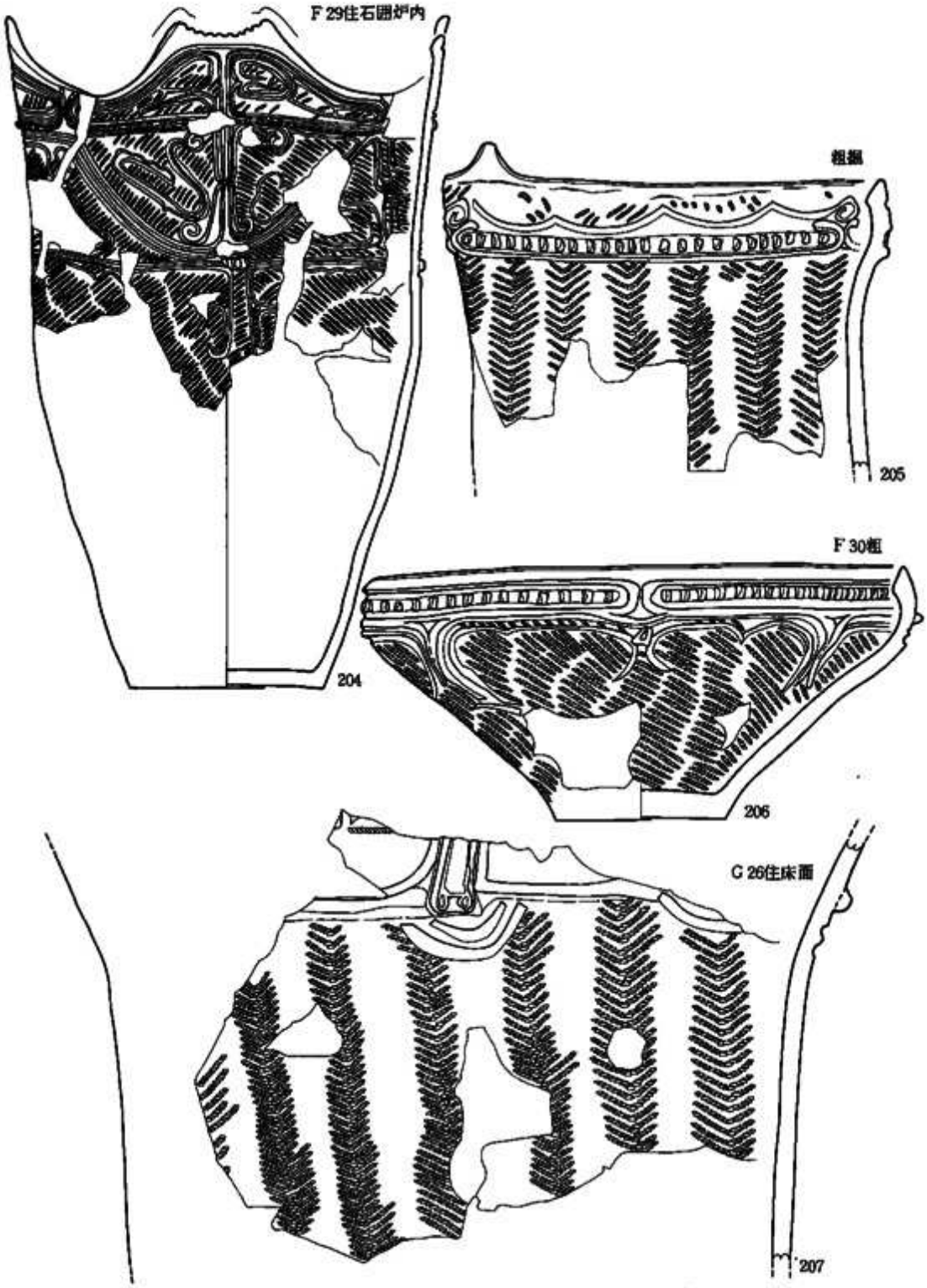

G 29粗
176
G 26粗
177
F 27陥し穴
178
F 29粗
179
F 30粗
180
F 28ゴミ穴
181
F 29粗
182
F 26粗
183
G 24粗
184
G 26−15柱穴
186
E 25粗
185
F 29粗
187
F 27粗
188
E 27陥し穴
189
E 27粗
190
G 29−1陥し穴
191
F・G 27・28粗
193
F 28ゴミ穴
192
E・F 26粗
194
G 26住床面
195
F 28粗
196
G 27・28検出面
197
176〜181＝Ⅲ−4類、182〜194＝Ⅳ−1類、195〜197＝Ⅳ−2類（S＝1/3）

第28図　縄文土器(6)



198＝Ⅰ－1類、199～201＝Ⅰ－2類、202・203＝Ⅱ－1類(S＝1/3)

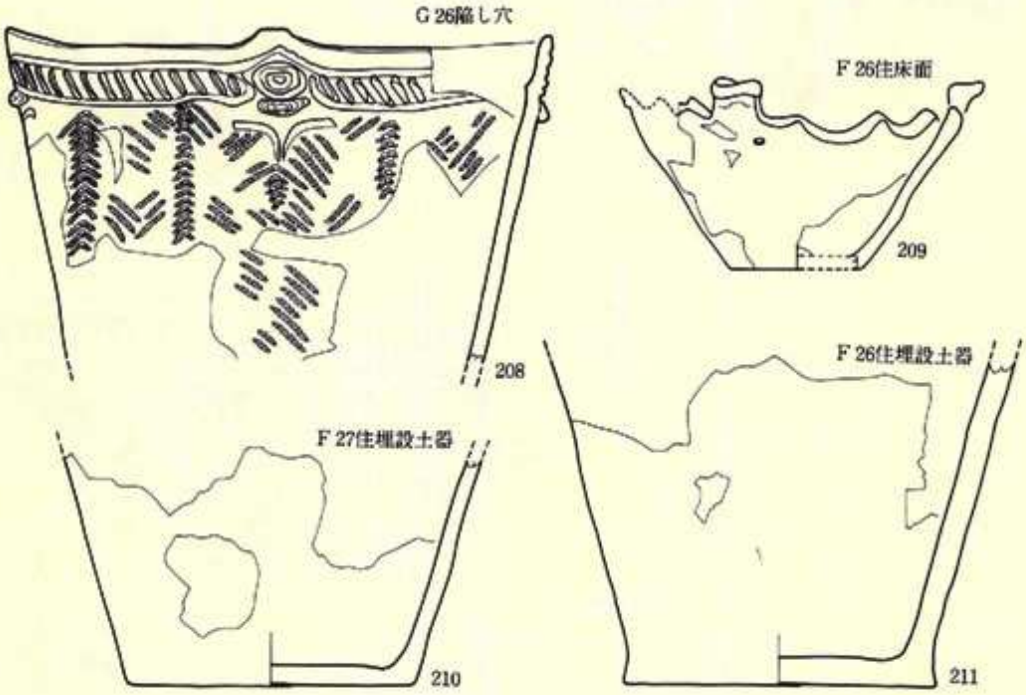
第29図　縄文土器(7)



204～207＝Ⅱ－2類(S＝1/3)

第30図　縄文土器(8)

209の小型浅鉢はF26住居跡の床面から出土したものである。全体の3分の1程が現存し、口径12.6cm、器高6cm、底径5cmである。小波状口縁とつまみ状の突起が特徴的である。突起の下位には直径4mm程の小穴が1個あけられ、補修孔かと考えられる。210はF27住居跡の埋設炉出土の深鉢底部である。底径は10.8cm、器厚は6mm程である。上部は火熱を受け脆くなっている。211はF26石囲炉の脇にあった埋設土器である。底径12cm、器厚10mmと厚く、焼成は良好である。器表面は赤褐色を呈し、煤が流れたように付着している。

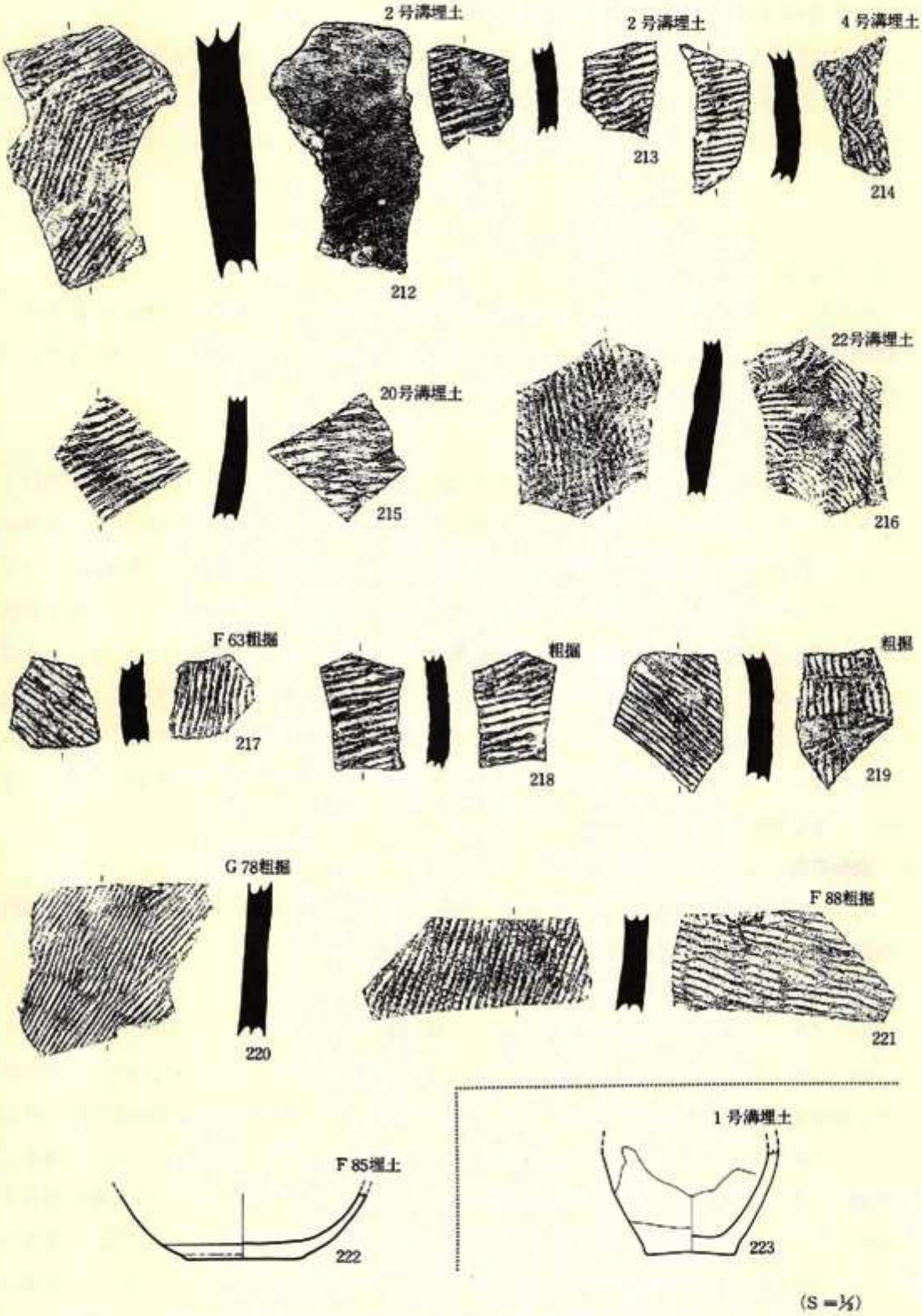


208＝Ⅱ－3類、209～211＝Ⅳ－2類(S＝1/3)

第31図　縄文土器(9)

(2) 平安時代の土器（第32図22～222、写真図版32）

須恵器片10点と土師器片75点出土しているが、小破片のため器形の全容は不詳である。212～221は中～大型と思われる須恵器の甕体部片である。外面は平行叩き具痕、内面は212・220が横なで痕、214・216が放射状当て具痕、他は平行当て具痕を有している。219の外面には自然釉がかかっている。212～216は溝跡埋土から出土したものである。222は底部回転糸切り無調整の坏である。現存は2分の1程で、胎土に全雲母が少量含まれている。



第32図　須恵器・土師器・陶磁器

（3）陶磁器（第32図223、写真図版32）

近世以降から現代までの陶磁器は若干出土しているが、小破片が多く1点だけ図面掲載した。223は1号溝埋土から出土の小型壺と思われる陶器破片で、外面に飴色の鉄釉がかかっている。また、2号溝からは波状文を陰刻した鉄釉陶器片、3号溝から磁器や陶器片が少量出土している。

（4）石器

出土した石器は33点で、小破片を除く30点の実測図を掲載した。石器の種類は石匙3点、楔形石器1点、掻・削器10点、使用痕ある剥片9点、磨製石斧1点、磨石3点、凹石2点、石棒1点である。

石匙（第33図224～226、写真図版33）

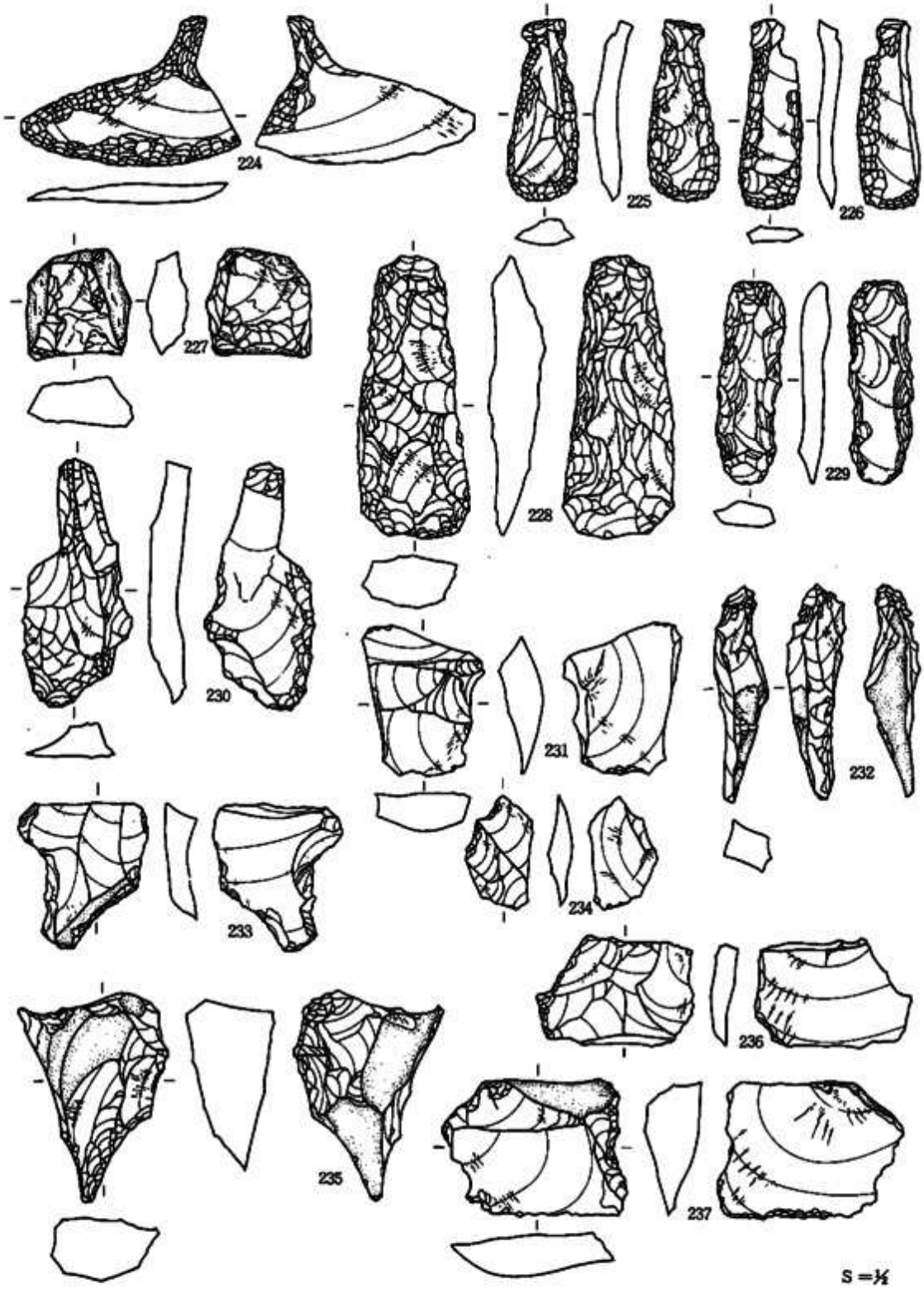
3点出土し、横形が1点、縦形が2点である。224は比較的長い摘みのついた完形の横形石匙で、扁平な三角形を呈している。縁辺の調整剥離は3辺とも片面だけである。下辺と左上辺は背面、右上辺は腹面のみの片面調整で刃部をつくり出している。摘み部分は両面から調整剥離されている。225は縦形石匙で、先端部がやや広がり丸味をもつ細長いナスビ形をしている。調整剥離は全周縁とも背腹両面調整である。背面の剥離はやや粗雑で急斜度に調整されている。摘み部の挟り込みは浅い。226も縦形石匙で、片刃のナイフ状に細長く先端部は平坦である。全形は縦に半分欠損したかのようであるが、素材とした剥片の形に沿って全周に調整剥離を施している。左右の側辺のうち、1辺は背面のみ片面調整であるが、他の1辺と下辺は両面調整である。全体に丁寧な剥離である。

楔形石器（第33図227、写真図版33）

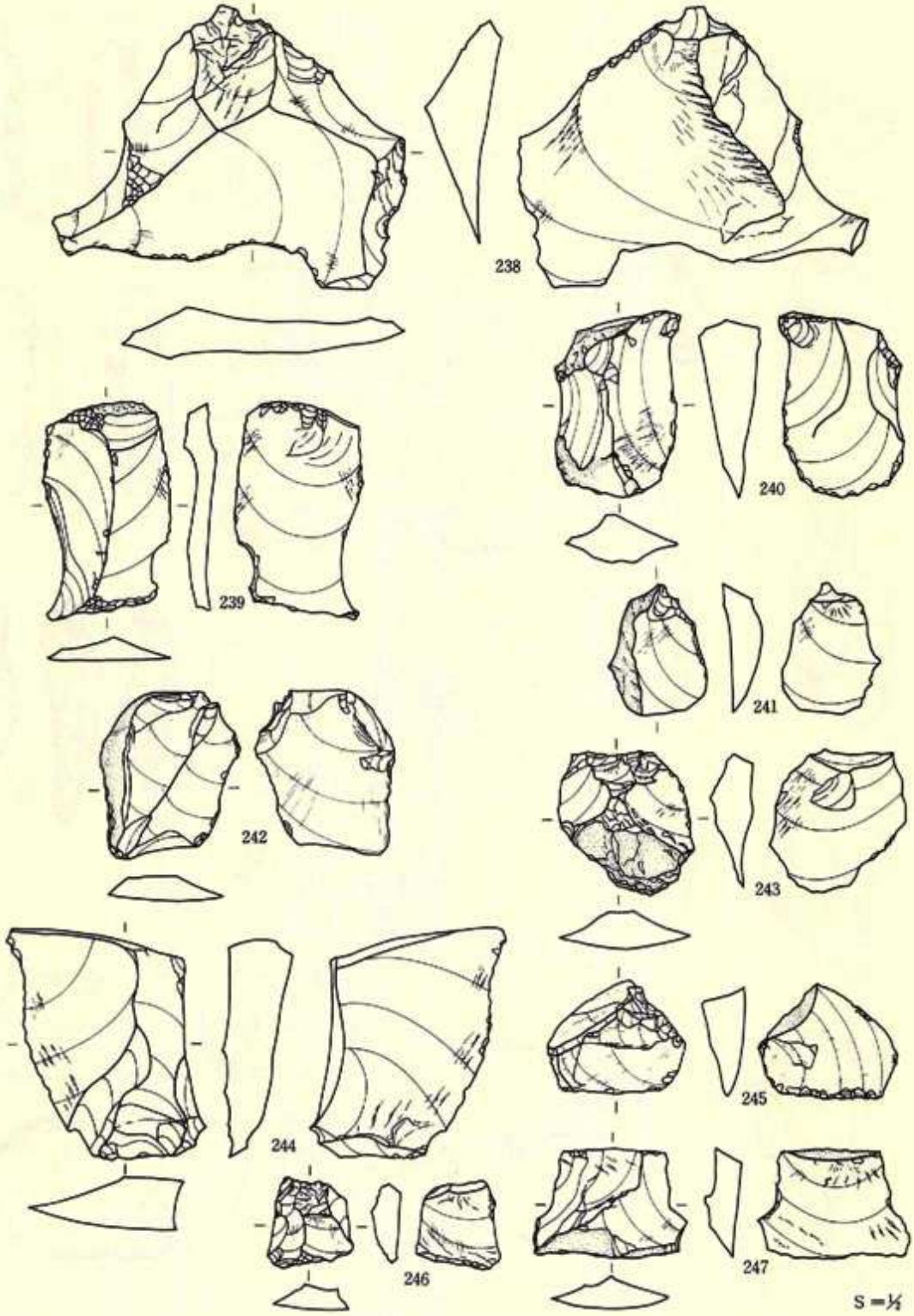
227は四角形を呈し、両極剥離痕によって特徴づけられる楔形石器である。1側辺のみ使用され、縦断面形は打ち込まれる刃部側が尖った凸状となっている。

掻・削器（第33・34図228～238、写真図版33・34）

刺突具等の使用が考えられるものを一括し、掻・削器としている。形状はそれぞれ異なっている。228は基部がやゝ狭く、下端で広くなる箆状を呈している。下端の刃部は背面だけが細かい調整剥離を施している。両側辺の稜線部には刃潰し加工がされている。229は縦長の側辺に粗い刃部調整をしている。230はE27住居跡の床面から出土し、柄のついた箆状である。刃部は片面から急斜度に調整剥離され、先端部はやや丸味を帯びている。231は横形剥片を素材とした台形状の石器で、刃部は下辺に細かい片面調整剥離を施している。232は細身の尖った先端部をもつ錐状の石器である。基部は細く、横断面形は菱形を呈している。刃部は先端部に近い1側辺に片面から急斜度の調整剥離を施している。233は1側辺の片面に粗く刃



第33図　石器(1)



第34図　石器(2)

部調整したものである。234は不定形な剥片を素材にしている。刃部は背面左上辺にあり、片面からの剥離調整でつくり出され、ノッチ状の刃部が２つ並んだ複刃状となっている。235は先端部が尖った錐状の石器で、基部は厚さが2.5cmと部厚い。刃部は先端部の１側辺にあり、片面からの急斜度調整剥離で弧刃状となっている。側辺の稜線上部には刃潰し加工が見られる。236はＥ26陥し穴状遺構埋土から出土の横形剥片を素材とした台形状の石器である。刃部は左右両側辺につくられ、片面調整剥離されている。237は厚手の横形剥片を素材とした不整な長方形状の石器である。刃部は下辺と側辺にみられ、片面から調整剥離されている。特に側辺の刃部は急斜度に調整剥離されている。238は大型の不定形な横形剥片を素材としたものである。刃部は２箇所つくり出して、背面側の側辺と下辺に細かい片面調整剥離を施している。刃部は不整な弧状を呈する。

使用痕ある剥片（第34図239～247、写真図版34）

明確な刃部調整はないが、使用痕と見られる刃状の細かい剥離が観察される剥片である。石器として機能したかは若干疑問が残るものである。239は括れのある縦長剥片で、側辺に使用痕が残る。240は部厚いナスビ形の剥片で、使用痕は下辺とそれに続く側辺の下半分にある。241は箆状を呈する部厚い剥片で、使用痕は側辺に残っている。243は不整な楕円形の剥片で、使用痕は側辺から下辺にかけて残っている。244は大形の剥片で、使用痕は腹面の側辺に残っている。細かい剥離があり、掻・削器238の刃部と類似している。

磨製石斧（第35図248、写真図版35）

248は基部がやや狭く、刃部で広がる両刃型の定角式磨製石斧である。刃部の先端は欠損している。その欠損した部分を磨って平坦にしている。欠損後に磨石に転用したものと思われる。

磨石（第35図249・250、写真図版35）

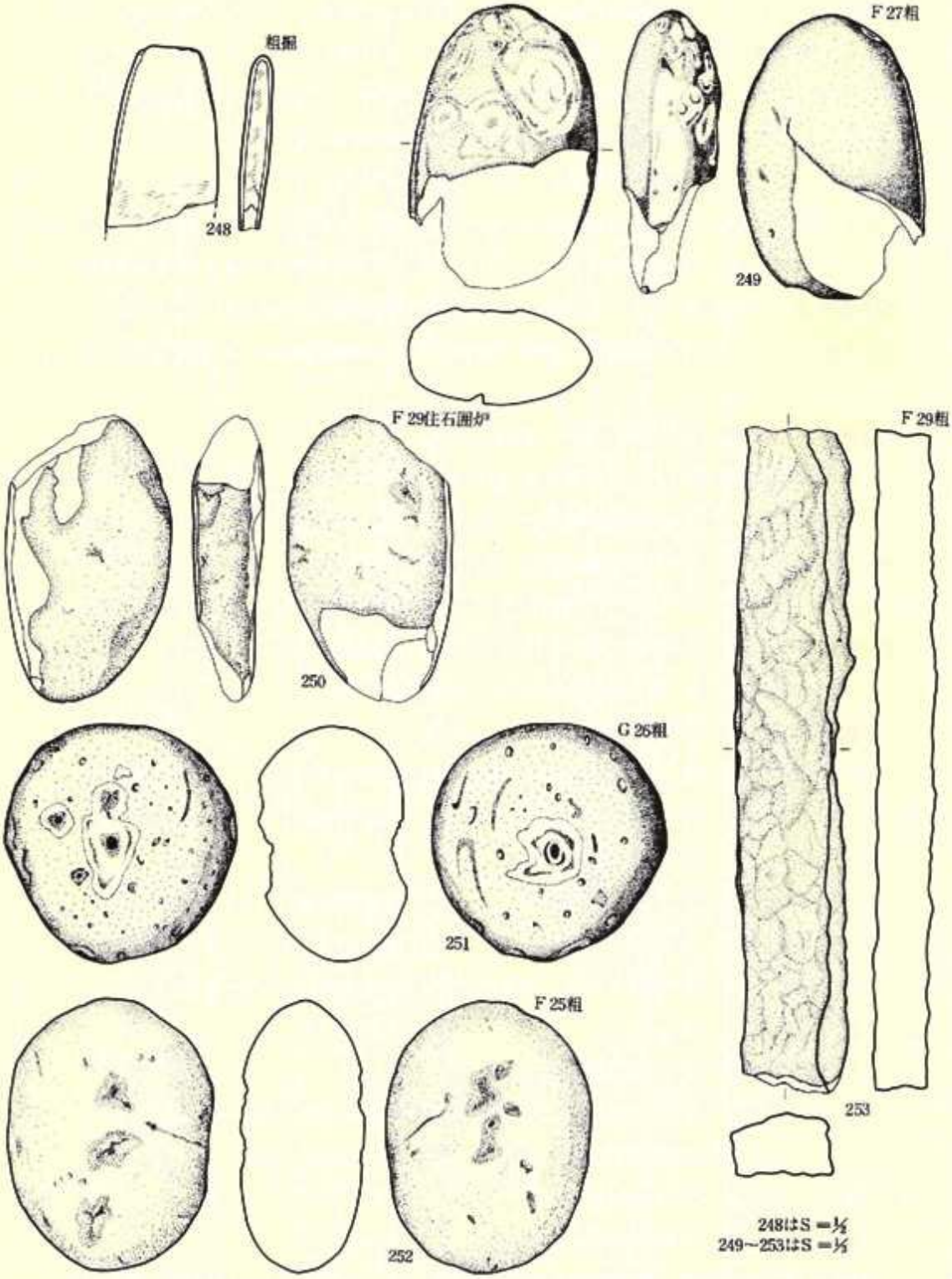
249は長楕円の自然礫の両側辺を磨面としている。磨耗の状況をみると１側辺の使用が著しい。表面は赤色化し、剥落の様子から火熱を受けたもののようである。250はＦ29住居跡の石囲炉縁石に転用されていたものである。半円形を呈した自然礫の１側辺を磨面としている。上端と下端はともに欠損する。

凹石（第35図251・252、写真図版35）

251は円形の自然礫を用いている。凹痕は表と裏の両面にあり、径３cm～3.5cm、深さ７mm程である。252は楕円形で扁平な自然礫を用いてみる。凹みは表裏両面に２・３箇所あり、251に比較して凹みは浅く深さ２mm前後である。

石棒（第35図253、写真図版35）

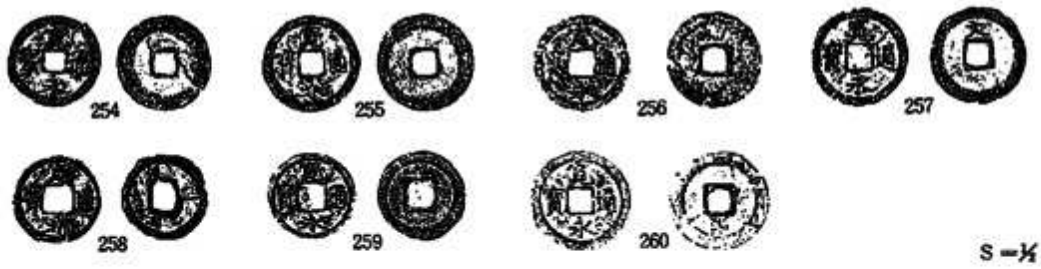
253は角柱状の石棒で、横断面形は長方形を呈している。器面は凹凸があり、稜線は角ばっている。磨る、あるいは敲打した痕跡は特に認められない。


組掘
248
F 27組
249
F 29住石囲炉
250
F 29組
G 26組
251
F 25組
252
253
248はS =½
249~253はS =½

第35図　石器(3)

（5）古銭（第36図254～260、写真図版36）

遺構外から銅製の寛永通寶が7点出土している。254は古寛永で、他は新寛永である。257には文の背名がある。



第36図　古銭

3．まとめ

本遺跡からは、縄文時代中期前葉の住居跡を主体とする遺構と遺物が出土している。これらを中心に補足しまとめとする。

（1）遺構について

縄文時代の住居跡

住居跡は、調査区域の南側で4棟集中して検出された。陥し穴状遺構と重複して、床面や柱穴の一部が壊されている。住宅の基礎や耕作等による削平や撹乱が著しく、掘り込んだ壁の確認はできなかった。したがって平面形や規模は、炉を中心とした柱穴配置から推定するのみである。4棟のうち、最も明確な柱穴配置はF29住居跡に見られる。

石囲炉を中心にして主柱穴6個と長軸の中心線上の外側に比較的浅い柱穴を2個加え、6角形の柱穴配置を呈している。対応する辺の長さはほぼ同じ値を示している。この柱穴配置から推定される規模・形態は6ｍ×4ｍの楕円形である。

F29住居跡を除いた3棟は、いずれも柱穴配置が不明確である。F26住居跡は炉を中心とした6個の主柱穴による長方形の配置と想定されるが、そのうち1個は陥し穴状遺構と重複して失われている。G26住居跡と重複し、他の柱穴も近接している。この配置から平面形は楕円形ないし長方形で、規模は4.5ｍ×2.5ｍと推定される。東方の柱穴2個を入れなければ、長方形の柱穴配置とも考えられる。

G26住居跡は炉を囲む柱穴数が多いことから、いくつかの柱穴配置が想定される。配置の1は、炉の長軸方向と同一の長方形であり、長辺の3個とそれに連なる短辺上の2個の柱穴からなる。短辺上の2個を入れると全体では多角形となる。この配置から本住居跡の平面形は楕円形で、長径4.5ｍと推定される。配置の2は、主に柱穴の規模と埋土の共通性によって想定した。炉を中心にした多角形の柱穴配置を呈し、長径が5.5ｍ程の円形に近い楕円形と推定さ

れる。地床炉も含めて炉が2箇所にあることから、2棟以上の重複が考えられる。

F27住居跡は炉の位置と直線的に並ぶ柱穴8個をもとに多角形の配置が想定される。各柱穴は比較的大きめなものが多く、西側は調査区域外にあり、長軸の長さは2.3mを測る。住居跡の平面形は楕円形で、短径3.5mと推定される。

炉の形態は4棟とも異なっている。F26住居跡は石囲炉と脇に埋設土器を伴っている。G26住居跡は炉の中央に土器を正立に埋設している。F27住居跡は土器埋設炉である。F29住居跡は石囲炉の内側と底面に土器の破片を敷きつめて使用している。F27住居跡の炉は土器の周囲の炉縁石が抜きとられたものかもしれない。前述した3棟の炉の形態は一般的で西田遺跡でも多いが、F29住居跡の土器敷設石囲炉ともいうべき形態の類例は少ない。炉の位置は中央よりややずれた場所にあり、長軸の方向は住居跡とほぼ一致する。

住居跡の床面や柱穴埋土等に伴う遺物は、すべて縄文時代中期前葉の大木7b式のものである。分類上の土器群の偏在性は認められない。以上のように4棟の住居跡は平面形において楕円形であるが、その長軸の方向や炉の形態がそれぞれ異なっている。遺物の点からみるとほとんど同じ時期と考えられるが、同時に存在したものではない。住居跡の間隔や長軸方向などから見れば、F26・F27住居跡、G26住居跡・F29住居跡の各2棟がそれぞれ同時存在であった可能性がある。

住居跡の検出状況が柱穴だけで壁が確認できなかったのは、平地式の住居だからではないかと当初疑問であった。同時期の平地式の可能性をもつ住居跡は他の遺跡でも類例は少ないが検出されている。本遺跡の場合は竪穴の壁こそないが、床面は基本土層第Ⅳ層の黄褐色土（火山灰土）まで掘り込んだ面で、当時の生活面より下位に掘り下げたことは明らかである。平地式であれば炉と同一面に土間的な床面がなければならないからである。また、前述の西田遺跡で注目された長方形柱穴列とも異なっており、住居跡は壁があったのに確認できなかった竪穴式と考えられる。

陥し穴状遺構

18基検出した陥し穴状遺構は、溝状に細長いタイプのものである。平面形は開口部が細長い溝状と長楕円形があり、底部は溝状を呈するものが大部分である。開口部は崩落のため広くなっているものが多い。比較的原形をとどめていると思われるのはE27・G29－2・F42・G55・F102陥し穴状遺構である。底部のやや広いタイプはE26・F26・F27・E43陥し穴状遺構、それ以外は幅が10cm前後と狭いタイプのものである。狭いタイプの短軸の断面形はY字状を呈している。長軸の断面を比較すると端部がやや膨らむ弱いフラスコ形と、垂直に近い立ち上がりのものとに分けられる。

開口部の規模は2.8m～4.1mの範疇で、深さは平均90cmである。特に長いものはF41－2陥し穴状遺構の4.5m、短いものはG29－2陥し穴状遺構の2.7mである。深さはほぼ長軸の長さに比例している。埋土の堆積状況は上層が遺物などを含む黒色～黒褐色土、中層が壁崩落土である黄褐色土主体の混合土、最下層が黒褐色～黒色土である。各層は凹レンズ状に堆積していることから自然に埋没したものである。

遺物を埋土から出土したのは南側調査区域に位置する7基である。南側区域は住居が存在し、それに関連した遺物が流れ込み又は投棄されたものと考えられる。遺物は住居跡周辺から出土する土器と同一時期のものであるが、遺構の重複関係から見て少なくとも出土遺物の時期（縄文中期前葉）よりは後に構築されたものである。

陥し穴状遺構は単独に点在するものと、2～3基の並列するものがある。南側調査区域の7基は2～3基、長軸方向を同じくして並列する。E26・F26・F27陥し穴状遺構の3基は2m～2.5m離れて並ぶ。この3基はやや開口部が広いタイプで形態も類似している。E・27・E28、G29－1・2、F41－1・F42、E42・E43陥し穴状遺構はそれぞれ2基ずつ2m～3mの間隔で並んでいる。対になる2基は開口部の狭いタイプで共通しており、同時期に構築されたことがうかがわれる。重複する例はF41－1・2陥し穴状遺構の2基がある。他の中央や北側調査区域のものは単独に散在している。

第1表　陥し穴状遺構一覧表

（　）は現存値

No.	遺構名	形態		規模			長軸方向	備考
		開口部	底部	開口部cm	底部cm	深さcm		
1	F26陥し穴状遺構	長楕円形	板状	410 × 90	365 × 25	110～125	N60°W	土器44点、石器1点
2	F26 〃	〃	〃	315 × 80	325 × 20	100	N55°W	土器88点
3	E27 〃	〃	溝状	350 × 60	330 × 10	90	N65°E	土器53点、剥片1点
4	F27 〃	〃	板状	290 × 70	310 × 20	85～95	N48°W	土器108点
5	E28 〃	〃	溝状	(320)× 50	295 × 15	80～90	N72°E	土器28点
6	G29－1 〃	〃	〃	(320)× 10	(295)× 10	100	N78°W	土器39点
7	G29－2 〃	溝状	〃	270 × 60	285 × 15	110	N42°W	土器141点、剥片7点
8	F41－1 〃	長楕円形	〃	380 × 30	385 × 10	63	N84°W	なし
9	F41－2 〃	〃	〃	450 × 48	455 × 18	76	N38°W	〃
10	E42 〃	溝状	〃	350 × 35	326 × 5	70	N64°E	〃
11	F42 〃	長楕円形	〃	320 × 50	320 × 10	75	N79°E	〃
12	E43 〃	溝状	〃	(120)× 35	(115)× 25	75	N65°E	〃
13	E50 〃	〃	〃	(360)× 40	(340)× 15	45～60	N70°W	〃
14	G55 〃	長楕円形	〃	360 × 40	310 × 8	80	N78°W	〃
15	E58 〃	〃	〃	340 × 45	335 × 10	90	N20°W	〃
16	F86 〃	溝状	〃	(330)× 40	(325)× 12	58	N70°E	〃
17	F94 〃	長楕円形	〃	280 × 50	278 × 10	88	N17°E	〃
18	F102 〃	〃	〃	365 × 65	356 × 16	95	N75°E	〃

土坑

土坑は大小合わせて10基検出された。平面形は円形・楕円形・隅丸方形・隅丸長方形と多様である。時期は半数以上が埋土の堆積状況から近世以降のものである。縄文時代と思われるのはG22土坑である。平面形は円形で、断面形はビーカー形を呈し、黒褐色土を主体とする土層は他遺構に比較してかたくしまっている。類例等から住居跡に関連する貯蔵穴か円筒形の陥し穴状遺構と推定される。また隅丸長方形のF86・87、E89土坑は類似性が見られるものの、性格は不明である。

溝跡

溝跡は中央調査区域を中心に24条検出しているが、調査区域外や私道の下部に延びているため規模の詳細不明である。Ⅳ層（黄褐色～明黄褐色土）上面まで下げた段階の確認であることから大多数は浅くしか残っていない。幅は30cm～2.3m、深さ5cm～50cm前後と多様で、東西又は南北方向に延びている。断面形は浅い皿形や逆台形を呈しているが、同じ溝跡でも場所によって異なっている。底面は作物等による撹乱の凹凸が半数以上に見られる。また、埋土下位には砂質や泥質土壌の堆積がなく、水の流れていた痕跡は認められない。

中央調査区域の1～3号溝、南側調査区域の4号溝、北側調査区域の20号溝は国道と南北方向に並行し、両端部は東側へ屈曲している。1～3号溝は埋土が異なることから同時存在でなく、3期のつくり変えが行われている。これら5条の溝跡は方向や規模に類似性が見られる。性格は端部の曲り方が移転した宅地跡や道路に沿っていることや、埋土から出土した近世以降の陶磁器破片などから土地の区画などに関連したものと考えられる。時期は地元の古老も記憶がないという点では、大正（1912年）時代以前であろう。他の溝跡は出土遺物がないために時期や性格は不詳である。

第2表　土坑一覧表

（　）は現存値〈　〉は推定値

No.	遺構名	平面形	開口部cm	底部cm	深さcm	出土遺物	備考
1	G22土坑	円形	80×75	65×55	50	なし	縄文時代と推定
2	F50 〃	〃	70×70	65×60	20	鉄釘数点	近世以降
3	E50 〃	〃	140×135	130×125	10	染付磁器1点	〃
4	G61 〃	円形又は隅丸方形	〈260〉	〈185〉	50	土師質土器片	不明
5	F86 〃	隅丸長方形	270×200	225×155	40	なし	〃
6	F87 〃	〃	570×200	510×170	25	〃	〃
7	E87 〃	楕円形	285×165	240×110	50	〃	〃
8	E89 〃	隅丸長方形	(640×310)	(640×250)	30	〃	〃
9	E127 〃	楕円形	(210×150)	138×96	34	〃	〃
10	G131 〃	円形	165×160	150×145	45	〃	〃

（2）遺物について

縄文土器

縄文土器の出土数は約3,600点である。そのほとんどは南側調査区域からであり、中央～北側調査区域にかけては数点だけの出土である。縄文時代中期前葉の大木７ｂ式併行のものが大部分を占めている。土器の文様に用いた施文法の違いで第Ⅰ群～Ⅳ群に大別し、さらに細分した。第Ⅰ群は撚糸圧痕文、第Ⅱ群は沈線文、第Ⅲ群は隆線文を主として用いており、第Ⅳ群は地文ないし無文のものである。

各土器群の出土数は第Ⅳ群土器が80％弱を占め、それ以外でⅡ群土器が比較的多い。本遺跡の土器群は技法的に沈線文や刺突文を多用している。隆線文は第Ⅰ群・Ⅱ群にも併用されていることからすれば、施文した土器の数はかなりになる。

次に種類と器形の点から各類を比較してみる。口縁部が内湾するキャリパー形深鉢や大きな山形突起をもつ大波状口縁の深鉢が大半を占める中で、Ⅱ群－３類は口縁部の直上する深鉢を主体としている。口縁部が直上し、体部が湾曲する単純な浅鉢もこの類に含まれる。このことはⅡ群－３類の文様帯が狭くてすむため、主に口縁の単純な器形に用いられたと考えられる。口縁部の直上する深鉢はⅠ群－１・２類でも見られる。口縁部が外反又は外傾する深鉢は、主に隆線文の使用されたⅠ群－２類、Ⅱ群－２・５類、Ⅲ群－１・２類等にある。口縁部の文様帯と体部を区画するのに隆線文が多用されたことに起因するようである。。

浅鉢形は既述のⅡ群－３類の他にⅠ群－２類、Ⅱ群－２類、Ⅳ群－１・２類等に見られる。最も一般的な形は口縁部が強く内湾し、体部下半が直線的に狭くなり、底部は小さめになる。これが隆起線を併用している類に多いことは、口縁部文様帯と屈曲した体部を区画するのに隆線文が好まれたことによると考えられる。一方、体部下半の形は似ているが口縁部の直上した無文の浅鉢がⅣ群－２類にまとまっている。口縁部が強く内湾した浅鉢形は、後続する大木８ａ式期になると、より強く「く」の字状に屈曲した器形となる。

主要な器形である大波状口縁の深鉢は、各類ごとに大きな器形の変化は見られない。山形突起（扇状把手）の最も多い形は口唇部の平坦なものであるが、それに刻みを施したり、くびれをつけて耳状とするものが各類にある。突起の形状の時期的推移は把握できない。キャリパー形深鉢が少なく、大波状口縁の深鉢が大半を占めることは大木７ｂ式の特徴を示している。

文様施文における各類間の傾向性は次のような点を指摘できる。山形突起を中心として展開する長楕円形や大波状などの区画文は、大部分が共通したモチーフである。区画文の中心か要点に配される渦巻文・円文のまわりを縁どる連弧文、小波状文、平行線による曲線文など文様要素はよく似ている。数が少ないが菱形文、Ｙ字状、懸垂文、摘み状又は瘤状の貼付文などはⅠ群－２類、Ⅱ群－２類・３類、Ⅲ群－１～４類と主に隆線文の使用される類に限られている。

隆起線を押圧又は刺突してジグザグな小波状とする表現もⅠ・Ⅱ群によく用いられる。

器形や文様のモチーフに共通する点が多いことから、ほぼ同一時期に属する土器群と考えられる。しかし、同一時期内における変遷は推定される。近似した器形の器種をつくっていながら、同じ土器内に撚糸圧痕文と沈線文の両方使用しているものは非常に少なく、3例だけである。撚糸圧痕文と沈線文を併行して使用したものなら、もっと多く含まれていることが考えられる。器種ごとの使いわけはない。どちらかを主な施文法として多用した時期があったようである。平行沈線文や隆線文が主体となるのが後続する大木8a式期であるとすれば、沈線文や隆線文が主体のⅡ群・Ⅲ群土器がやや新しい可能性がある。特にⅡ群2類やⅢ群1・3類には大木8a式とみてよい土器が含まれている。

遺物の出土状況からはこのような時期差を示すものはない。各類ごとの共伴とか特定区域への偏在性は全くなく、混在の様相を呈している。しかし、住居跡には重複があり、若干の時期差が考えられる。

石器

出土した石器は石匙3点、楔形石器1点、掻・削器10点、使用痕ある剥片9点、磨製石斧1点、磨石3点、凹石2点、石棒1点、フレーク類90点程である。主として組掘と遺構検出段階で、住居跡のある南側調査区域から出土している。

土器の出土数や同時期の他の遺跡に比べれば、やや少ない出土量である。器種組成の点では定形的な石器が少なく、不定形な石器の占める割合が高い。また、この時期に使用されたはずの石鏃や打製石斧が1点も出土していない。磨石や石棒などの礫石器も通常の縄文中期の遺跡の出土例から見れば少ないようである。地域性もあるが、遺物を包含する層の撹乱もその一因であろう。

石匙は横形1点、縦形2点で、欠損部のない完形品である。チャートを石材とした楔形石器は明らかな成形加工のないものである。掻・削器は形状に統一性がみられず不定で、素材とした剥片の一部に調整加工を施したものである。刃部の形や角度は種々あり、また両面調整と片面調整の両方併用し、その用途は切削器、掻器、刺突具等の多様なあり方を示している。石材は粘板岩、硬質・珪質泥岩類である。使用痕ある剥片の中には、自然に生じた刃こぼれ状のものを含んでいる。小型の磨製石斧は刃部が欠損後磨って平坦にして、磨石等に転用したものと考えられる。磨石は自然石の側辺を使用したものであり、普遍的に見られる上下の広い面を磨った形のものとは異なっている。凹石はその機能する凹みを複数もつものである。石英安山岩を石材とした石棒は、粗い稜をもつ角柱状である。細かな成形加工はなく、用途は不詳である。

第3表　石器一覧表

遺物番号	器種	出土地点	計測値(cm・g)				石質	産地・成生年代
			長さ	幅	厚さ	重さ		
224	石匙	F29区粗掘	4.4	6.6	0.5	12.9	硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
225	〃	F30区　〃	5.5	2.1	0.7	7.5	珪質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
226	〃	G26区　〃	5.9	1.9	0.6	5.9	凝灰質珪質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
227	楔形石器	F29区　〃	3.3	3.2	1.4	17.5	チャート	古生界・北上山地
228	掻・削器	F27区　〃	8.2	3.3	1.4	5.0	凝灰質珪質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
229	〃	G31区　〃	6.2	1.9	0.9	12.4	硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
230	〃	F27区検出面床上	7.5	3.3	1.0	21.4	チャート	古生界・北上山地
231	〃	F27区粗掘	4.6	3.6	1.1	17.0	珪質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
232	〃	F29区　〃	6.5	1.5	1.3	12.0	粘板岩	古生界・北上山地
233	〃	E31区　〃	4.5	4.0	1.0	17.7	硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
234	〃	F・G29～30区　〃	3.5	2.0	0.6	0.5	硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
235	〃	E29区　〃	5.1	4.3	2.5	56.0	粘板岩	古生界・北上山地
236	〃	E26陥し穴埋土	3.4	4.8	0.7	10.0	硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
237	〃	F30区粗掘	4.2	5.6	1.6	36.0	珪質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
238	〃	F27区　〃	7.5	10.0	1.9	100	凝灰質珪質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
239	使用痕ある剥片	F28区ゴミ穴	5.2	3.7	1.1	21.0	珪質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
240	〃	F28区粗掘	5.4	3.4	1.8	31.0	珪質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
241	〃	F30区　〃	3.8	2.9	1.1	7.0	硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
242	〃	E31区　〃	4.9	4.1	0.9	19.7	硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
243	〃	F27区　〃	4.3	3.9	12.0	16.0	粘板岩	古生界・北上山地
244	〃	E・F27区　〃	6.7	5.0	1.8	70.0	硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
245	〃	E31区　〃	3.4	4.1	1.3	14.6	硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
246	〃	G29-2陥し穴埋土下	2.7	2.5	0.8	3.0	輝緑凝灰岩	古生界・北上山地
247	〃	F30区粗掘	3.1	4.5	0.9	10.0	硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地
248	磨製石斧	F29区　〃	5.5	3.3	0.8	30.0	チャート質淡緑色凝灰岩	古生界・北上山地
249	磨石	F27区　〃	13.0	8.0	4.1	590	硬砂岩	古生界・北上山地
250	〃	F29住炉縁石	12.0	7.6	3.1	335	細砂質凝灰岩	古生界・北上山地
251	凹石	G26区粗掘	10.9	10.6	7.1	695	両輝石安山岩堆岩	第四系・奥羽山地
252	〃	F25区　〃	12.6	9.3	5.4	950	石英安山岩	新第三系中新統・奥羽山地
253	石棒	F29区　〃	30.3	5.5	3.1	800	石英安山岩	新第三系中新統・奥羽山地

※長さ・幅の計測値は最大値である。

その他の遺物

平安時代の須恵器と土師器の小片が85点出土している。須恵器は外面に平行叩き具痕、内面に平行や放射状の当て具痕が見られる。土師器はロクロ使用の坏と甕があり、小破片のため全体の器形は不明である。近世以降現代までの新しい時代の陶磁器が、溝跡や表土から多く出土している。溝に伴う陶磁器はいずれも鉄釉陶器であるが、中世以前にさかのぼるものはない。江戸期の寛永通寶が7点出土し、そのうち古寛永が1点、新寛永が6点である。

むすび

昭和62・63年度に実施された調査において、縄文時代中期前葉（大木7b式期）の集落の一部が段丘の南側区域で営まれていたことが確認できた。また、縄文時代の陥し穴状遺構は全域に散在し、国道に並行又は交差する時期不明な溝跡が多数存在することも明らかになった。調査区は国道両側の狭い範囲であることから、遺跡全体の性格については不詳な点が多く残っている。北上川中流域における縄文時代の集落変遷を知る上での貴重な資料といえよう。

〈参考文献〉

佐藤正雄・他（1972）：紫波町史第1巻　紫波町

朴沢正耕・他（1979）：東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　岩手県文化財調査報告書第35集

佐々木勝・他（1977）：東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ　岩手県文化財調査報告書第51集

三浦謙一・他（1979）：『稲村遺跡・中田遺跡・古屋敷遺跡』　岩手県埋文センター文化財調査報告書第19集

鎌田祐二・他（1973）：『比爪館遺跡』　紫波町文化財調査報告書第11集

光井文行・他（1986）：犬森古墳群遺跡発掘調査報告書　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第113集

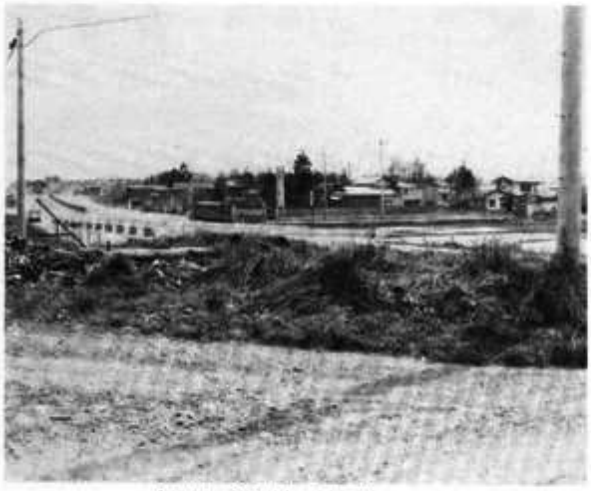
高橋信雄・他（1982）：岩手の土器　岩手県立博物館

板橋　源・他（1985）：岩手の遺跡　岩手県埋蔵文化財センター

写 真 図 版

伝善知鳥館跡遠景(南から)

伝善知鳥館跡近景(南から)



伝善知鳥館跡近景(北から)

伝善知鳥館跡トレンチ

南日詰遺跡南側畑地調査前

南日詰遺跡南側区域調査前(北から)

写真図版Ⅰ　遠景

北側区域調査前(南から)

北側区域調査前(南から)

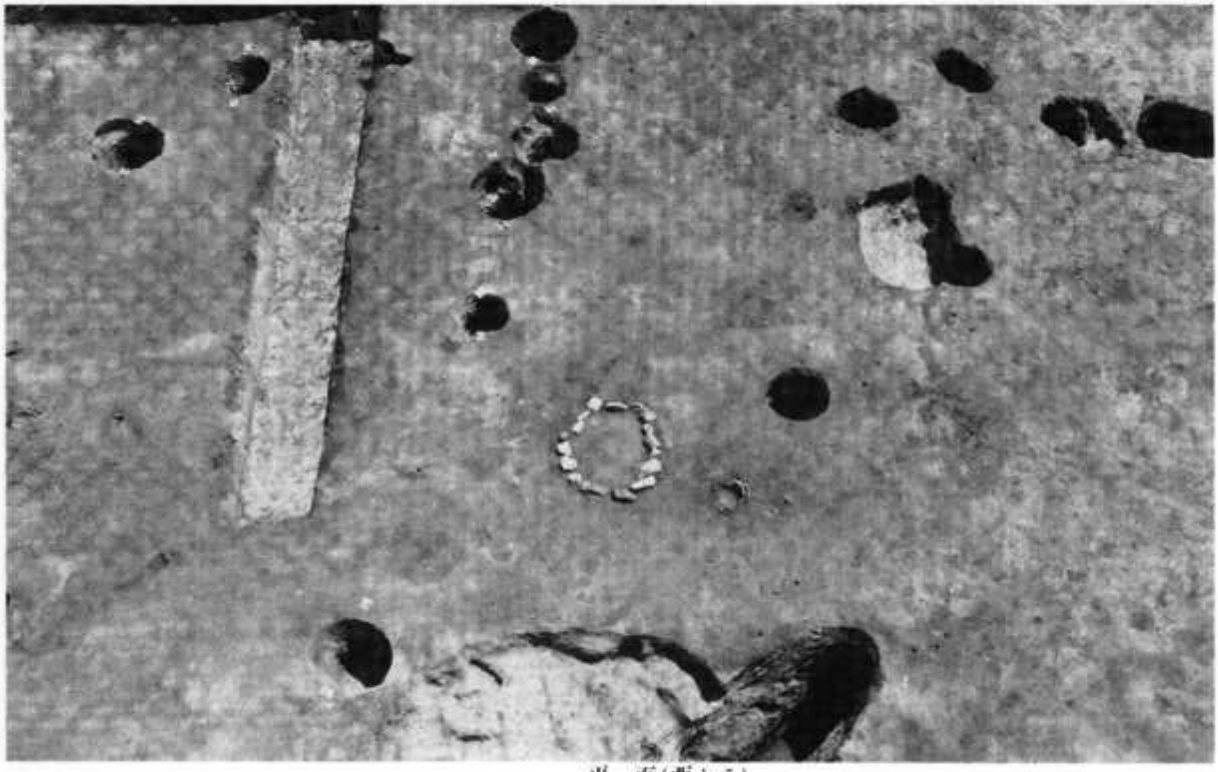
中央区域調査前(北から)

22・23号溝跡検出状況(北から)

F 86・87土坑検出状況(北から)

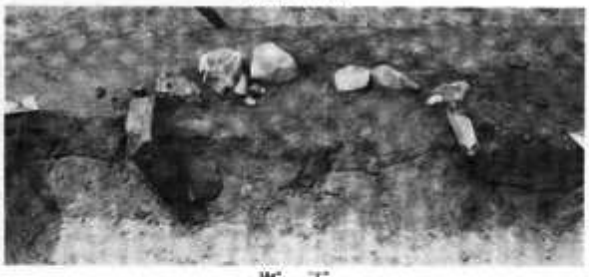
南側区域検出状況(南から)

写真図版 2　遠景・遺構検出状況



平　面(西から)

石囲炉平面

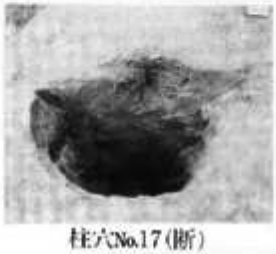


断　面

柱穴No.13

柱穴No.15

柱穴No.17



柱穴No.17(断)

柱穴No.20

柱穴No.20(断)

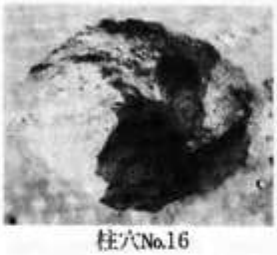
写真図版 3　F 26住居跡

平　面(西から)

石囲炉

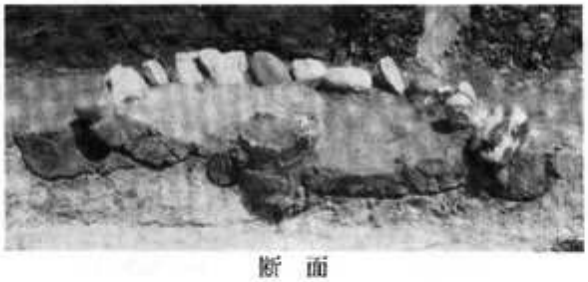
柱穴No.13

柱穴No.14



柱穴No.16

柱穴No.18



断　面

柱穴No.19

柱穴No.21

写真図版 4　G 26住居跡

平　面(東から)

土器埋設炉

断　面

柱穴No. 2

柱穴No. 3

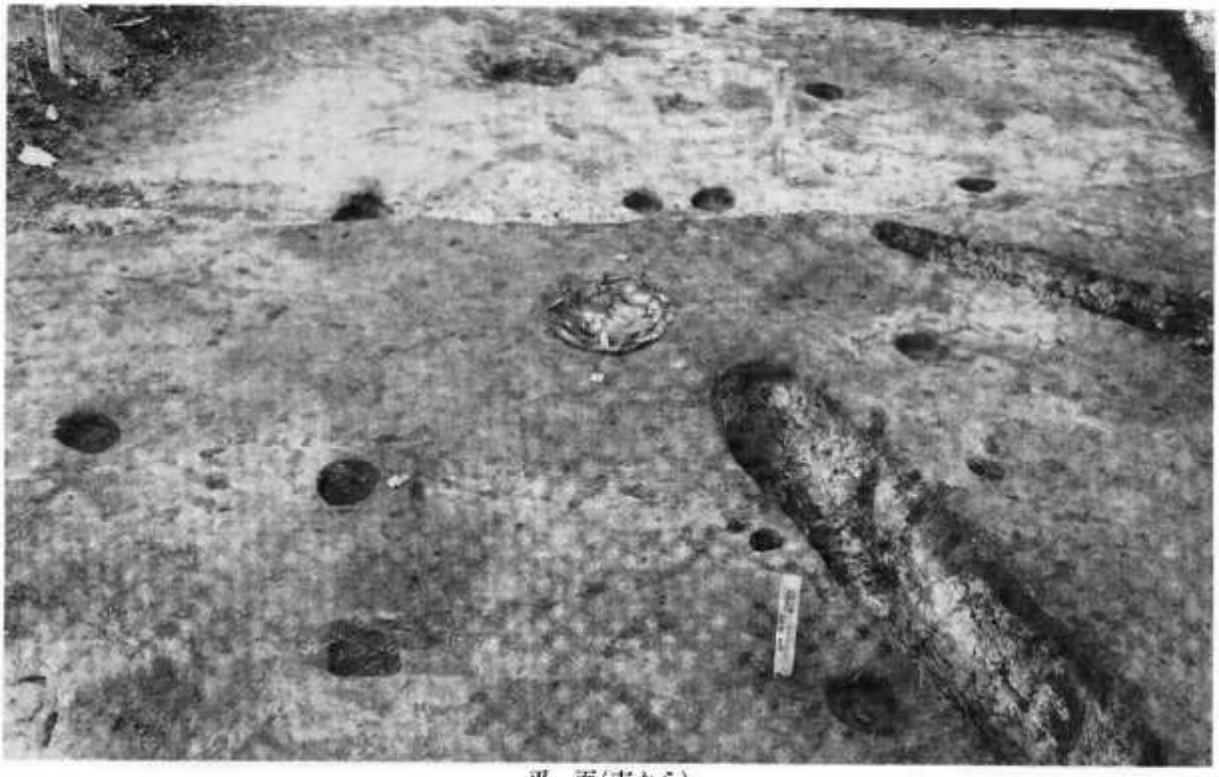
柱穴No. 7

柱穴No. 3 (断)

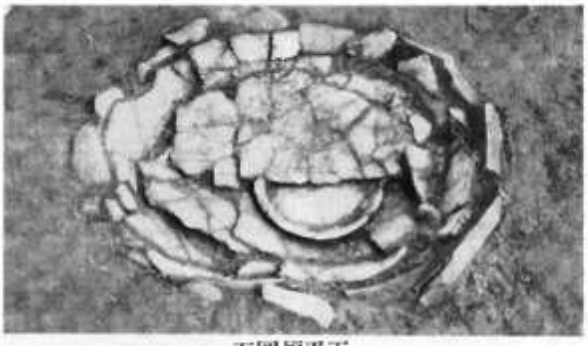
柱穴No. 8

柱穴No. 9

写真図版5　E 27住居跡



平　面(南から)



石囲炉平面

石囲炉土器をとり除いた平面

柱穴No. 3 (断)

柱穴No. 5 (断)

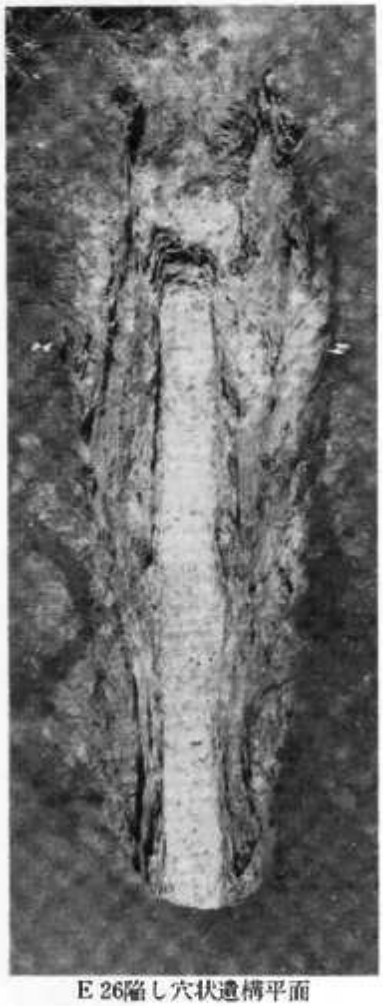
柱穴No. 7 (断)

柱穴No. 8 (断)

柱穴No.10(断)

柱穴No.10(完堀)

写真図版 6　F 29住居跡



E 26陥し穴状遺構平面

F 26陥し穴状遺構平面

E 27陥し穴状遺構平面

断　面

断　面

断　面

写真図版 7　陥し穴状遺構(1)

F 27陥し穴状遺構平面

E 28陥し穴状遺構平面

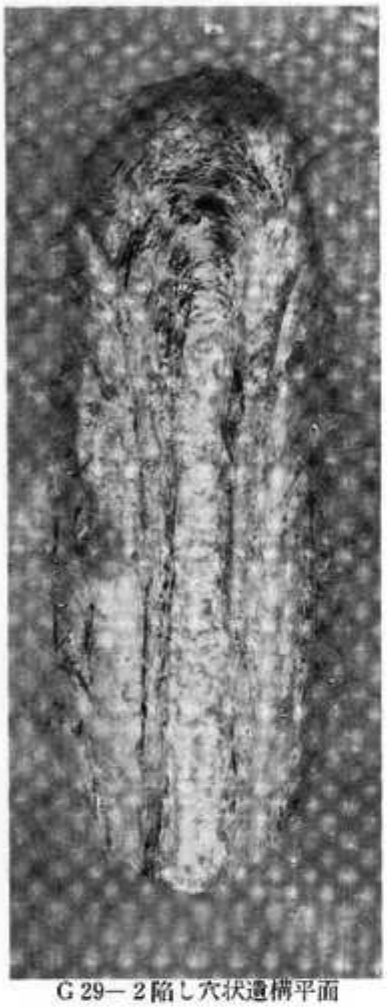
G 29－1陥し穴状遺構平面

断　面

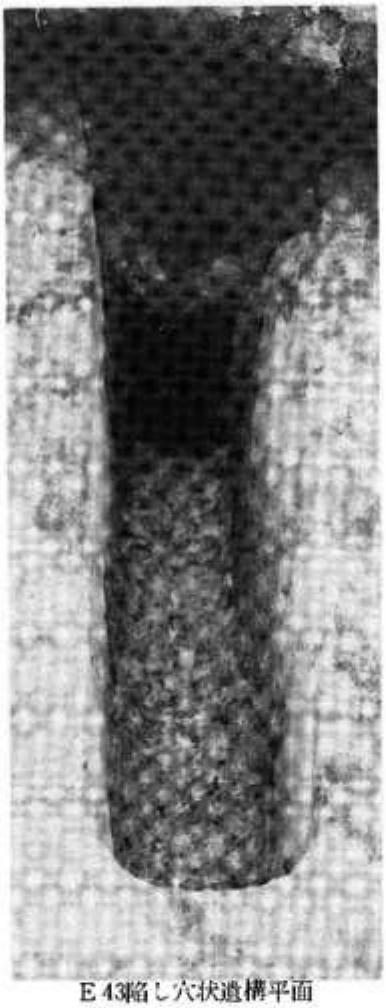
断　面

断　面

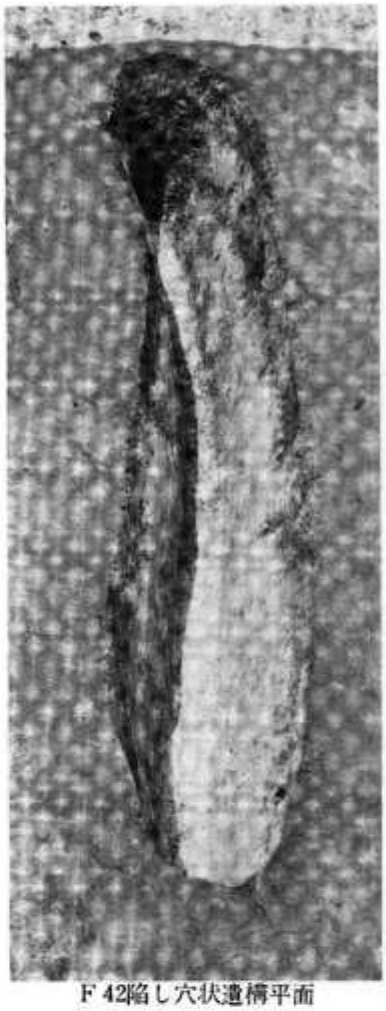
写真図版 8　陥し穴状遺構(2)



G 29－2陥し穴状遺構平面

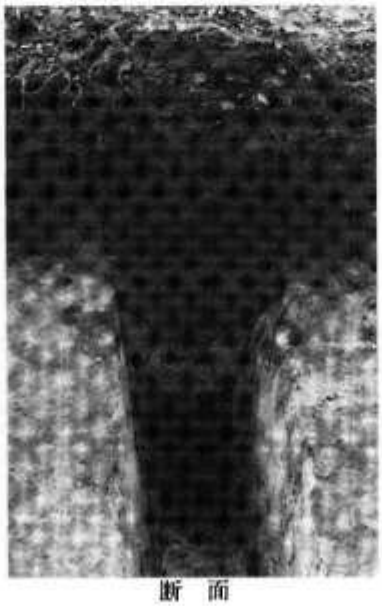


E 43陥し穴状遺構平面



F 42陥し穴状遺構平面

断　面

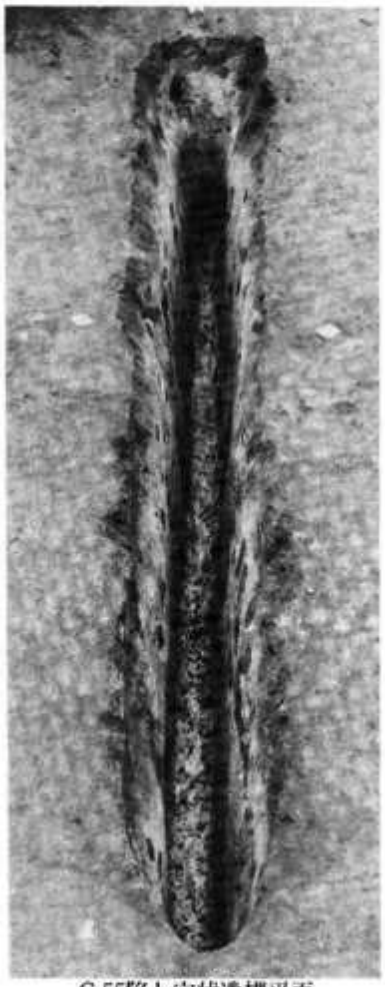


断　面

断　面

写真図版 9　陥し穴状遺構(3)

E 50陥し穴状遺構平面

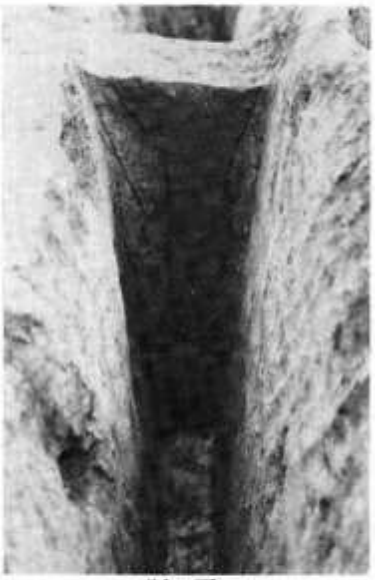


G 55陥し穴状遺構平面

E 58陥し穴状遺構平面

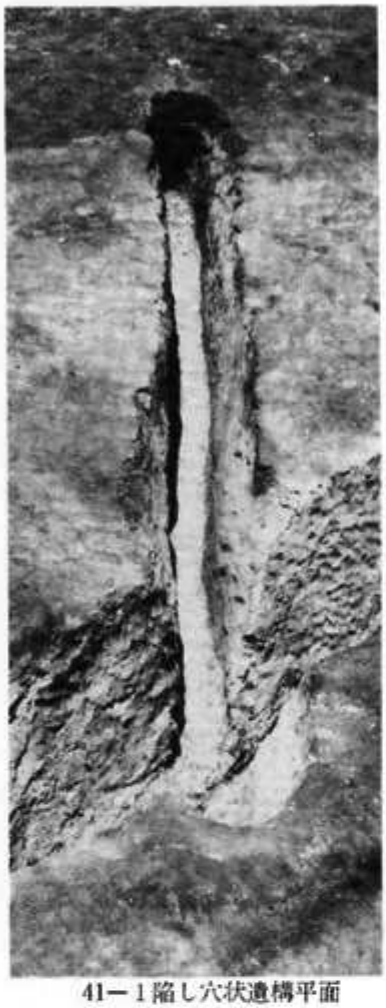
断　面

断　面



断　面

写真図版10　陥し穴状遺構(4)



41－1陥し穴状遺構平面

F 41－2陥し穴状遺構平面

E 42陥し穴状遺構平面

断　面

断　面

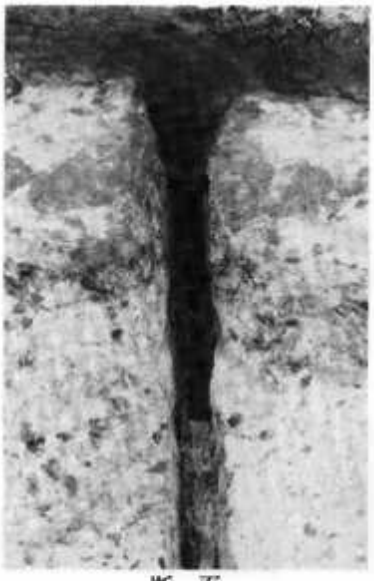
断　面

写真図版11　陥し穴状遺構(5)

F 86陥し穴状遺構平面

F 94陥し穴状遺構平面

F 102陥し穴状遺構平面

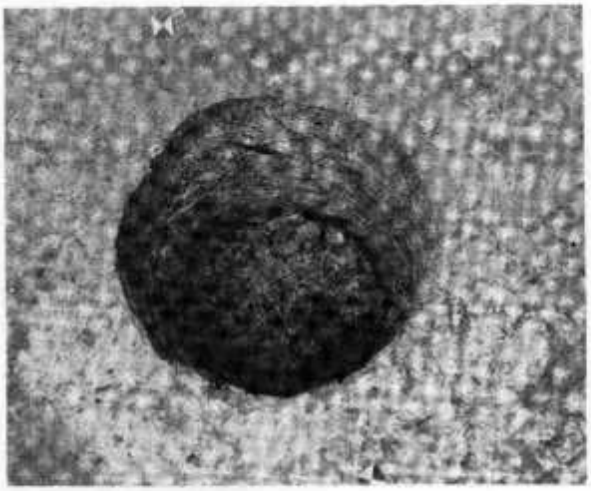


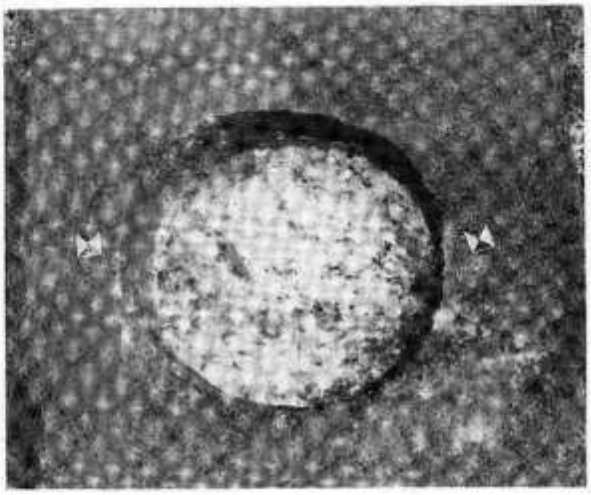
断　面

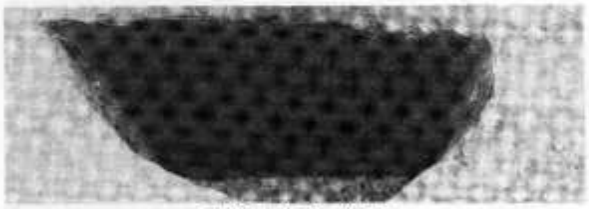
断　面

断　面

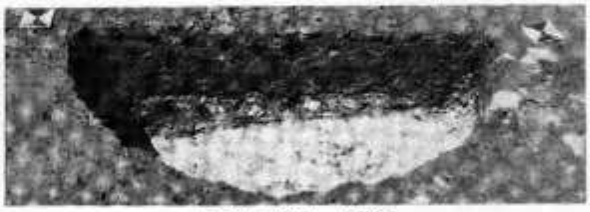
写真図版12　陥し穴状遺構(6)



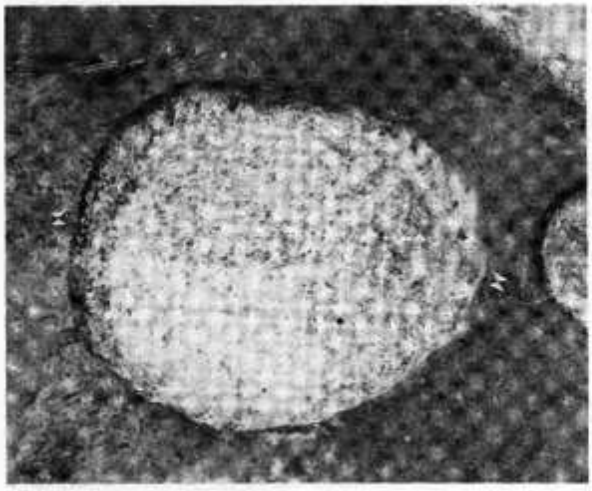


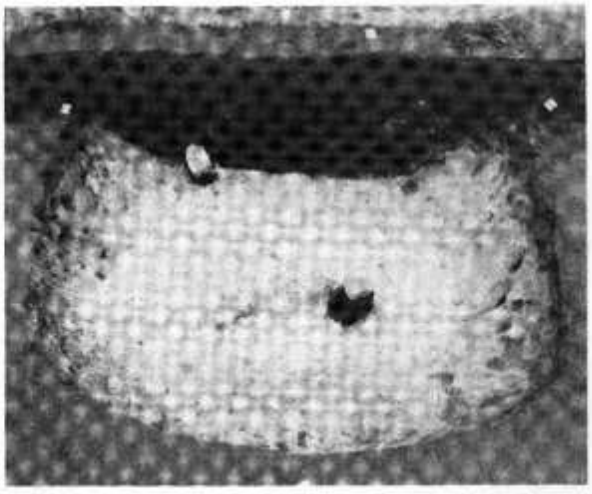


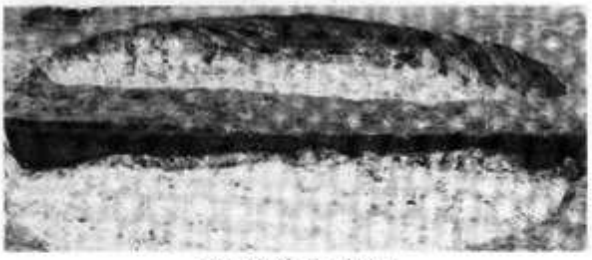
G 22土坑平・断面



F 50土坑平・断面







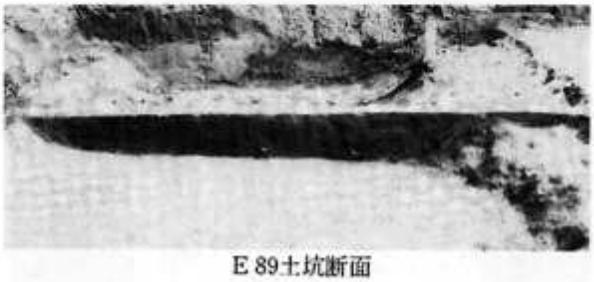
E 50土坑平・断面

G 61土坑平・断面

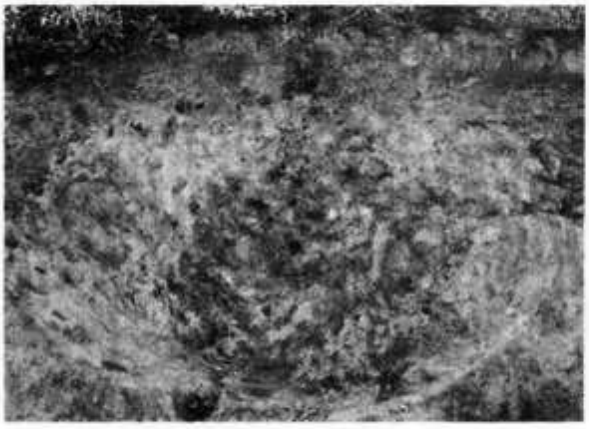
写真図版13　土坑(1)

E 87・89土坑平面　　F 86・87土坑平面

E 87土坑断面

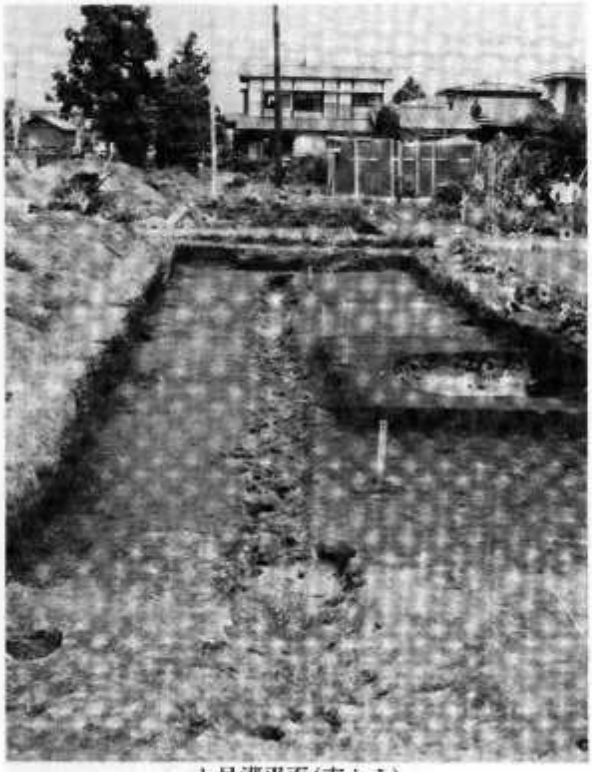


E 89土坑断面

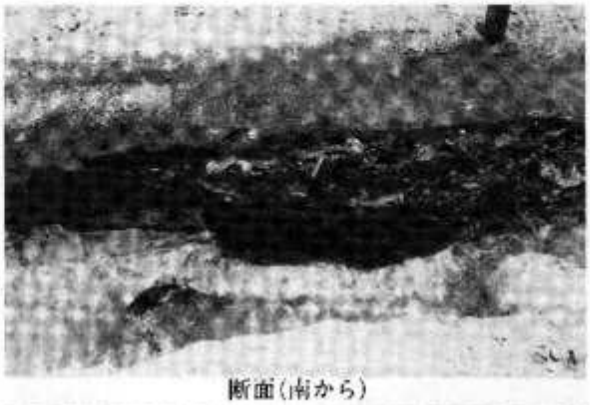


E 127土坑平・断面

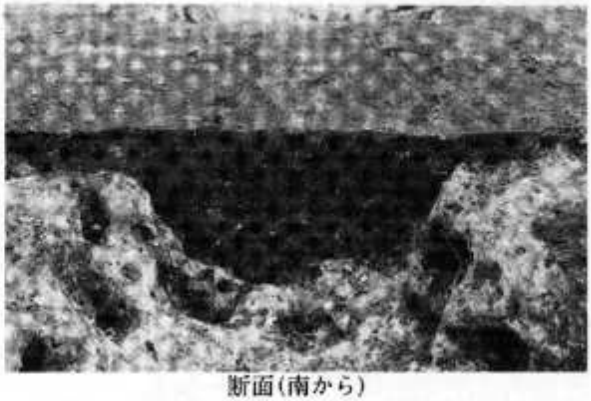
写真図版14　土坑(2)



1号溝平面(南から)



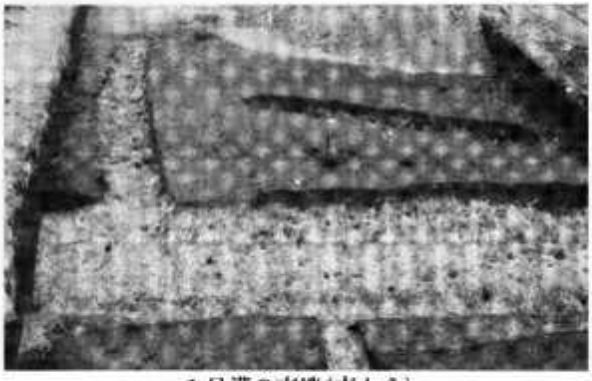
断面(南から)



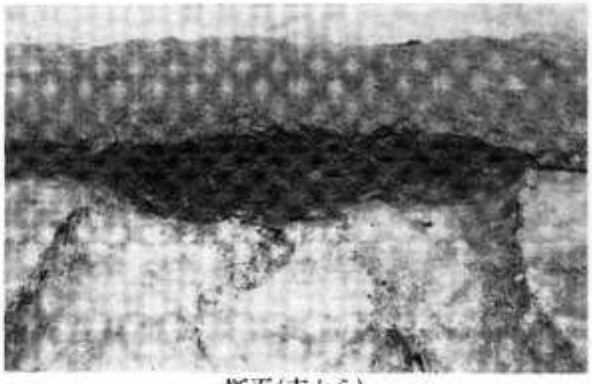
断面(南から)

1号溝の北端(南から)

断面(南から)



1号溝の南端(南から)



断面(南から)

写真図版15　溝跡(1)

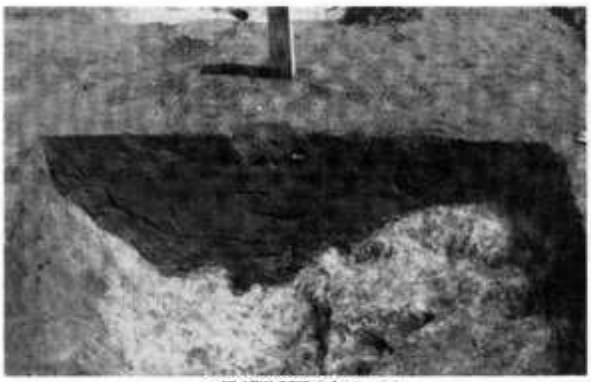
2号・3号溝平面(南から)

2号・3号溝平面(南から)

3号溝平面(西から)

2号・3号溝平面(南から)

2号・3号溝断面(南から)

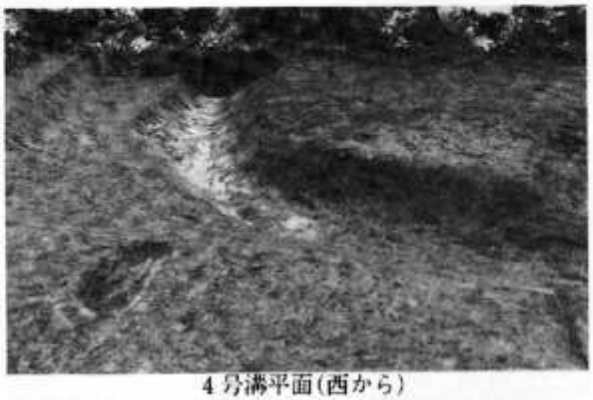


2号溝断面(南から)

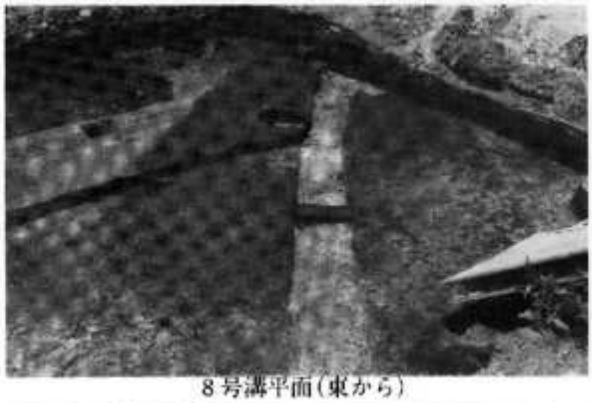
2号溝断面(南から)

写真図版16　溝跡(2)

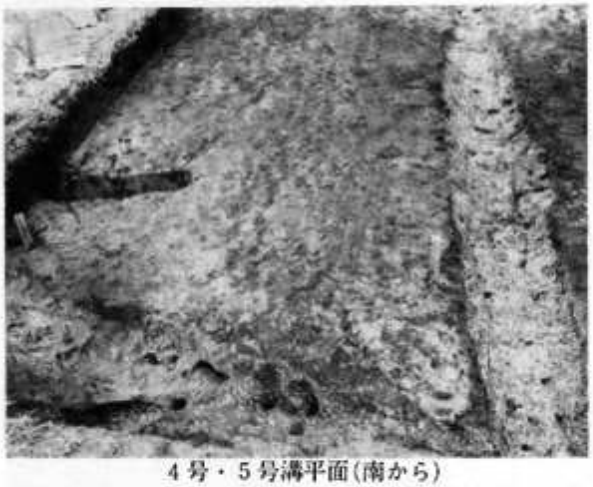
4号溝平面(南から)



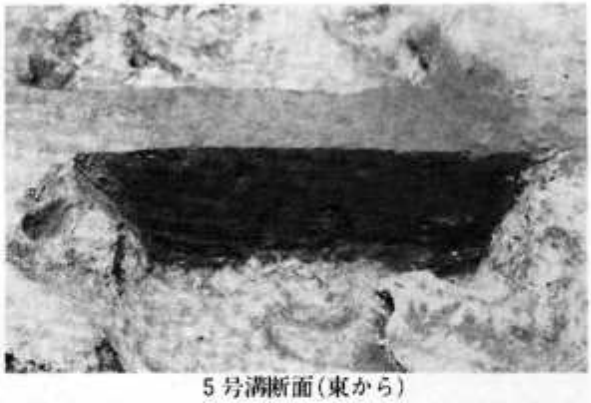
4号溝平面(西から)



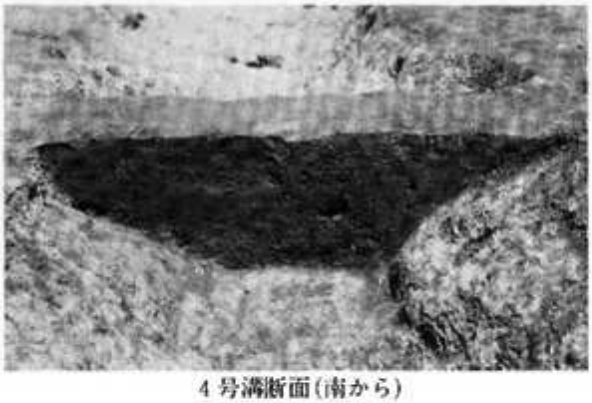
8号溝平面(東から)



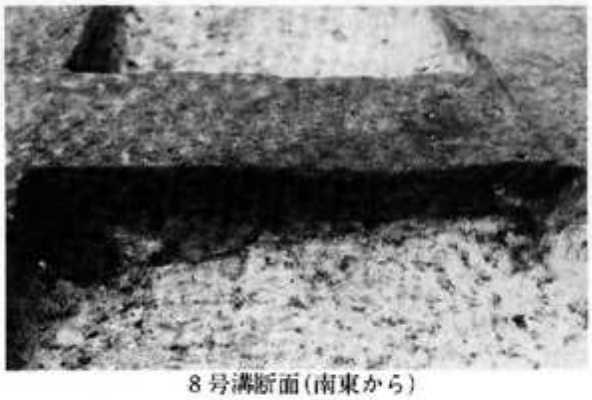
4号・5号溝平面(南から)



5号溝断面(東から)

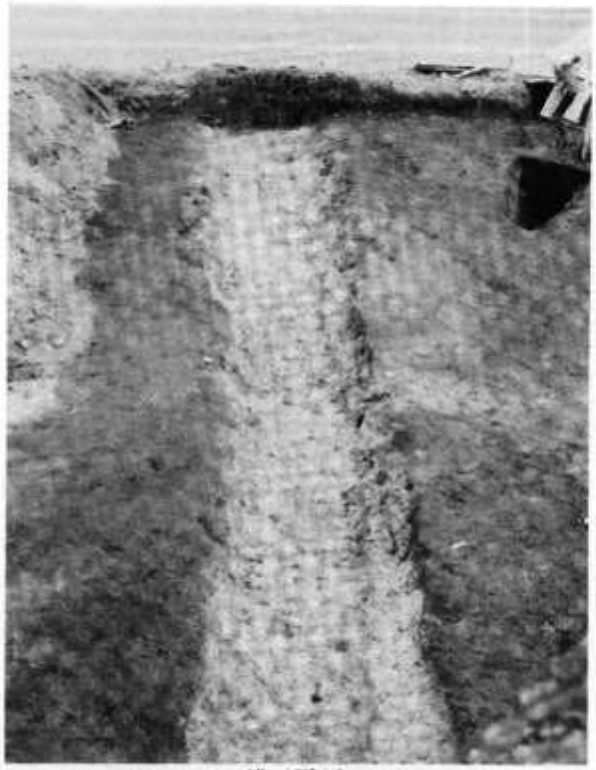


4号溝断面(南から)



8号溝断面(南東から)

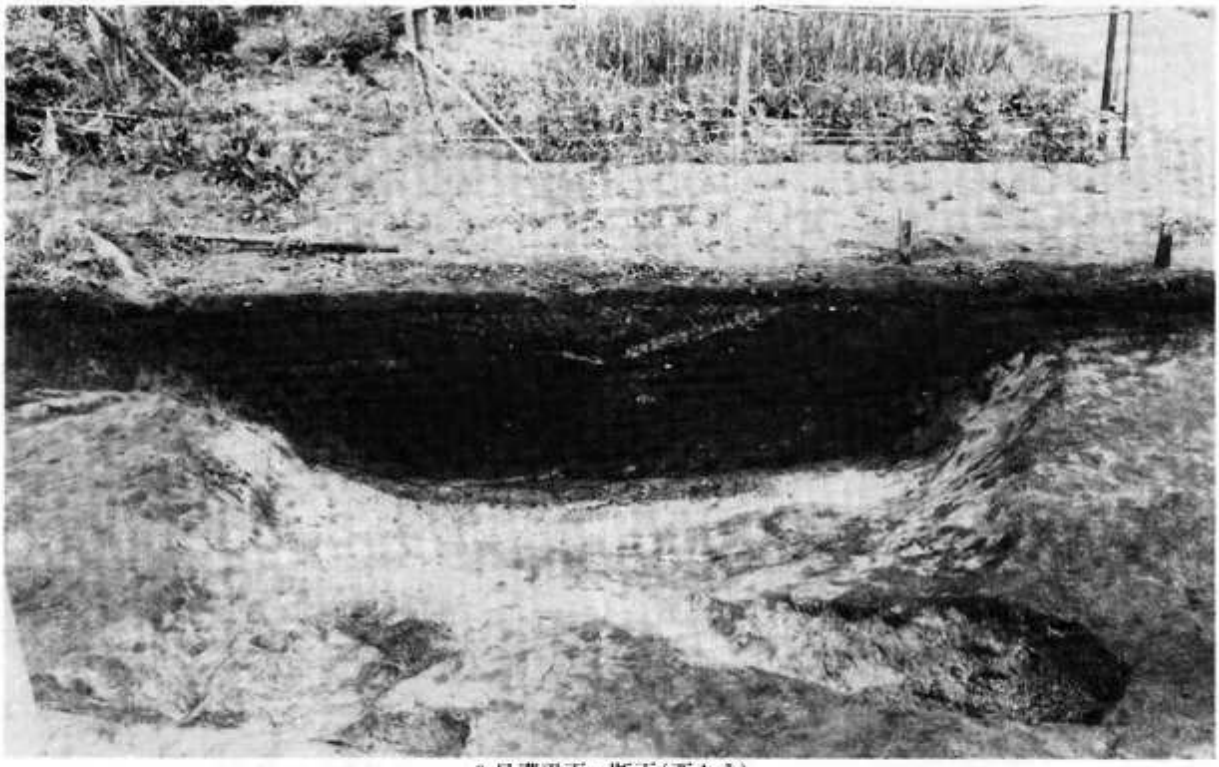
写真図版17　溝跡(3)



6号溝平面(東から)

7号溝平面(南西から)

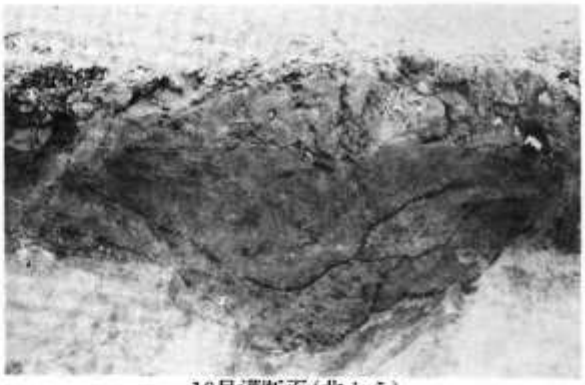
6号溝断面(東から)



9号溝平面・断面(西から)

写真図版18　溝跡(4)

10号溝平面(北から)



10号溝断面(北から)

12号溝断面(南から)

11・12号溝平面(南から)

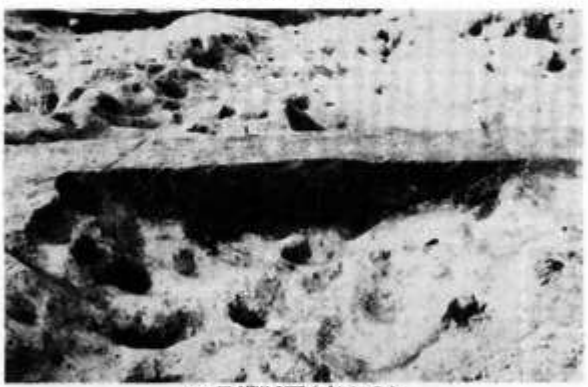
11号溝断面(南から)

13・14号溝平面(北から)

写真図版19　溝跡(5)

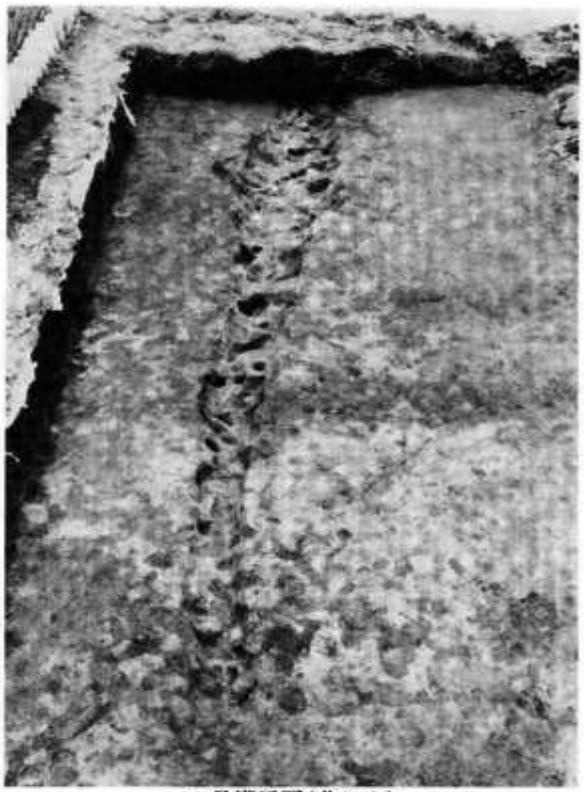
13号溝断面(南から)

14号溝断面(南から)



14号溝断面(南から)

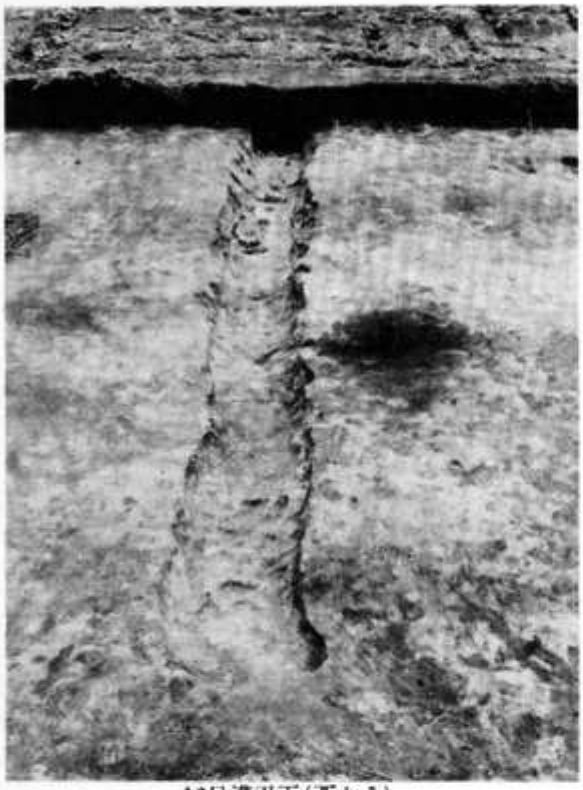
17号溝平面(南から)



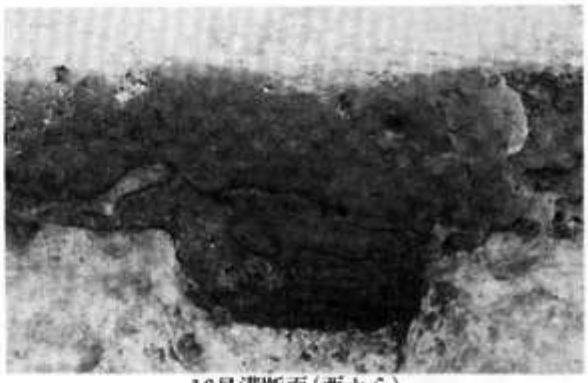
14号溝平面(北から)

15号溝平面(南から)

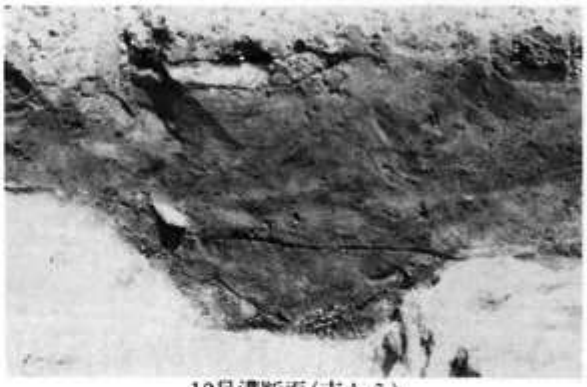
写真図版20　溝跡(6)



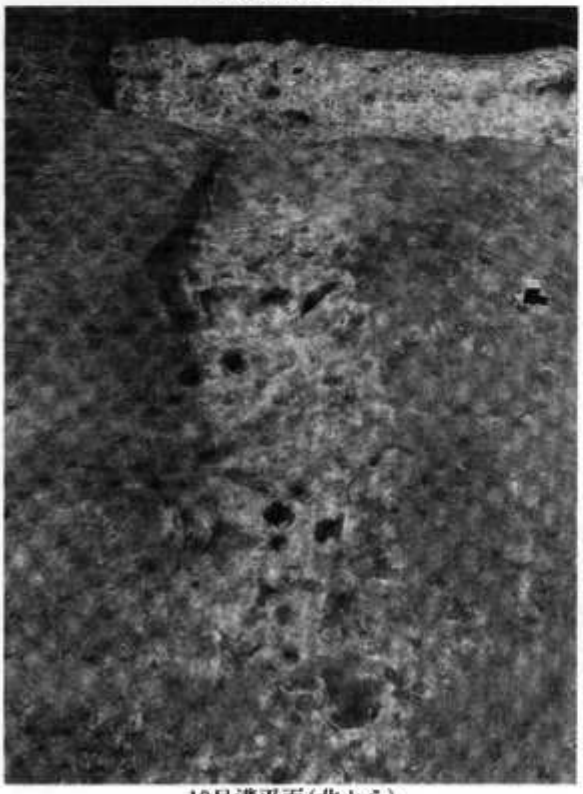
16号溝平面(西から)



16号溝断面(西から)



18号溝断面(南から)

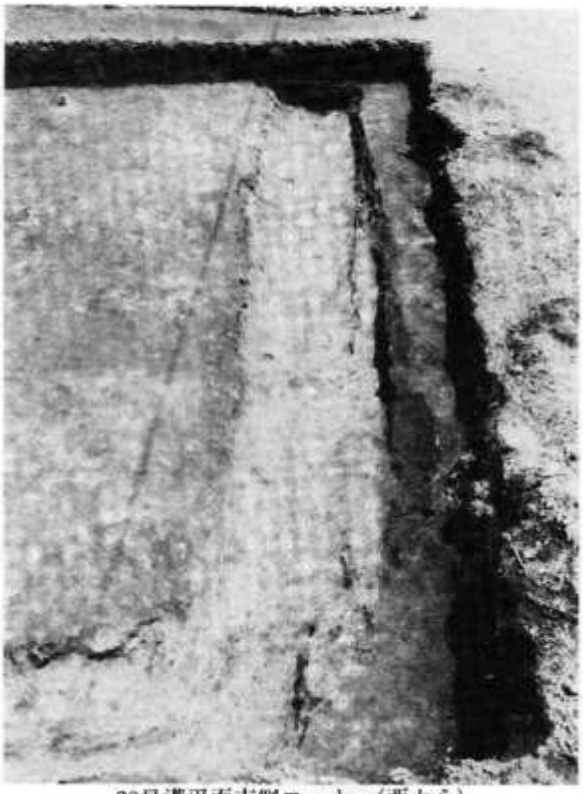


19号溝平面(北から)

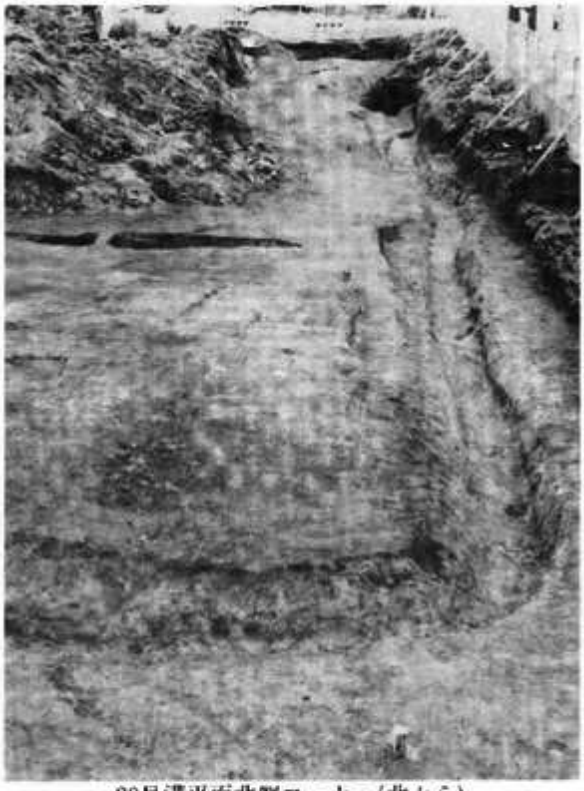
18号溝平面(南から)

写真図版21　溝跡(7)

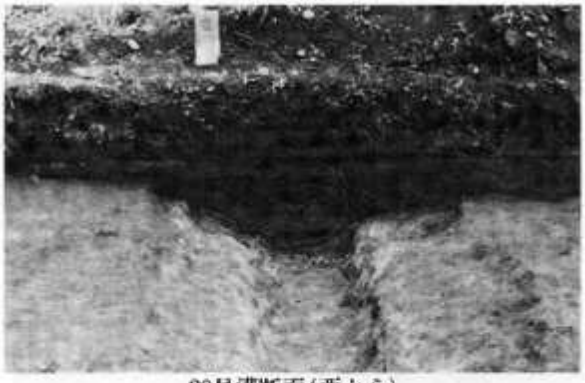
20号溝平面(南から)



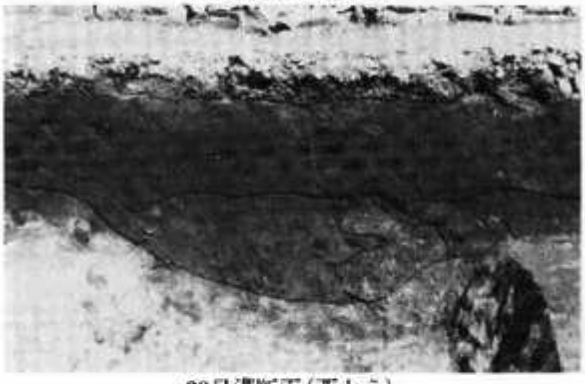
20号溝平面南側コーナー(西から)



20号溝平面北側コーナー(北から)



20号溝断面(西から)



20号溝断面(西から)

写真図版22　溝跡(8)

21号溝平面(西から)

22号溝平面(北から)

23号溝平面(西から)

22号溝断面(南から)

23号溝断面(西から)

写真図版23　溝跡(9)

南側畑地(南から)

南側畑地(南から)

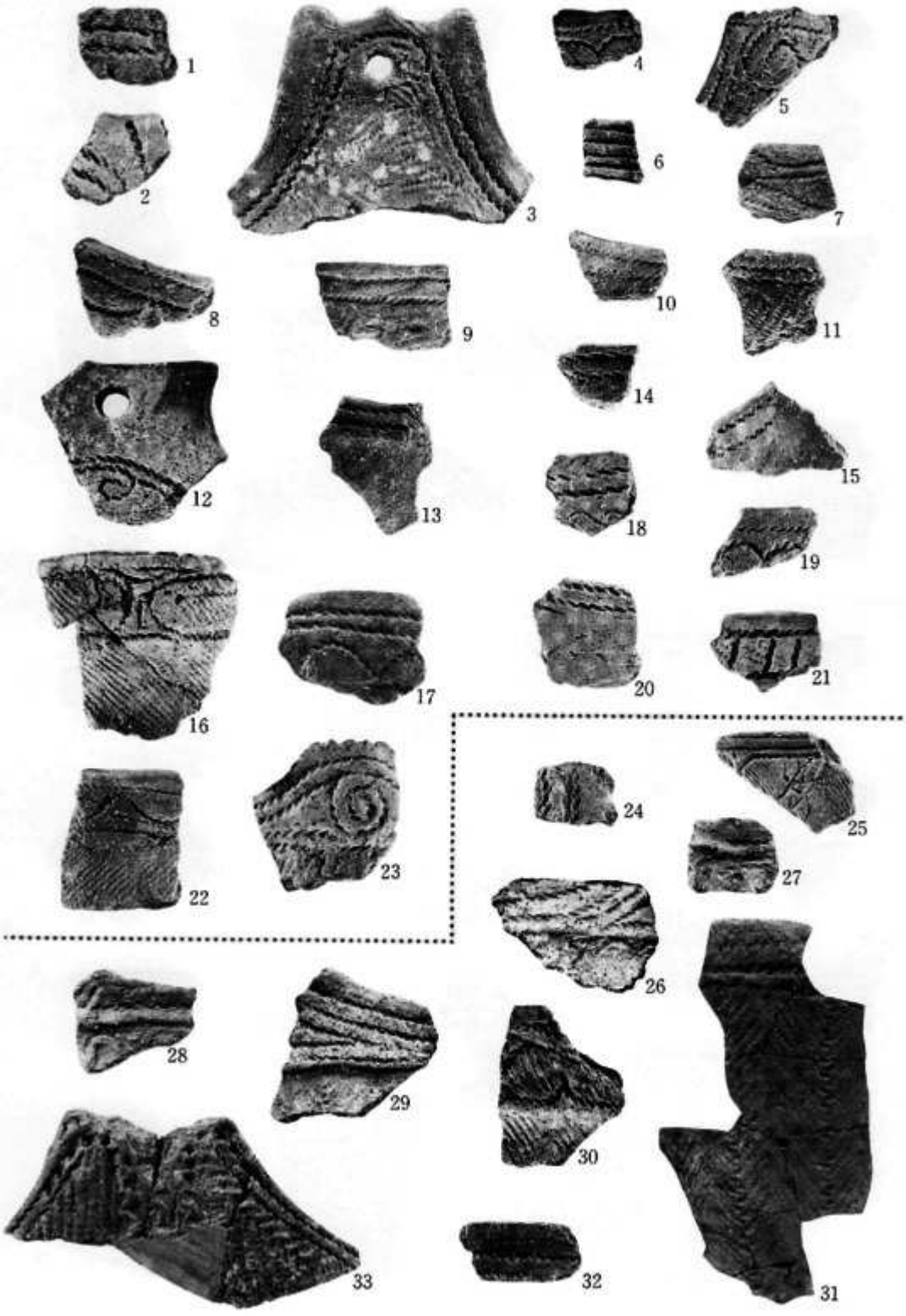
南側区域(北から)

中央区域(南から)

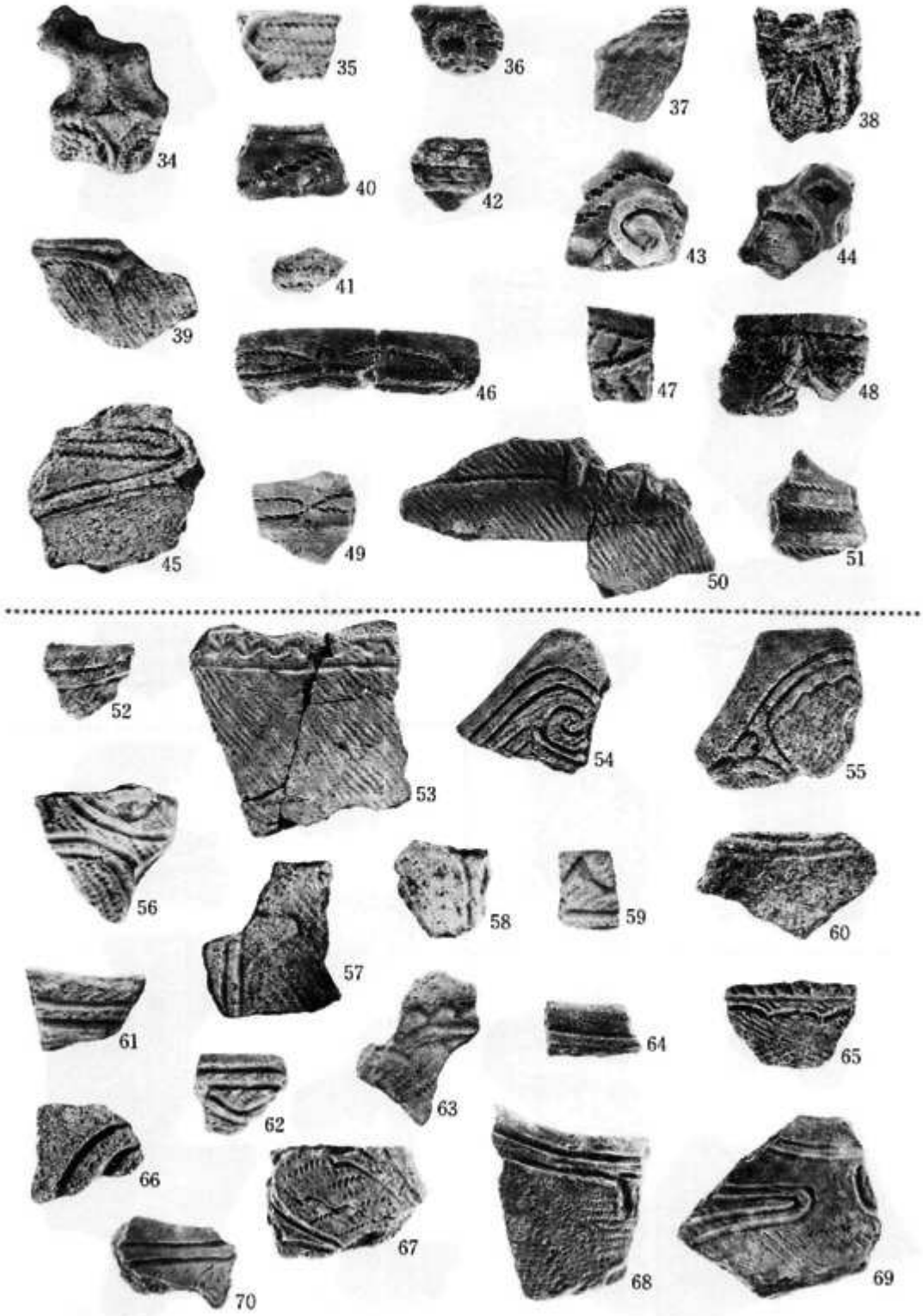
2号溝(北から)

1号溝(北から)

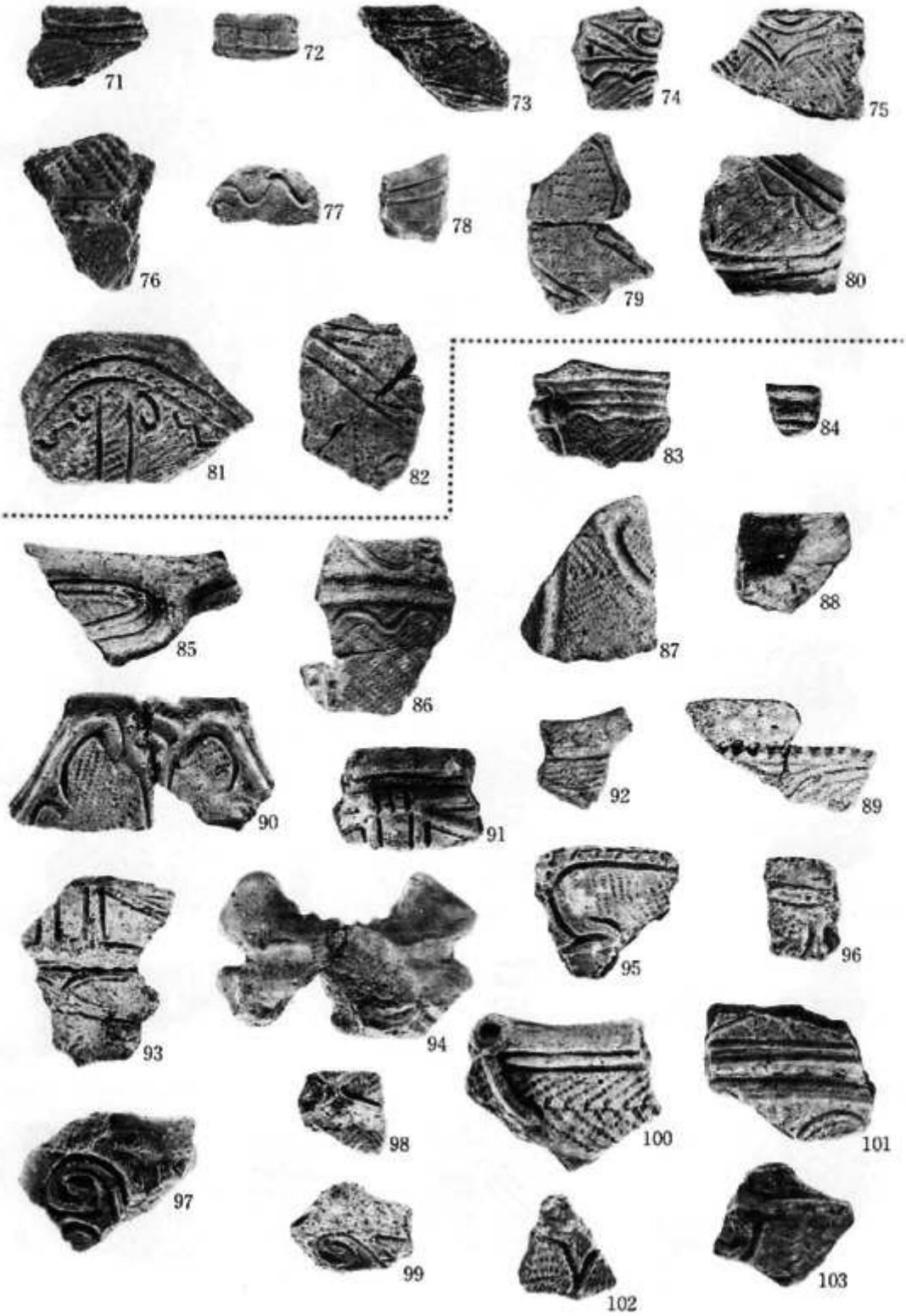
写真図版24　調査風景



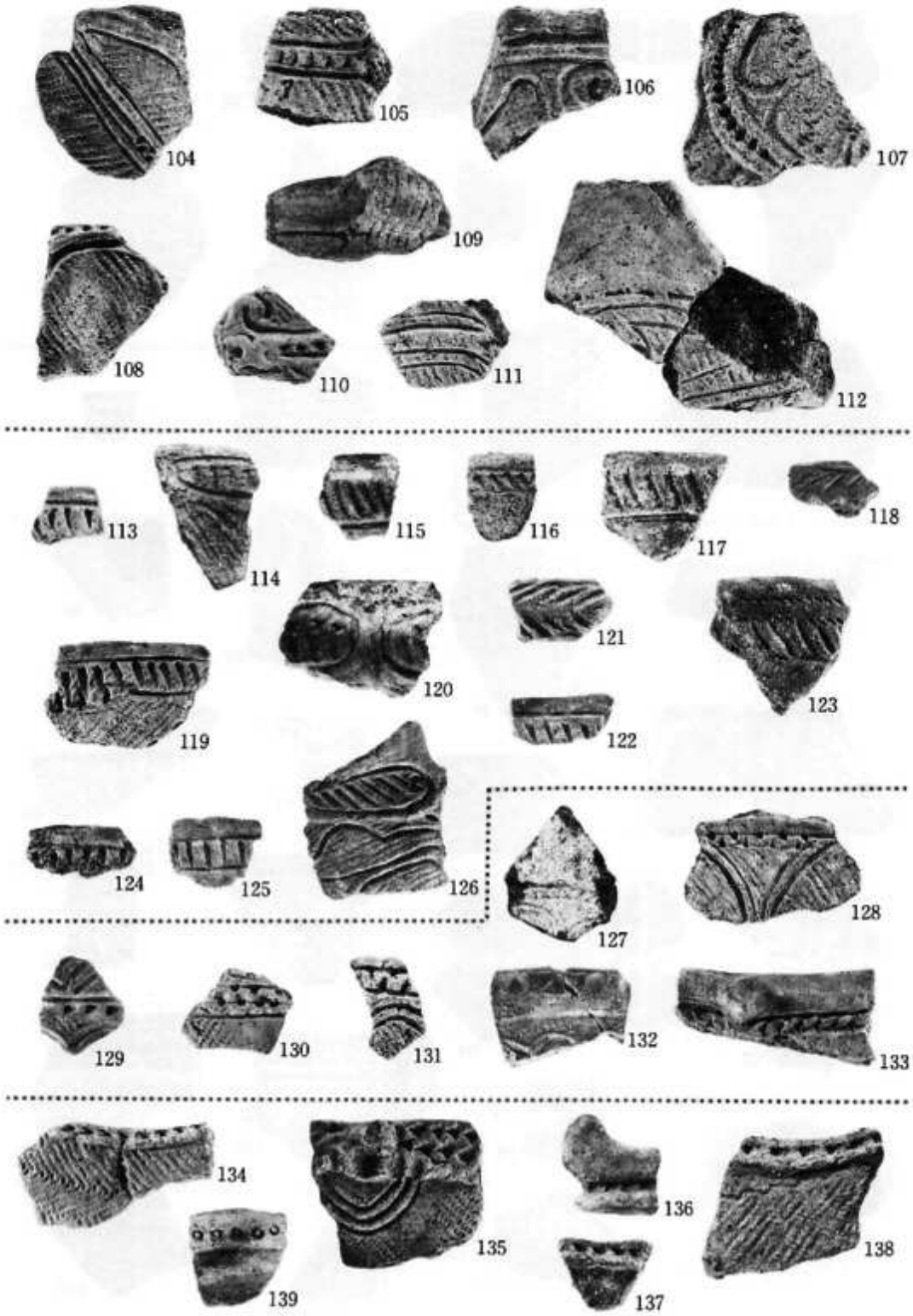
写真図版25　縄文土器(1)



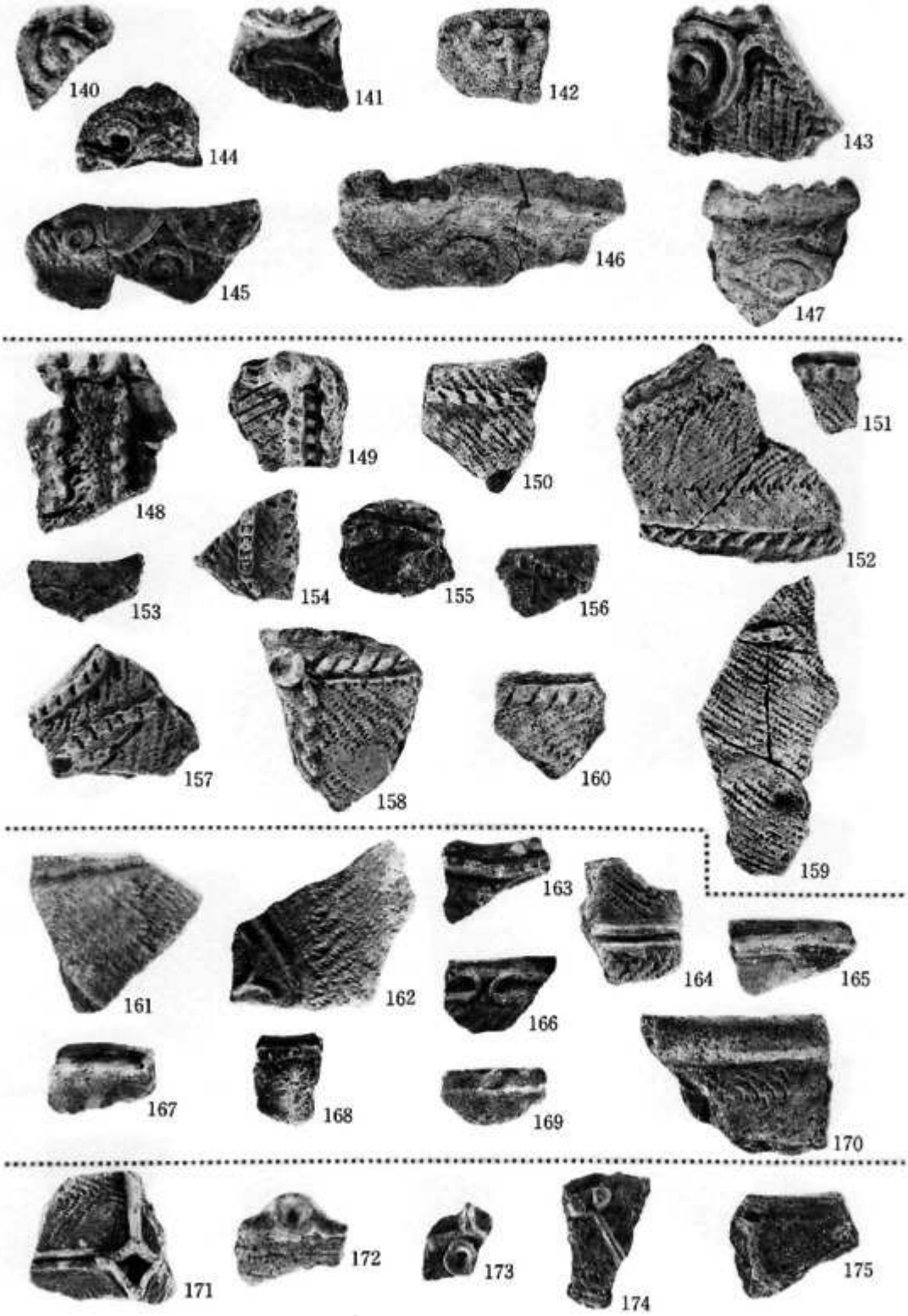
写真図版26　縄文土器(2)



写真図版27　縄文土器(3)



写真図版28　縄文土器(4)



写真図版29　縄文土器(5)

176

177

178

179

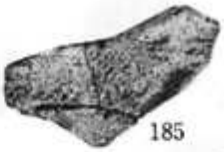
180

181

182

183

184


185

186

187

188

189

190

191

193

192

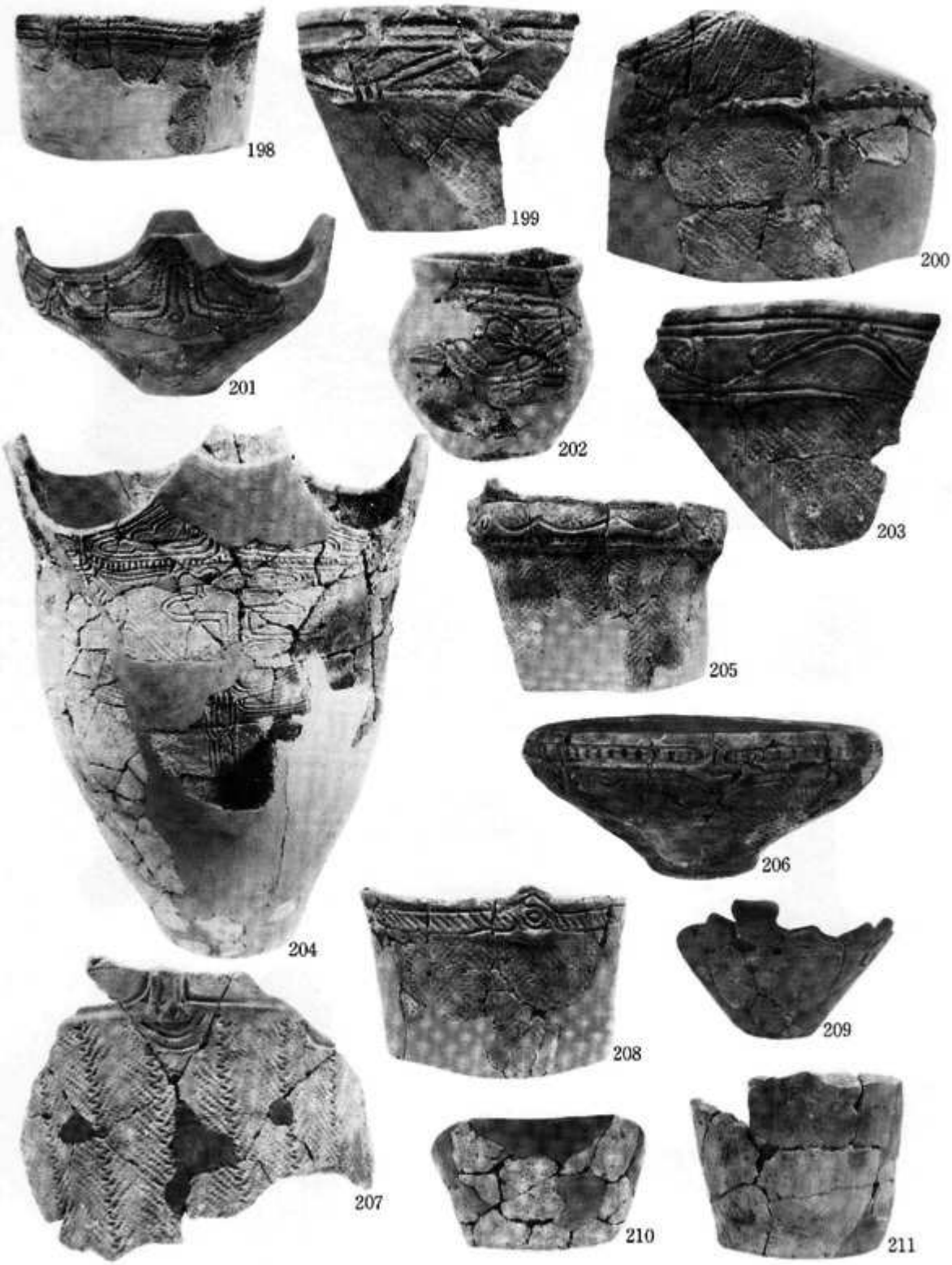
194

195

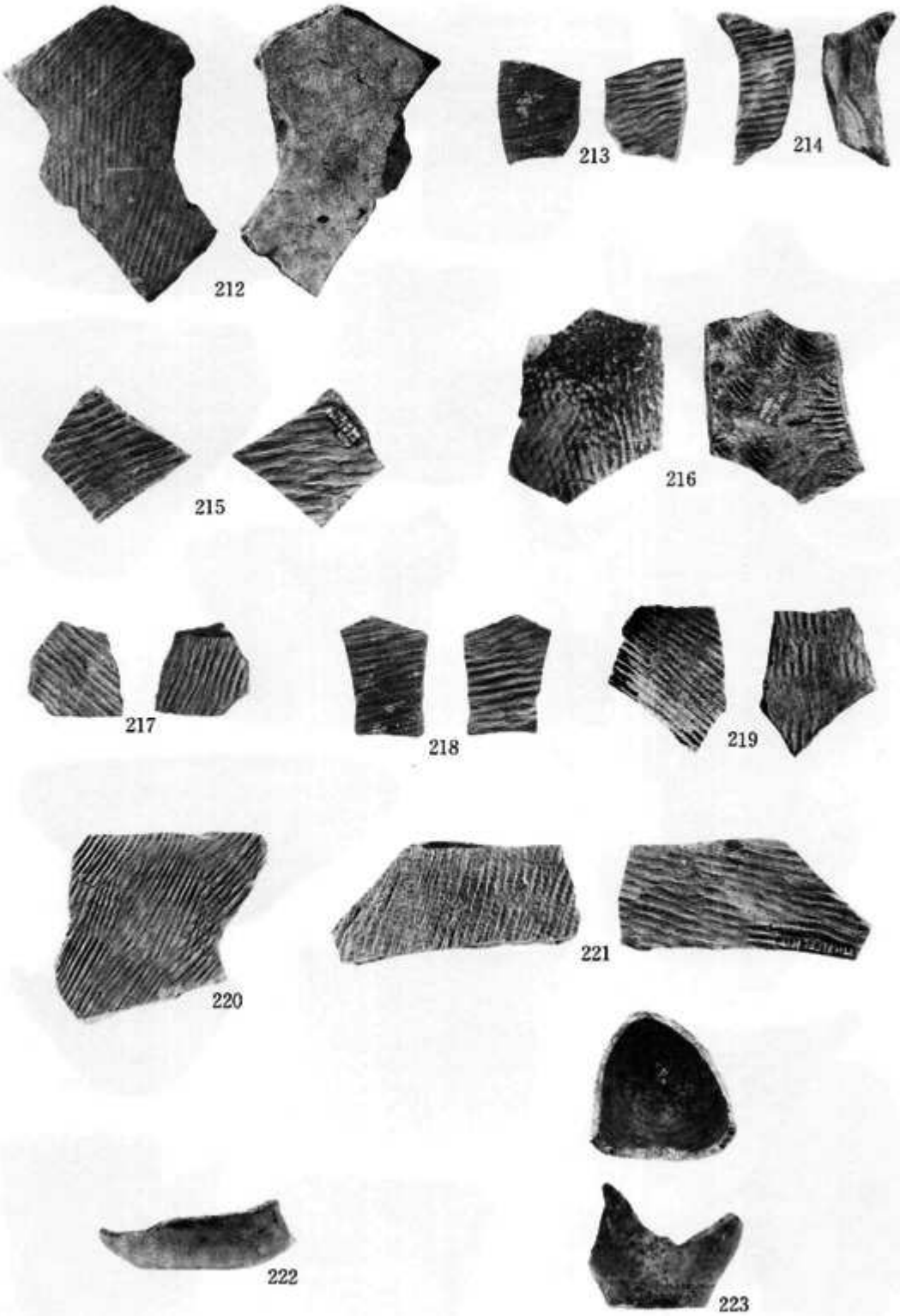
196

197

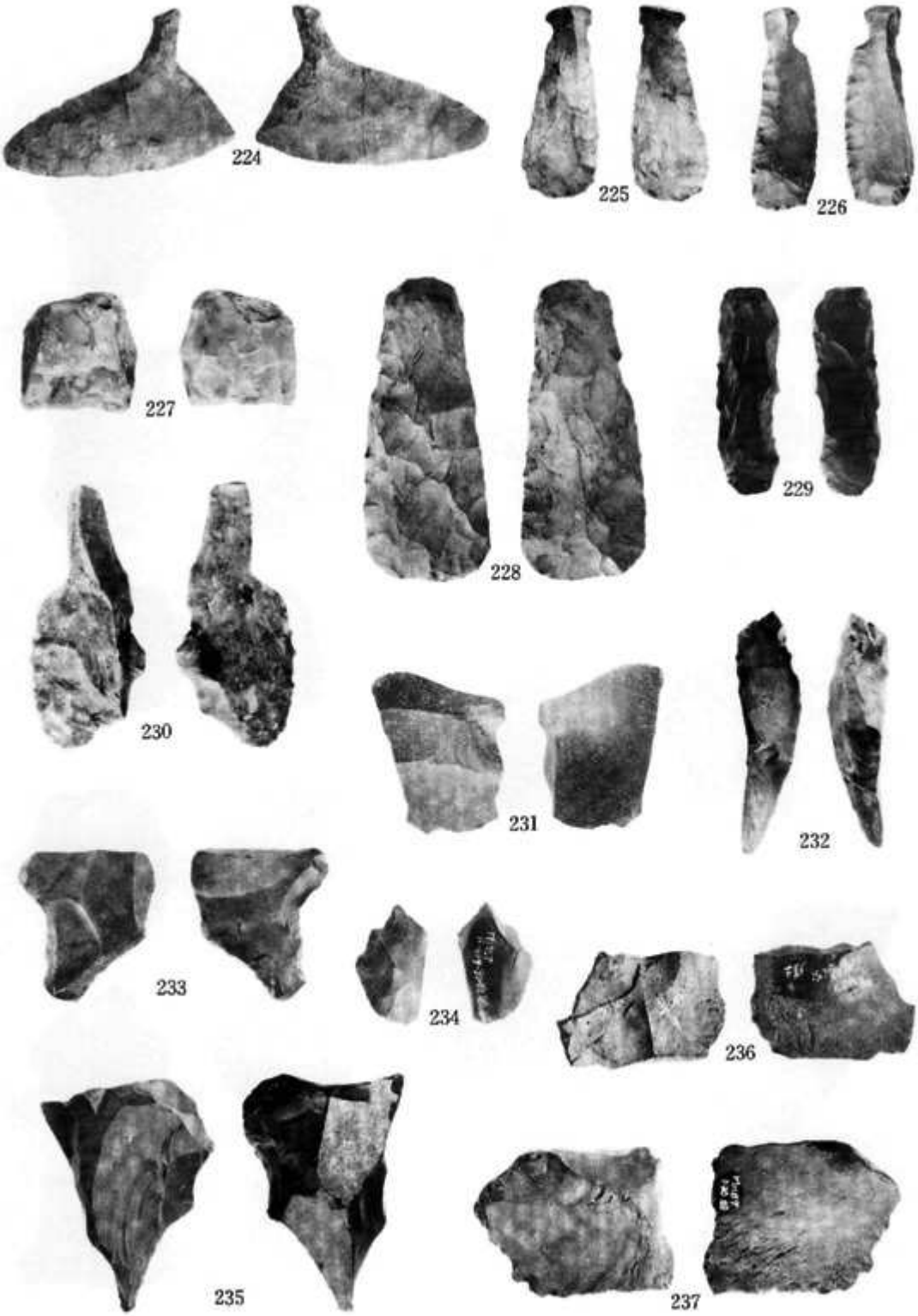
写真図版30　縄文土器(6)



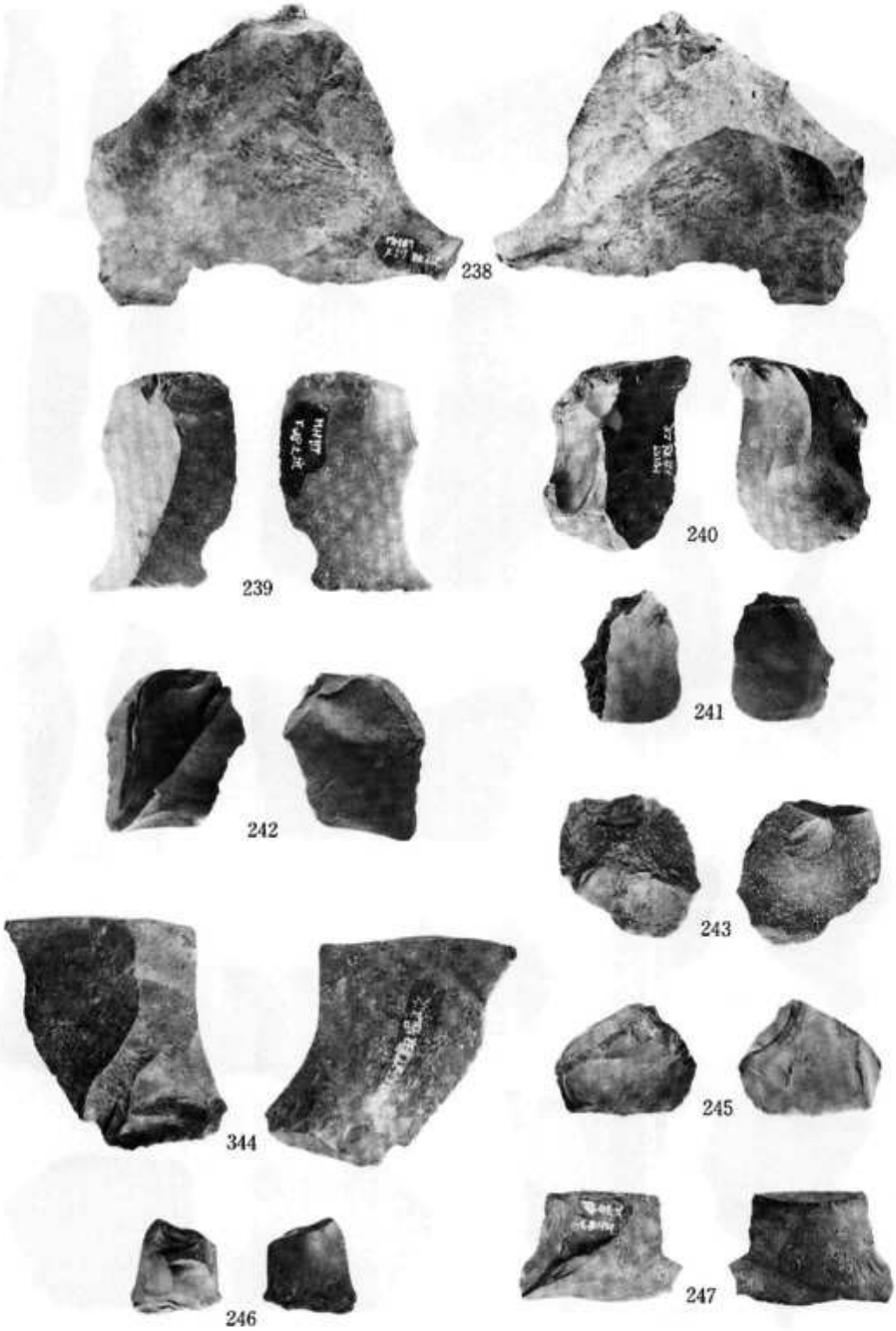
写真図版31　縄文土器(7)



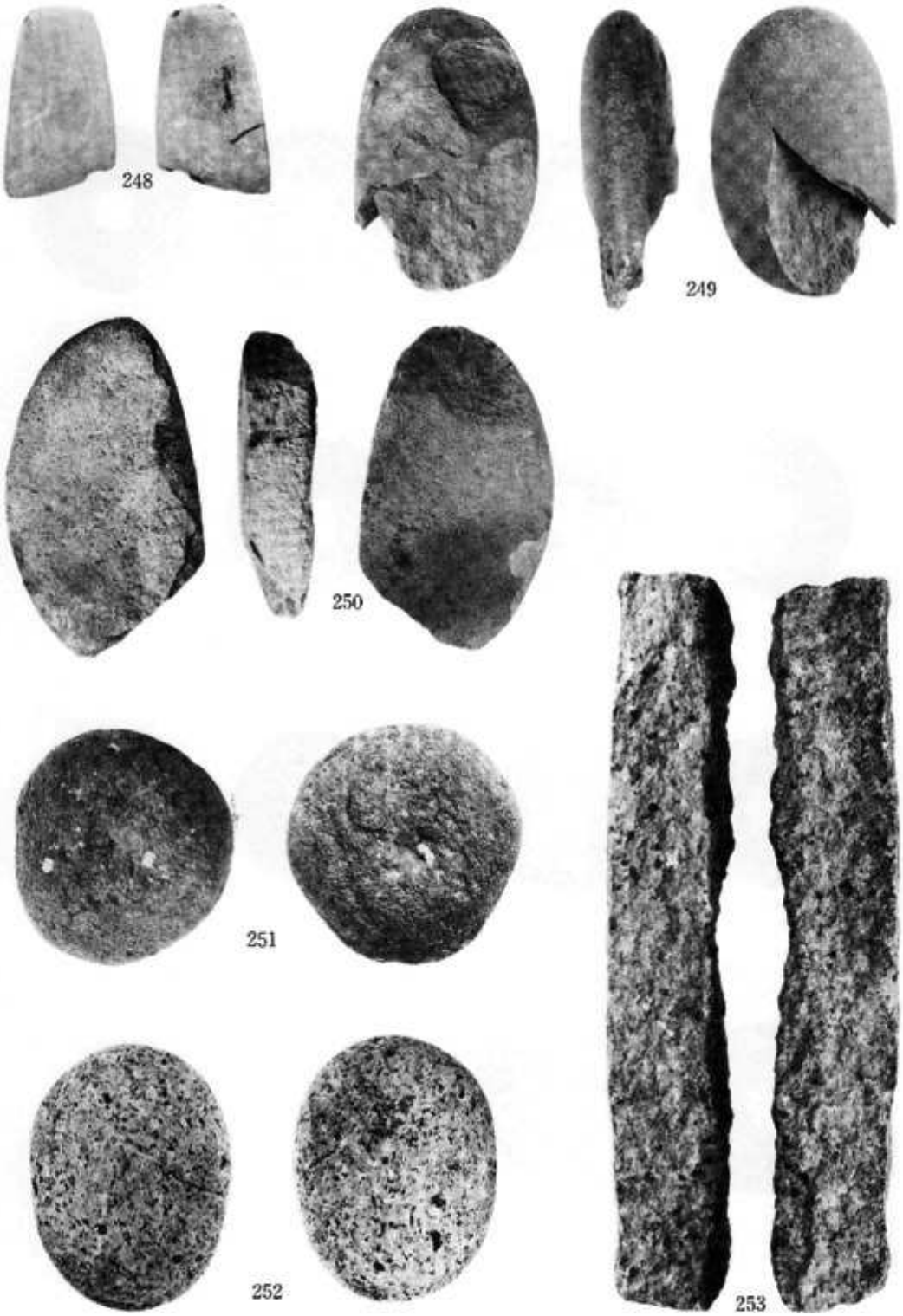
写真図版32　須恵器・土師器・陶磁器



写真図版33　石器(1)

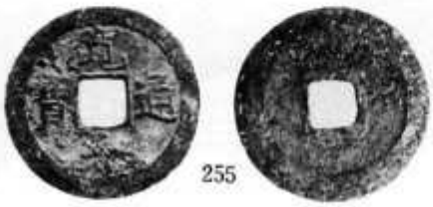


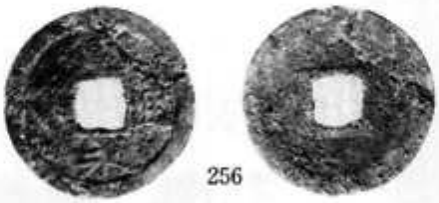
写真図版34　石器(2)

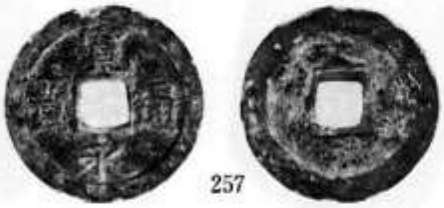


写真図版35　石器(3)

254

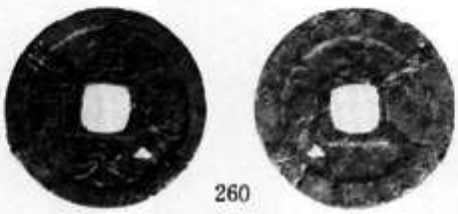

255


256


257

258

259


260

写真図版36　古銭

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所　　長　及川昌二
副所長　鎌田良悦

〔管理課〕

管理課長(兼)　鎌田良悦
課長補佐　伊藤吉郎
主　　事　阿部隆広

〔調査課〕

調査課長　昆野　靖
課長補佐　佐々木嘉直
主任文化財専門調査員　小田野哲憲
〃　三浦謙一
〃　工藤利幸
〃　高橋与右エ門
〃　平井　進
〃　中村良一
〃　中川重紀
文化財専門調査員　藤村敏男
〃　斎藤　實
〃　光井文行
〃　佐瀬　隆
〃　斎藤博司
〃　東海林隆幹
〃　佐々木　弘
〃　川村　均
〃　鈴木貞行

〔資料課〕

資料課長　高橋　薫
主任文化財専門調査員　田鎖寿夫

嘱　託　吉田一男
運転技士兼技能員　佐藤春男

文化財専門調査員　遠藤　修
〃　斎藤邦雄
〃　高橋義介
〃　佐々木信一
〃　小原眞一
〃　村上　修
〃　酒井宗孝
期限付専門職員　菊地達哉
〃　相原伸裕
〃　及川靖世
〃　女鹿文雄
〃　濱田　宏
〃　及川　渉
〃　星　雅之
〃　森下　宏
〃　高橋　堅

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第136集

南日詰遺跡発掘調査報告書

国道4号拡幅工事関連遺跡発掘調査

印刷　平成元年8月25日
発行　平成元年8月30日

発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185
電話 (0196) 38－9001

印刷　株式会社　熊谷印刷
〒020 盛岡市上田一丁目6－49
電話 (0196) 53－4151

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1989